

道路改築（都）鈴見新庄線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

金沢市

額 谷 遺 跡

2006

石 川 県 教 育 委 員 会

(財)石川県埋蔵文化財センター

額^{ぬか} 谷^{だに} 遺 跡

2006

石 川 県 教 育 委 員 会
(財)石川県埋蔵文化財センター



平成10年度（第2次）調査区遠景（南西から）



平成10年度（第2次）調査区完掘状況（南西上から）



平成12年度（第3次）調査区遠景（西から）



平成12年度（第3次）調査区完掘状況（南東上から）

例 言

- 1 本書は額谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は金沢市額谷町地内である。
- 3 調査原因は道路改築(都)鈴見新庄線であり、同事業を所管する石川県土木部都市計画課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は(財)石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成10(1998)年度から平成17(2005)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県土木部都市計画課が負担した。
- 6 現地調査は平成10(1998)年度及び平成12(2000)年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時)は下記のとおりである。
 - (1) 平成10(1998)年度(第2次調査)
 - 期 間 平成10(1998)年4月30日～同年8月31日
 - 面 積 850㎡
 - 担当課 調査部調査第3課
 - 担当者 土屋宣雄(主任主事)、兼田康彦(主事)
 - (2) 平成12(2000)年度(第3次調査)
 - 期 間 平成12(2000)年8月17日～同年12月22日
 - 面 積 1,500㎡
 - 担当課 調査部調査第3課
 - 担当者 安中哲徳(主事)、三谷正輝(嘱託)
- 7 出土品整理は平成15(2003)年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書の作成は平成16(2004)年度、報告書の刊行は平成17(2005)年度に実施し、調査部調査第3課が担当した。執筆分担は下記のとおりである。
 - 編集は安中哲徳(調査部調査第2課主任主事)が行った。
 - 第1章・第3章～5章：安中哲徳(調査部調査第2課主任主事)
 - 第2章：横山 誠(調査部調査第1課嘱託)
- 9 調査には下記の機関・個人の協力を得た。(五十音順、敬称略)
赤澤徳明、石川県土木部都市計画課、県央土木総合事務所(旧金沢土木事務所)、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、河合 忍、楠 正勝、小西正志、下濱貴子、田村昌宏、前田雪恵
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。
 - (4) 遺構記号を次のとおりとする。

P (穴、柱穴)	S B (掘立柱建物跡)	S D (溝)
S I (竪穴式建物跡・平地式建物跡)	S K (土坑、墓坑)	S X (不定形・不明確遺構)
 - (5) 遺構名・番号は、各年度の調査による重複があり、混同をさけるため、千桁目に各調査次の数字を記している。(例)1次調査SI01→SI1001、2次調査SB12→SB2012、3次調査SK123→SK3123
- 12 土器・石製品・鉄製品等の遺物の詳細については遺物観察表において記述する。
- 13 引用文献・参考文献等は、巻末に一括して掲載している。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査原因と分布調査	1
第2節 現地調査	2
第3節 出土品整理・報告書作成・刊行	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 平成10（1998）年度の調査	6
第1節 調査区の概要	6
第2節 遺構と遺物	9
第4章 平成12（2000）年度の調査	37
第1節 調査区の概要	37
第2節 遺構と遺物	38
第5章 ま と め	69
第1節 弥生時代～古墳時代にかけての建物と集落	69
第2節 中世～近世にかけての墓地	69
第3節 既往の調査から	70

写真図版

報告書抄録

引用文献・参考文献

挿図目次

第1図	年度別調査区位置図	2
第2図	遺跡位置図	3
第3図	額谷遺跡と周辺の主要遺跡	4
第4図	平成10年度(第2次)調査区 グリッド設定図	6
第5図	額谷遺跡 全体図(1)	7・8
第6図	平成10年度(第2次)調査区 竪穴系建物配置図	12
第7図	平成7年度(第1次)調査区(1)遺構平面図	13
第8図	平成7年度(第1次)調査区(2)・平成10年度(第2次)調査区(1)遺構平面図	14
第9図	平成7年度(第1次)調査区(3)・平成10年度(第2次)調査区(2)遺構平面図	15
第10図	平成10年度(第2次)調査区(3)遺構平面図	16
第11図	平成10年度(第2次)調査区(4)遺構平面図	17
第12図	平成10年度(第2次)調査区(5)遺構平面図	18
第13図	平成10年度(第2次)調査区(6)遺構平面図	19
第14図	平成10年度(第2次)調査区 建物(SI2001・SB2001他)土層断面・出土遺物位置図	21
第15図	平成10年度(第2次)調査区 建物(SI2002・2003・2004他)土層断面・出土遺物位置図	22
第16図	平成10年度(第2次)調査区 建物(SI2005・SB2004他)土層断面・出土遺物位置図	23
第17図	平成10年度(第2次)調査区 土層断面図(1)	24
第18図	平成10年度(第2次)調査区 土層断面図(2)	25
第19図	平成10年度(第2次)調査区 土層断面図(3)	26
第20図	平成10年度(第2次)調査区 土層断面図(4)	27
第21図	平成10年度(第2次)調査区 土層断面図(5)	28
第22図	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(1)	29
第23図	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(2)	30
第24図	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(3)	31
第25図	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(4)	32
第26図	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(5)	33
第27図	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(6)	34
第28図	平成12年度(第3次)調査区 グリッド設定図	37
第29図	額谷遺跡 全体図(2)	39・40
第30図	平成12年度(第3次)調査区(1)遺構平面図	43
第31図	平成12年度(第3次)調査区(2)遺構平面図	44
第32図	平成12年度(第3次)調査区(3)遺構平面図	45
第33図	平成12年度(第3次)調査区(4)遺構平面図	46
第34図	平成12年度(第3次)調査区(5)遺構平面図	47
第35図	平成12年度(第3次)調査区(6)遺構平面図	48
第36図	平成12年度(第3次)調査区(7)遺構平面図	49
第37図	平成12年度(第3次)調査区(8)遺構平面図	50
第38図	平成12年度(第3次)調査区(9)遺構平面図	51
第39図	平成12年度(第3次)調査区(10)遺構平面図	52
第40図	平成12年度(第3次)調査区(11)遺構平面図	53
第41図	平成12年度(第3次)調査区 谷部遺構(SD3014・SD3015・P3056他)土層断面・出土遺物位置図	55
第42図	平成12年度(第3次)調査区 平坦部遺構(墓1～6)土層断面・出土遺物位置図	56
第43図	平成12年度(第3次)調査区 南西斜面部遺構(墓7～15)土層断面・出土遺物位置図	57

第44図	墓 2-SK3002 土器・焼土・炭検出状況図	58
第45図	墓 9-SX3003 配石検出状況・変遷図	59
第46図	平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(1)	60
第47図	平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(2)	61
第48図	平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(3)	62
第49図	平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(4)	63
第50図	平成12年度(第3次)調査区出土遺物(1)	64
第51図	平成12年度(第3次)調査区出土遺物(2)	65
第52図	平成12年度(第3次)調査区出土遺物(3)	66
第53図	平成12年度(第3次)調査区出土遺物(4)	67
第54図	高尾城跡出土遺物(1)	71
第55図	高尾城跡出土遺物(2)	72
第56図	高尾城跡出土遺物(3)	73

表目次

第1表	平成10年度(第2次)調査区主要遺構一覧表	20
第2表	平成10年度(第2次)調査区出土遺物観察表(1)	35
第3表	平成10年度(第2次)調査区出土遺物観察表(2)	36
第4表	平成12年度(第3次)調査区主要遺構一覧表	54
第5表	平成12年度(第3次)調査区出土遺物観察表(1)	67
第6表	平成12年度(第3次)調査区出土遺物観察表(2)	68
第7表	高尾城跡出土遺物観察表	74

図版目次

図版1	平成10年度(第2次)調査区①	図版14	平成12年度(第3次)調査区⑧
図版2	平成10年度(第2次)調査区②	図版15	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(1)
図版3	平成10年度(第2次)調査区③	図版16	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(2)
図版4	平成10年度(第2次)調査区④	図版17	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(3)
図版5	平成10年度(第2次)調査区⑤	図版18	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(4)
図版6	平成10年度(第2次)調査区⑥	図版19	平成10年度(第2次)調査区出土遺物(5)・ 平成12年度(第3次)調査区出土遺物(1)
図版7	平成12年度(第3次)調査区①	図版20	平成12年度(第3次)調査区出土遺物(2)
図版8	平成12年度(第3次)調査区②	図版21	平成12年度(第3次)調査区出土遺物(3)
図版9	平成12年度(第3次)調査区③	図版22	高尾城跡出土遺物(1)
図版10	平成12年度(第3次)調査区④	図版23	高尾城跡出土遺物(2)
図版11	平成12年度(第3次)調査区⑤	図版24	高尾城跡出土遺物(3)
図版12	平成12年度(第3次)調査区⑥		
図版13	平成12年度(第3次)調査区⑦		

第1章 調査に至る経緯と経過

金沢市額谷町地内において交通渋滞の緩和・加賀産業道路へのアクセスなどを目的として都市計画道路鈴見新庄線の道路改築が計画された。事業計画を受けて石川県土木部都市計画課から石川県教育委員会に埋蔵文化財の取り扱いについての照会があった。事業にかかる部分が周知の遺跡であり、平成9年8月21日及び平成10年8月24日の試掘調査により埋蔵文化財が確認されたことから、石川県金沢土木事務所都市施設課、石川県教育委員会文化財課と協議を行なった。道路改築事業をこのまま行なった場合、道路部分にかかる埋蔵文化財が破壊される可能性があるため、文化財保護法の規定により、事業に先立って、同事業を所管する石川県土木部都市計画課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼し、財団法人石川県埋蔵文化財センターにより発掘調査等による記録保存を行なうこととなった。

また、第1次調査が平成7年9月25日から12月15日まで石川県立埋蔵文化財センターにより行われている。調査対象面積は1,500㎡で、平成10年2月に報告書が刊行されている。

第1節 調査原因と分布調査

調査原因 本書で報告する額谷遺跡の発掘調査は、都市計画道路鈴見新庄線の整備工事に起因する。この路線は東部環状道路、加賀産業開発道路とともに金沢都市圏の外環状道路に位置付けられる幹線道路である。このうち東部環状道路については建設省がすでに事業に着手しており、鈴見新庄線においても、街路事業、土地区画整理事業等による整備が順次進められている。

当時の鈴見新庄線は人家が連担しており、道路が曲がりくねっているうえ、幅員が狭いにも関わらず、約10,000台/12hと過密な交通量があり、人家への飛び込み事故や児童の交通事故が相次ぎ、交通の危険地帯となっていた。また、周辺地区の宅地開発により、今後ますます交通量の増大が予想され、さらなる交通安全の確保が求められていた。

このため、道路を幅員の広い車道と歩行者や自転車がゆったりと通行できる歩道に分離し、交通の円滑化と額谷・四十万地区の生活環境の保全と快適な町づくりを目的とし、石川県土木部都市計画課（以下、都市計画課）が推進している金沢市街地都市計画事業の一環として、幹線道路を整備する計画が策定されたものである。道路の幅員は25mで、幅員構成は自転車歩行者道 4.5m×2、路肩 0.5m×2、車道 6.5m×2、中央分離帯 2.0mである。

分布調査 石川県教育委員会文化財課は、事業の施工を担当する石川県県央土木総合事務所（旧石川県金沢土木事務所）の工事計画の提示に対して、埋蔵文化財の有無を事前に確認する分布調査を実施する必要があり、施工についてはその結果をもって協議する方針で対処してきた。埋蔵文化財分布調査は、了解が得られた区間から順次実施している。それまでに分布調査を実施した七瀬川から北側の区間では、遺跡は発見されていない。

本書で報告する額谷遺跡の発掘調査に係る工事区間については、周知の額谷遺跡（県No.01104）の範囲に重複し、隣接地で平成7年度に石川県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われていることから、額谷遺跡の分布状況を試掘調査で再確認し、その結果をもって再度協議する必要があると判断し、バックホーを使用した試掘調査を、平成9年8月21日及び平成10年8月24日に実施した。調査区域は平成7年度発掘調査区域の東側と南側のを対象としている。その結果、埋蔵文化財の分布が確

認められ、両地区とも額谷遺跡の一部であることが判明した。

今後の対応については、埋蔵文化財が分布する区域については工事前に発掘調査が必要であると回答し、発掘調査については、平成10年度及び平成12年度に実施することとなった。

第2節 現地調査(第1図)

第2次調査 現地調査に際しては、事前に県土木事務所担当者とは打ち合わせを行ない、用地境・調査範囲の確認、立木の伐採、排土の処理、仮設事務所の設置場所、作業員の手配等について調整したのち、平成10年4月30日から着手した。表土の除去はバックホーを用いて行い、遺構検出・掘り下げから作業員を投入した。図化については、ラジオコントロールヘリコプター撮影による空中写真測量図化を業者委託で8月11日に実施した。作業は8月31日に完了、調査区を引き渡し、現地調査は終了した。調査面積は850㎡であり、土屋宣雄（調査部調査第3課主任主事）、兼田康彦（調査部調査第3課主事）（当時）が担当した。



第1図 年度別調査区位置図(S=1/5,000)

第3次調査 現地調査に際しては、事前に県土木事務所担当者とは打ち合わせを行ない、用地境・調査範囲の確認、立木の伐採、排土の処理、仮設事務所の設置場所、作業員の手配等について調整したのち、平成12年8月17日から着手した。表土の除去はバックホーを用いて行い、遺構検出・掘り下げから作業員を投入した。図化については、ラジオコントロールヘリコプター撮影による空中写真測量図化を業者委託で10月31日及び11月24日に実施した。作業は12月22日に完了、調査区を引き渡し、現地調査は終了した。調査面積は1,500㎡であり、安中哲徳（調査部調査第3課主事）、三谷正輝（調査部調査第3課嘱託）（当時）が担当した。

第3節 出土品整理・報告書作成・刊行

出土品整理 出土遺物の整理作業は主に（財）石川県埋蔵文化財センター企画部整理課が、平成15年度に行った。内容は、遺物洗浄、記名、分類、接合、実測、遺物・遺構実測図のトレース作業である。作業は三浦純夫（調査部調査第3課長）（当時）が担当した。

報告書作成・刊行 平成16年度は出土遺物の写真撮影、原稿執筆、挿図・図版作成を行ない、発掘調査報告書の作成・編集を行った。作業は安中哲徳（調査部調査第2課主事）が担当し、横山誠（調査部調査第3課嘱託）（当時）が補佐した。また、平成17年度に印刷し刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境(第2図)

額谷遺跡は石川県金沢市に所在する。金沢市は南北に長い石川県の中央よりやや南に位置し、北西は日本海・内灘町、北は津幡町、西から南は白山市・野々市町、東は富山県南砺市・小矢部市と接する。人口約45万人を誇り加賀藩城下町の風情が残り、商業・伝統工芸・観光などの産業を基盤としている北陸地方の中心都市である。

また、県内東部には標高2702mの御前峰を最高峰とする白山山系が連なり、そこから幾多の河川が日本海へと注ぎ込んでいる。市域も白山山系を水源とする犀川・浅野川などの主要河川が流れ、肥沃な金沢平野が形成されており、自然や水の豊かな都市である。

遺跡の立地する額谷町は金沢市の南東部に位置し白山市鶴来地区に近接するような場所であり、円光寺・高尾方面から加賀産業道路への接続道路である鶴来往来(旧白山街道)が町の中心を通る。地理的には白山山系から広がる加賀山地より、北に延びる富樫山地の麓から平野に位置している。



第2図 遺跡位置図

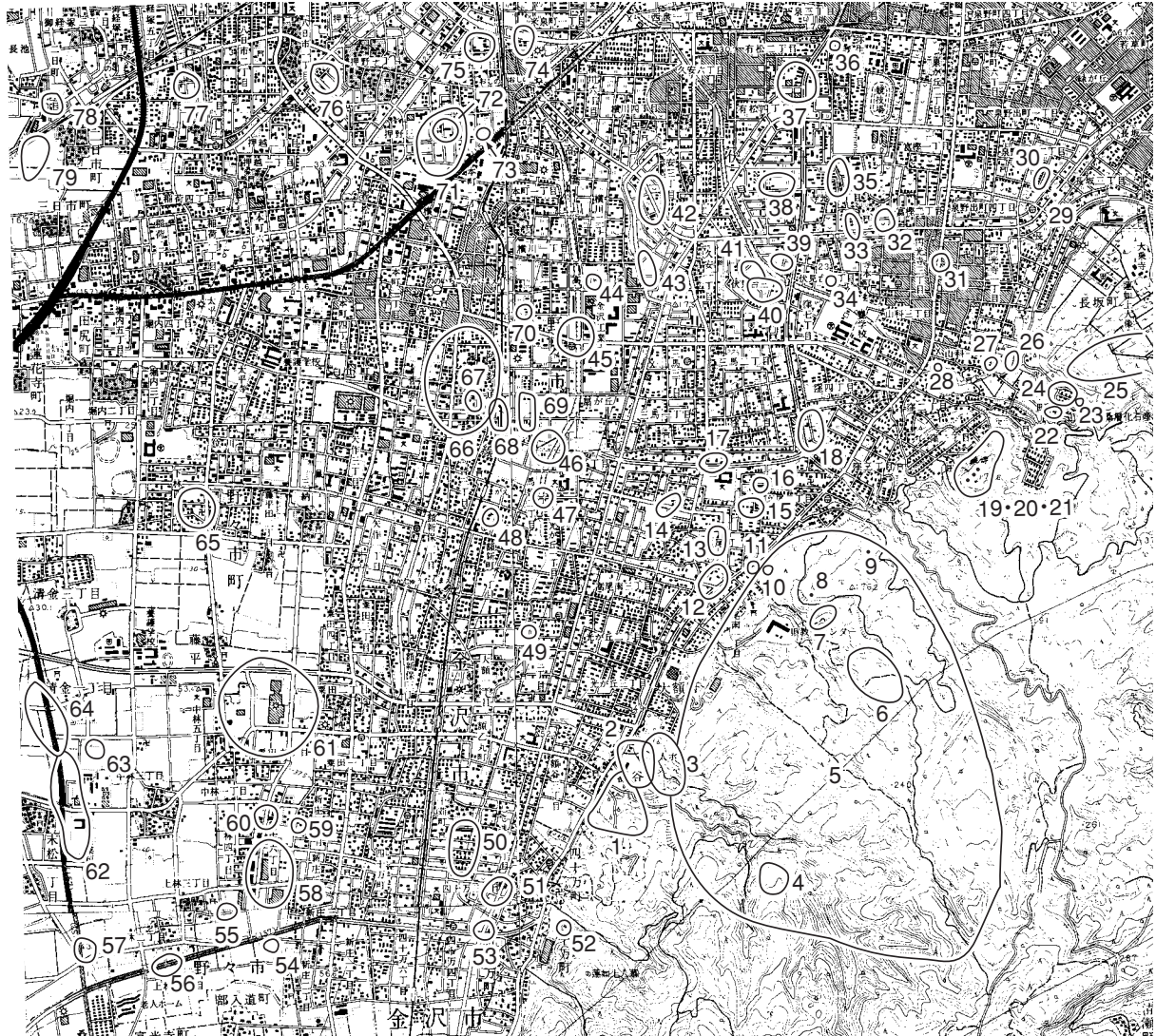
額谷(ヌカダニ)の地名が示すように富樫山地より流れ出る七瀬川(額谷川)により谷地形が形成されており、遺跡はその谷筋の南側にあたる。遺跡東の山地部分は標高約170mで、中世において加賀国の守護であった富樫氏が詰城として整備した高尾城跡にあたる。裾部分は、白山山系より流れ出る県内随一の河川手取川によって形成された白山市鶴来町を頂扇とする手取川扇状地の東の扇端部分にあたる。この手取川からは幾多もの河川が分水しており、遺跡西部には手取川の支流高橋川が流れる。高橋川は七瀬川などの水を得て伏見川へ合流する。さらに下流で犀川と合流し日本海へと注いでいる。山地から平野へと地形の変換地に位置していることは大きな特徴である。

第2節 歴史的環境(第3図)

額谷遺跡は平成7年度に石川県立埋蔵文化財センターにより発掘調査が行なわれている。まずその調査の概要を紹介し、額谷遺跡の立地する周辺地域の主要な遺跡について、時代ごとに簡単にではあるが概観を述べていきたい。

額谷遺跡 平成7年度調査区は今回の調査区の西側に位置する。調査原因は都市計画道路鈴見新庄線の整備事業である。主に弥生時代後期後半から終末期の竪穴系建物・掘立柱建物などが多数確認された。水系を一望する希少な丘陵地の選択、特大型の竪穴系建物の存在、多数の鉄器の出土などから周辺の集落より卓越した様相であると評価されている。また近世の火葬場・墓地跡なども検出された。

旧石器・縄文時代 旧石器時代の遺跡は今のところ付近では発見されていない。遺跡付近で最も古い遺跡である額谷カネヤブ遺跡は縄文時代中期中葉頃の遺跡で、竪穴建物1棟が確認されたものの、



第3図 額谷遺跡と周辺の主要遺跡 (S=1/4,000)

1. 額谷遺跡 (No.01104・弥生～近世)
2. 額谷ドウシダ遺跡 (No.01105・縄文～平安)
3. 額谷カネカヤブ遺跡 (No.01106・縄文～中世)
4. 御廟谷墳墓群 (No.01103・中世)
5. 高尾城跡 (No.01008・室町)
6. 高雄山寺遺跡 (No.01107・不詳)
7. 狐青横穴群 (No.01108・古墳)
8. 高尾古墳 (No.01109・古墳)
9. 高尾ジョウザブロウ横穴 (No.01111・古墳後期)
10. 高尾B遺跡 (No.01110・奈良)
11. 高尾C遺跡 (No.01113・弥生、古墳)
12. 高尾A遺跡 (No.01112・奈良、平安)
13. 高尾天神堂遺跡 (No.01114・平安)
14. 高尾公園遺跡 (No.01119・平安)
15. 高尾新町遺跡 (No.01115・奈良、平安)
16. 高尾新マトバ遺跡 (No.01116・奈良、平安)
17. 高尾イシナ塚古墳 (No.01118・古墳)
18. 窪遺跡 (No.01117・古墳、中世)
19. 満願寺山1～4号墳 (No.01143・古墳)
20. 満願寺山岩跡 (No.01144・中世)
21. 満願寺山遺跡 (No.01173・弥生)
22. 山科遺跡 (No.01145・縄文、奈良～室町)
23. 山科草山遺跡 (No.01147・奈良、平安)
24. 山科かねつき堂遺跡 (No.01146・縄文、奈良、平安、室町)
25. 大乘寺山B遺跡 (No.01149・古墳)
26. 山科かわらば遺跡 (No.01140・江戸)
27. 山科やなした遺跡 (No.01141・奈良、平安)
28. 山科かなした遺跡 (No.01142・古墳)
29. 長坂狐塚古墳 (No.01170・古墳)
30. 泉野出町狐田遺跡 (No.01137・縄文)
31. 円光寺A遺跡 (No.01139・縄文)
32. 寺地A遺跡 (No.01135・縄文、奈良、平安)
33. 寺地B遺跡 (No.01134・奈良、平安)
34. 円光寺B遺跡 (No.01133・縄文)
35. 有松C遺跡 (No.01128・縄文～古墳)
36. 有松B遺跡 (No.01127・平安)
37. 有松D遺跡 (No.01126・古墳、平安、室町)
38. 有松A遺跡 (No.01129・縄文)
39. 寺地シンドロ遺跡 (No.01130・古墳～平安)
40. 円光寺向田遺跡 (No.01132・奈良、平安)
41. 寺地向田遺跡 (No.01131・奈良)
42. 久安さんまい川遺跡 (No.01124・平安)
43. 久安トノヤシキ遺跡 (No.01123・古墳)
44. 高橋セボネ遺跡 (No.16041・弥生、奈良)
45. 扇が丘ゴシヨ遺跡 (No.16042・弥生～中世)
46. 扇が丘ハワイゴク遺跡 (No.01122、16043・縄文～中世)
47. 扇台遺跡 (No.01121・弥生、平安)
48. 馬替遺跡 (No.01400・縄文)
49. 大額キョウデン遺跡 (No.01120・弥生～古代)
50. 三ノ刈遺跡 (No.01339・奈良～平安)
51. 四十万遺跡 (No.01398・縄文)
52. 四十万中世墓群 (No.01005・中世)
53. 四十万B遺跡 (No.01002・平安、中世)
54. 上新庄ニシウラ遺跡 (No.16002・古墳、奈良)
55. 上林テラダ遺跡 (No.16003・奈良)
56. 上林遺跡 (No.16001・弥生、平安)
57. 木津遺跡 (No.08012・弥生～中世)
58. 上林新庄遺跡 (No.16004・縄文、古墳～平安)
59. 下新庄タナカダ遺跡 (No.16007・奈良、平安)
60. 下新庄アラチ遺跡 (No.16006・奈良)
61. 栗田遺跡 (No.16008・縄文、奈良、平安)
62. 末松A遺跡 (No.16009・縄文、平安)
63. 末松信濃館跡 (No.16021・中世)
64. 清金アガトウ遺跡 (No.16022・平安～中世)
65. 三林館跡 (No.16023・安土桃山)
66. 富樫館跡 (No.16039・中世)
67. 富樫館鬼ヶ窪地区 (中世)
68. 富樫館虻土居地区 (中世)
69. 扇が丘ヤグラダ遺跡 (No.16043・平安)
70. 高橋ウバガタ遺跡 (No.16040・弥生末)
71. 押野タチナカ遺跡 (No.16036・弥生～古墳)
72. 押野館跡 (No.16035・室町)
73. 押野ウマワタリ遺跡 (No.16037・弥生後期)
74. 米泉遺跡 (No.01125・縄文、弥生、平安)
75. 押野大塚遺跡 (No.16038・縄文後晩期、弥生)
76. 上宮寺跡 (No.01071、16034・室町)
77. 野代遺跡 (No.16033・縄文)
78. 長池キタバシ遺跡 (No.16025・縄文後晩期、奈良)
79. 二日市イシバチ遺跡 (No.16024・中世)

※Noは石川県遺跡地図の遺跡番号

生活の痕跡がほとんどなくキャンプサイト的な遺跡として評価されている。中期以降になると山間部から山裾よりも平野部に立地する遺跡が多くなる。馬替遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡、押野タチナカ遺跡などの後・晩期の遺跡はその傾向が顕著に見られる。

弥生時代 弥生時代の遺跡については、水田を中心とした生業への変化により、水利の得やすい平野部を中心に多く確認でき、特に後期後半から終末期において増大する傾向がある。押野タチナカ遺跡では明確な遺構は確認できなかったが前期の柴山出村式土器が出土している。前期から中期の確認された遺跡は数としてもごく少数である。逆に額谷ドウシダ遺跡、大額キョウデン遺跡、扇が丘ゴシヨ遺跡、扇台遺跡、押野タチナカ遺跡、押野大塚遺跡、高橋セボネ遺跡など後期から終末期にかけて集落遺跡は数も多く確認され、竪穴建物跡・掘立柱建物跡などの遺構、土器・石器などの遺物も数多く出土している。遺跡付近は肥沃な平野で河川も多く長期に亘る生活基盤が構築される要素があるものの前期・中期の遺跡が少ない理由はなぜなのか、今後検討していかなければならない。

古墳時代 古墳時代の遺跡については山間部では狐青横穴群、高尾古墳、満願寺古墳群など、平野部では大額キョウデン遺跡などが確認されている。大額キョウデン遺跡では前期から中期の土器廃棄土坑より勾玉、甕・壺・鉢・高杯・器台などの土器と多数の炭化物が確認されており、何らかの祭祀行為が行なわれていた可能性がある。平野部のところどころに古墳や集落遺跡が点在はしているものの、遺跡の詳細はあまりわかっていない。

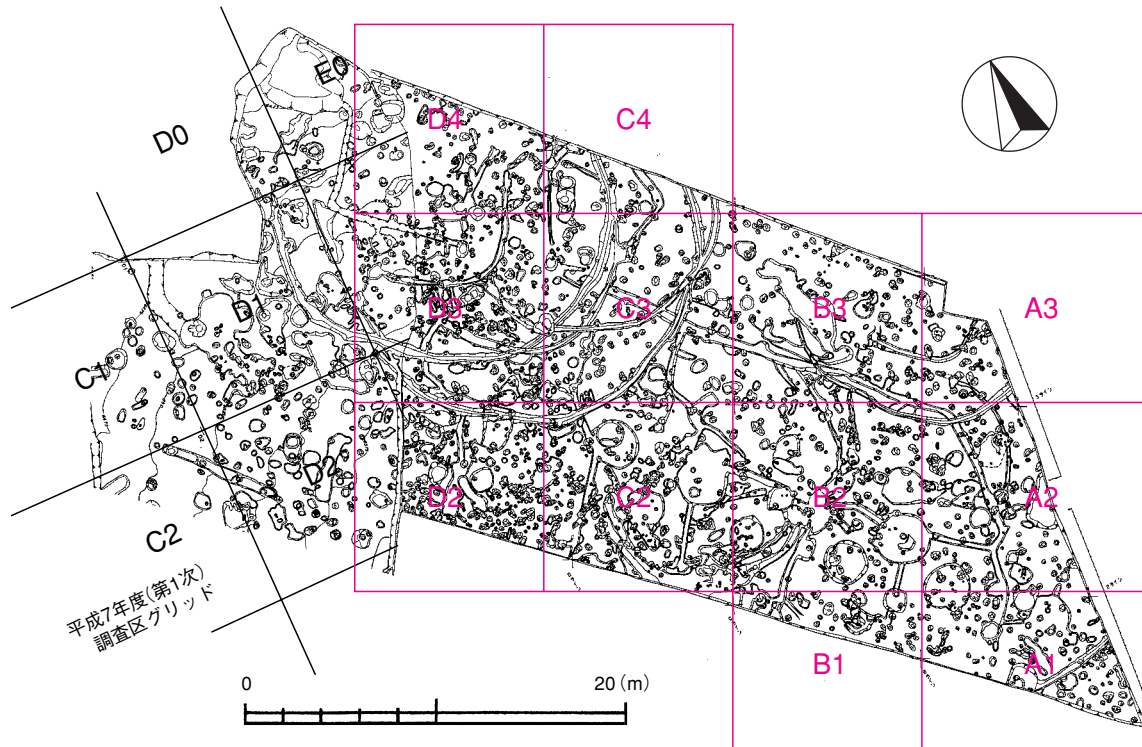
古代 古代（奈良・平安時代）の遺跡については、額谷カネヤブ遺跡、大額キョウデン遺跡、高橋セボネ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡など多数の遺跡が確認できる。額谷カネヤブ遺跡では仏器と考えられる須恵器や、遺物を埋納した地鎮遺構が多く検出され、日常生活の中で祭祀が行なわれていたことを示し、古代から中世にかけて寺院が存在した可能性がある。扇が丘ハワイゴク遺跡や扇が丘ヤグラダ遺跡では平安時代の庇付総柱建物跡を検出し、宗教的な建物の可能性が考えられる。

中世 鎌倉から室町時代かけて加賀国の守護であった富樫氏の関連する遺跡が多数確認できる。まず野々市町住吉に守護所である富樫館跡がある。大規模な堀跡などが確認されている。堀によって方形に区画された中に館などの建物跡などの存在が推測できる。この富樫館跡北側には南北朝初期に守護となった富樫高家の弟家善が居を構えていたとされる押野館跡が存在する。館本体は未調査だが、「タチナカ」の地名が残っている押野タチナカ遺跡の発掘調査において堀跡などが確認されており全貌が徐々に明らかになりつつある。これら城館を中心として付近には屋敷地・集落などが形成され、国内の政治・経済の中心であったと想定される。富樫館跡から東に約2kmに位置し、額谷遺跡の東側にあたる高尾山には富樫氏の詰城であった高尾城跡が確認されている。高尾城は長享2年（1488）に守護富樫政親が一向一揆勢に攻められ自刃した場所でもある。かなり広範囲な城であり、城郭・生活場・墓地など10地区ほどに分けられる。そのひとつである御廟谷地区は富樫一族の墓地といわれている。また周辺の高尾山南の四十万中世墓群などでは五輪塔などの石塔類が確認されている。

なお、額谷町は神護景雲2（西暦768）年創建と伝える延喜式内社である額東神社を鎮守としている。かつては額七か村の総社で、集落の東方の山麓にあったものが長享年間（西暦1487～1489年）の一向一揆による戦乱で消失し、集落内の現在地へ移転したという。また、江戸時代から昭和初期にかけては火鉢等の材料として重宝された「額谷石」を産出しており、七瀬川上流の山中にはその石切り場が見られる。現在の額谷町は宅地化が進行する一方で、福祉施設や各種の公園を集積するなど「憩いの場」づくりにも余念がないようである。

第3章 平成10(1998)年度の調査

第1節 調査区の概要(第4・5図)



第4図 平成10年度(第2次)調査区 グリッド設定図(S=1/400)

平成10年度(第2次)の調査区は平成7年度(第1次)調査区の東側にあたり、平成12年度(第3次)調査区南側に位置していた墓地(近世末期～現代)の移転先となる場所として調査が行われた。

平成7年度の調査では、弥生時代後期後半～終末に属する竪穴系建物10棟、掘立柱建物8棟、近世末期～近代初頭の火葬場遺構等が確認され、平成9年度に発掘調査報告書が刊行されている。

第2次調査区は富樫丘陵の先端部の緩斜面に位置しており、標高は64～68m代を測る。眼下の金沢、野々市、松任などの平野部はもとより、好天時にはその先の日本海までを視野に含めるパノラミックな眺望を誇る。地形は南東から北西の方へと下降しているが、調査区内の傾斜は等高線の間隔が示すように非常に緩やかであり、概ね水平方向15mに対して垂直1m程度の比高差を測るに過ぎない。調査区の南東側、すなわち山地側へはしばらく緩傾斜地が続いており、畑、果樹園として利用されている。現地は、周囲同様果樹園として利用されていたため、果樹痕跡や散水用の水道管理設溝による攪乱が遺構上部にまで及び、遺構上面は大きく削平受けている。層序は厚さ20～30cmの表土を除去するとすぐに非常に安定した地山となり、遺物包含層も確認できなかった。

また、第1次調査区の北端及び南端では等高線が巻き込んでおり、谷が入り込んできている。そして、平野部へ向かう調査区の西側は調査区外で急激に下降する急崖となる。(第5図)

以上から、調査区は平野へ向かって張り出している尾根筋に相当する地形と思われる。ただし、極端

額谷遺跡遺構平面図 I



平成7年度（第1次）調査区

平成10年度（第2次）調査区

全体図(2)に続く



第5図 額谷遺跡 全体図(1) (S=1/250)

な緩傾斜については自然地形とは考えにくく、層序からみても開墾された時点での切り盛りで削平を受けたものと思われる。同様に、調査区北方の谷は現状ではあまり起伏が目立たないが、調査では急激に落ち込む地形を確認しており、開墾時に埋められている可能性が高い。

現地調査の方法はグリッド法による全面発掘調査である。グリッドは10m方眼で、主軸を調査区の形に合わせ、任意に設定（国土座標の東西南北方位には合っていない。）した。基準点は南北軸を算用数字（0～6）、東西軸をアルファベット大文字（A～E）で表記して組み合わせた区割りをを行い、グリッド名は南東の基準点を割り当てた。（第4図）

第2節 遺構と遺物（第6～27図、第1～3表、図版1～6・15～19）

発掘調査の結果、調査区全域に弥生時代後期後半～古墳時代初頭の建物跡が多数存在する集落となることが判明した。実際にはもっと多くの建物が存在したと考えられるが、竪穴系建物（SI）は5棟、掘立柱建物（SB）は5棟が復原でき、片側のみ布掘状を呈する掘立柱建物（SB2001）も見られた。弥生時代の環濠集落の可能性も考えて調査を行ったが、環濠などの遺構は確認されなかった。

出土した遺物は総量でコンテナバット11箱におよぶ。内容は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、鉄製品等である。量的には弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落に伴う土器が圧倒的に多く、その他の遺物は少ない状況である。

出土した土器は小片のものが多く、壺・甕は口縁部を中心に、高杯は残りのよい脚部を中心に実測したが、出土量に比べて実測できたものが少なかったことは残念である。また、丘陵地の酸性土壌による影響からか土器の依存状態は悪く、土器表面の調整がよくわからないものも多かった。

竪穴系建物（SI）

額谷遺跡は、丘陵平坦部の遺構面が後世に大きく削平を受けていることから、竪穴式建物の掘り込みが存在したのかどうか判別できなかった建物がある。そのため竪穴式建物と平地式建物の区別ができないことから、両者を竪穴系建物としてまとめ、掘立柱建物とは区別することにしている。

前報告では、大型の竪穴系建物SI01をはじめとする竪穴系建物10棟、掘立柱建物8棟等が確認されている。今回の調査区には前報告でSI02、SI03、SI10と復元した竪穴系建物が延びるが、その内今回の調査区内にも外周溝の延びが続き、柱穴の位置も確認することができたSI2002、SI2003を復元した。これにより前回の復元案とは異なるものもでてくるが、上部の削平を受けてはいるが、確実に周溝を持つ建物と復元できたものは、SI2001、SI2002、SI2003、SI2004、SI2005の5棟がある。SI2001、SI2005は同じ場所で2回以上、SI2002→SI2003→SI2004は場所を少しずつずらしながら建て替えを行っている。（第6図）

SI2001 外周溝と壁周溝を持ち、部分的に竪穴掘り込みが確認できた竪穴系建物。平面プランは隅丸方形を呈する。支柱穴の数は4本（1本は調査区外）で柱間は約2.5m四方、柱を若干ずらし建て替えて1回行っている。外周溝SI2001-Dの直径は確認できた部分で約12.5m（復元13.5m）、壁周溝は5m（復元6.5m）となる。外周溝は幅約0.4m、深さ約0.45m、壁周溝は幅約0.25m、深さ約0.2mを測る。外周溝がSI2005の周溝SD2001に切られる。

弥生時代終末頃の土器（No.1～3）が外周溝等から出土しているが、遺物の量は少ない。

SI2002 外周溝と壁周溝を持ち、部分的に竪穴掘り込みが確認できた竪穴系建物。平面プランは隅丸方形を呈する。支柱穴の数は4本で柱間は約4×4.8m、外周溝SD2013の直径は確認できた部分で約18m、壁周溝SI2002-Dは約8.5mとなる。外周溝は幅約0.4m、深さ約0.5m、壁周溝は幅約0.3m、深さ約0.2mを測り、1次調査で検出された周溝SD1003と連続する。外周溝がSI2003の外周溝SD2009（2012）及び壁周溝SD2014、SI2004の外周溝SD2016に切られる。

弥生時代終末頃の土器（No.4～12）が、外周溝SD2013を中心に出土している。有段擬凹線文甕が多い。1次調査の出土土器（No.8・10）も再録している。

SI2003 外周溝と壁周溝を持ち、部分的に竪穴掘り込みが確認できた竪穴系建物。平面プランは円形か多角形を呈する。支柱穴の数は5本で柱間は約3.5～4.5m、外周溝SD2009（2012）の直径は確認できた部分で約18.5m、壁周溝SD2014は約11.5mとなる。外周溝は幅約0.5m、深さ約0.45m、壁周溝は幅約0.4m、深さ約0.2mを測り、1次調査で検出された周溝SD1002と連続する。外周溝及び壁周溝が、SI2002の外周溝SD2013を切り、SI2004の外周溝SD2016に切られる。

弥生時代終末頃の土器（No.13～32）が、外周溝SD2009（2012）を中心に出土している。有段擬凹線文甕はSI2002のものに比べ、口縁先端が外反し細くなる。他に、装飾器台（No.36）や金属製品を砥いだ可能性もある磨石（No.27）等が出土している。1次調査の出土土器（No.13・18）も再録している。

SI2004 外周溝と壁周溝を持つ竪穴系建物。壁周溝内に掘り込みは確認されていない。平面プランは外周溝は円形、壁周溝は方形を呈する。支柱穴の数は4本で柱間は約3×4m四方、外周溝SD2016の直径は確認できた部分で約12.5m、壁周溝SD2017（2024）は約6mとなる。外周溝は幅約0.4m、深さ約0.35m、壁周溝は幅約0.5m、深さ約0.15mを測る。外周溝が、SI2002の外周溝SD2013、SI2003の外周溝SD2009（2012）及び壁周溝SD2014を切る。

出土遺物は少ないが、弥生時代終末頃の土器（No.39～42）が外周溝SD2016を中心に出土している。大型の有段擬凹線文甕（No.40）は口縁部先端が先細りせず古い印象を受けるが、有段高杯（No.42）は実際には脚部に巡らせた突帯により有段状を呈するように見せており、弥生時代終末頃の中でも新しい時期のものであると考えられる。

SI2005 周溝を持つ竪穴系建物。周溝内に掘り込みは確認されていない。部分的に3条以上の周溝が回り、建て替えが2回以上行われていることがわかるが、外周溝と壁周溝が2重に回らないことから大型の竪穴式建物であった可能性がある。周溝にはSD2001とSK2010の2箇所不整形な楕円形に幅が広がる部分があり、遺物がまとまって出土している。平面プランは隅丸方形を呈する。支柱穴の数は4本で柱間は約3.5×4.5m四方、周溝の直径は確認できた部分で内側約11m、外側約14.5mとなる。周溝は幅約0.2～0.5m、深さ約0.1～0.25mを測る。周溝SD2001が、SI2001の外周溝SD2001-Dを切る。

周溝SD2001を中心に古墳時代初頭頃の土器（No.43～51）が出土している。有段擬凹線文甕が少なく、東海系小型高杯（No.43）や口縁下端に竹管文を巡らせた二重口縁壺（No.45）、台付装飾壺（No.46）等が出土している。

竪穴系建物は周溝を伴うものが主体的で、調査区全域にて確認された。調査区北東部に位置するSI2001は、北東部分は調査区外のため全掘できなかったが、他の遺構に比べ後世の削平の度合いが低かったことなどから、部分的に壁の立ち上がりは確認されている。外周溝SI2001-Dを伴うこの建物は、

平面プランは隅丸方形のプランで4本主柱と想定でき、柱穴を若干ずらし建て替えも行われている。

また調査区の北西部の一角には3棟の竪穴系建物が重なっており、切り合い関係から西側から東側へと変遷している。各建物の構造をみると、西側の建物SI2002はSD2013を外周溝として伴い、壁周溝SI2001-Dの形状より隅丸方形のプランで4本主柱と想定される。部分的に壁の立ち上がりも確認されている。中央に位置する建物SI2003は外周溝がSD2009(2012)、壁周溝がSD2014と考えられ、壁周溝の形状から円形か五角形のプランで5本主柱の可能性はある。東側の建物SI2004は、外周溝がSD2016、壁周溝がSD2017(2024)と考えられる。外周溝は円形、壁周溝は方形のプランで4本主柱と想定される。

他に、調査区中央付近において検出されたSI2005に伴う3重に回る周溝状遺構SD2001・SD2003・SD2004・SD2007・SD2008・SD2018・SD2019・SD2020・SK2010から古墳時代初頭の土器が出土している。建て替えが2回以上行われていることがわかるが、外周溝と壁周溝が2重に回らないことから大型の竪穴式建物であった可能性がある。

掘立柱建物(SB)

調査区内には無数の柱穴状を呈する小穴が存在するが、全てを建物に復元することは困難であった。そのため、調査時に担当が復元した建物から遺物を実測できたものを中心にSB2001、SB2002、SB2003、SB2004、SB2005の5棟を復元した。実際にはまだ多数の建物が建っていたと考えられる。

今回の調査でも調査区南東部において南側の桁が布掘の構造と考えられるもの(SB2001)が検出された。同様の建物は平成7年度の調査でも確認されているが、北側のみに布掘を持つ構造で、規模は1×3間。両者とも床面積は約20㎡である。

SB2001 片側に布掘り溝を持つ2間×3間の掘立柱建物。SB2002に隣接する。規模は南北約4m×東西約5mを測る。

柱穴や建物周辺の小穴から弥生時代終末頃の土器(No.57~67)が出土している。

SB2002 2間×3間の掘立柱建物。SB2001に隣接する。規模は南北約4m×東西約5.5mを測る。

柱穴や建物周辺の小穴から弥生時代終末頃の土器(No.68~71)が出土している。有段口縁の口縁下端に擬凹線文が2条巡る甕は弥生時代終末頃の中でも古くなると考えられる。

SB2003 1間×2間の掘立柱建物。SI2001外周溝と重複する。規模は南北約3.5m×東西約6mを測る。

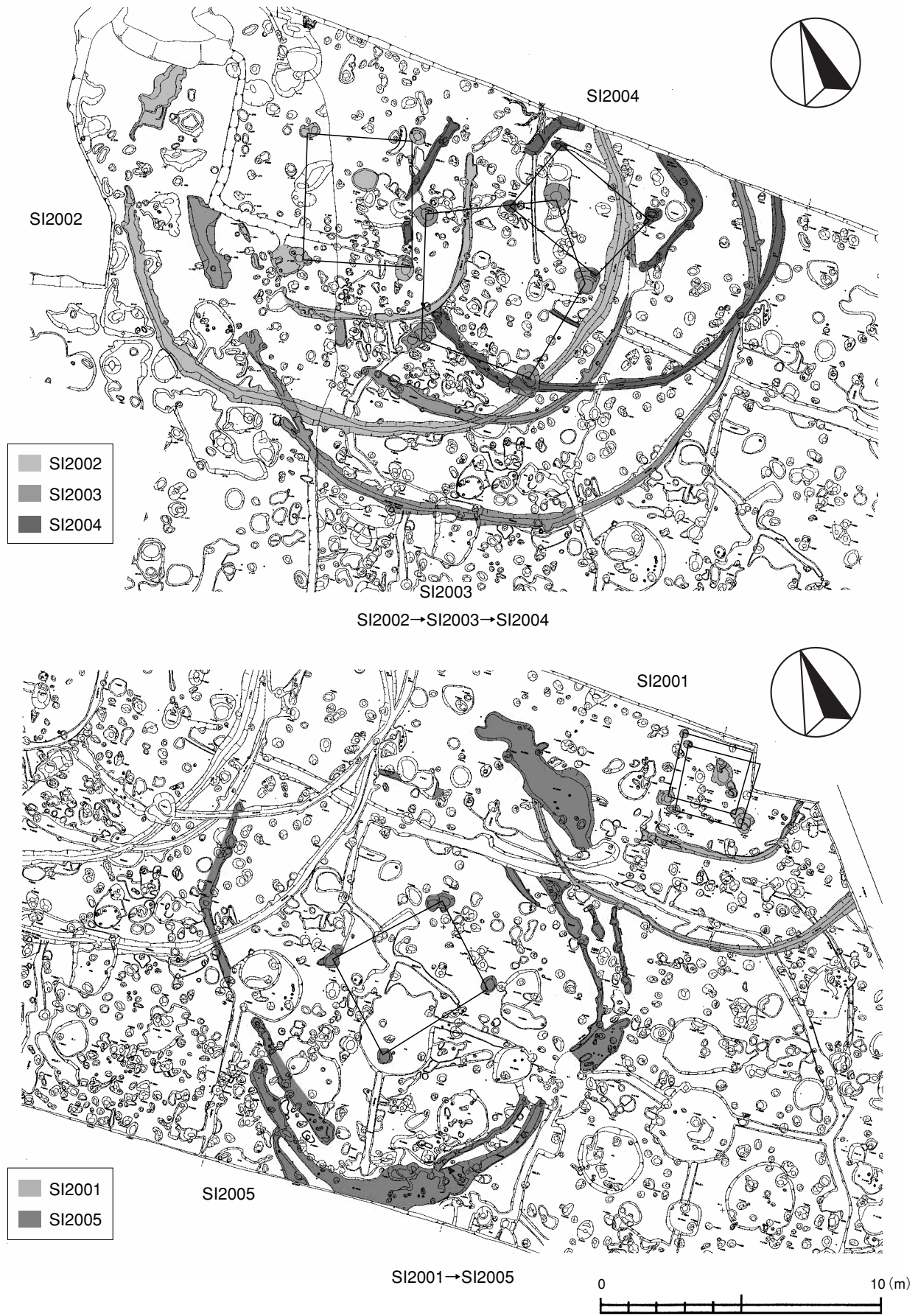
建物周辺の小穴から、胴部上半に5条以上の平行した沈線を回し、その間を矢羽状の沈潜で装飾した台付装飾壺(No.73)等、弥生時代終末頃の土器(No.72~76)が出土している。

SB2004 1間×2間の掘立柱建物。SI2005周溝と重複する。規模は東西約3.5m×南北約5mを測る。

時期の判る遺物は出土していない。

SB2005 1間×3間の掘立柱建物。SI2003外周溝と重複する。規模は南北約2m×東西約5mを測る。

時期の判る遺物は出土していない。



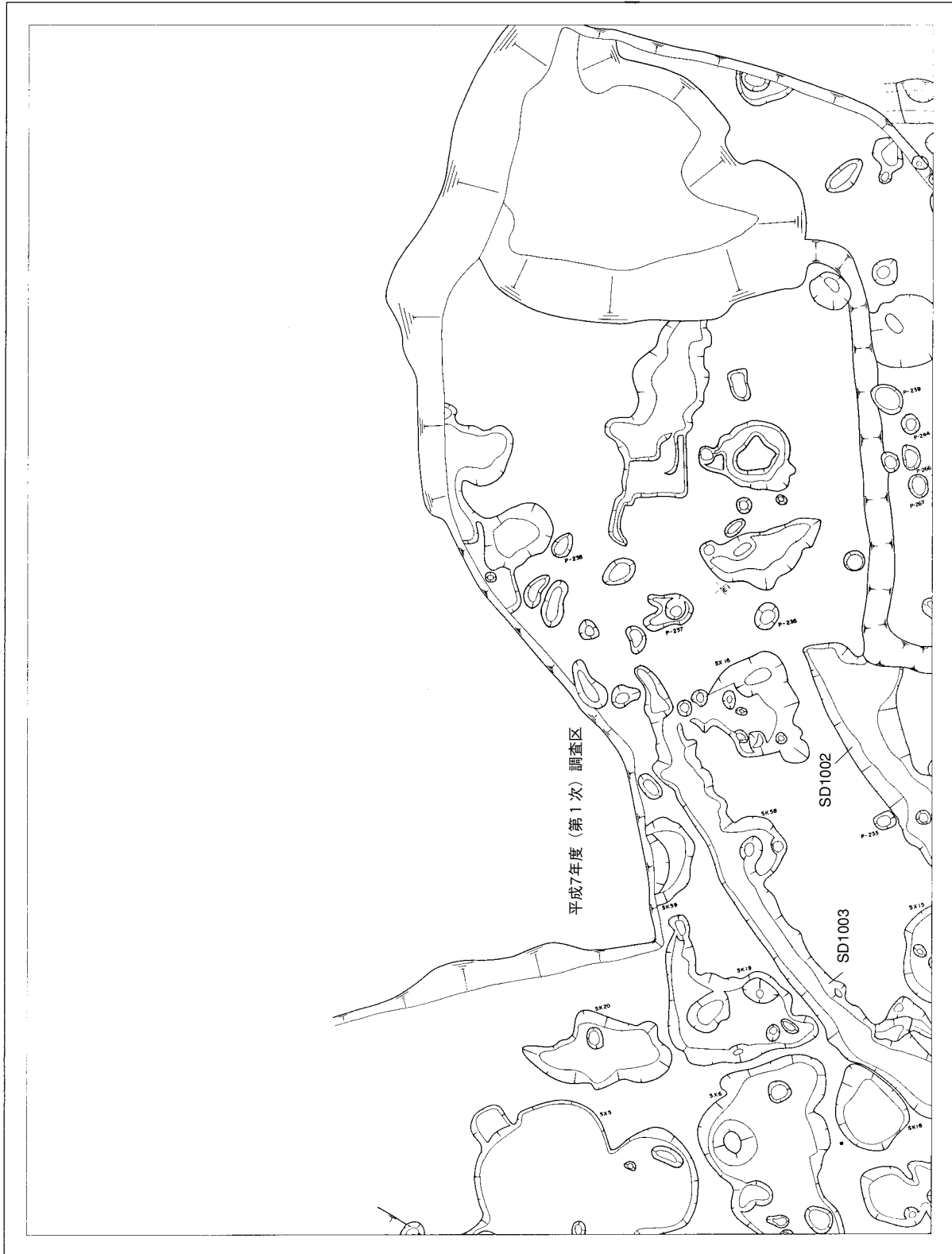
第6図 平成10年度(第2次)調査区 竪穴系建物配置図(S=1/200)

1	2	3
4	5	6

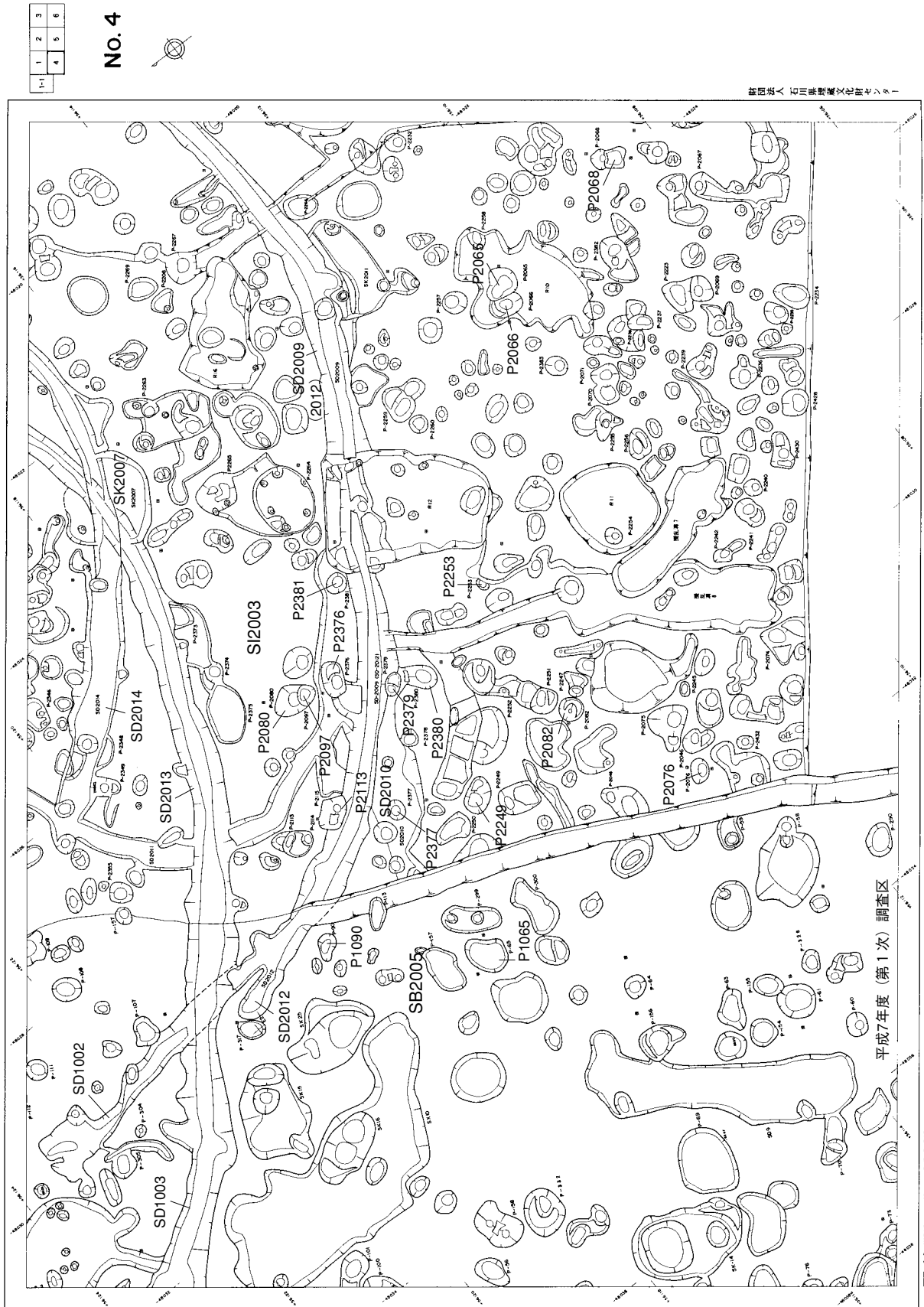


No. 1-1

調査区(1)の遺構平面図



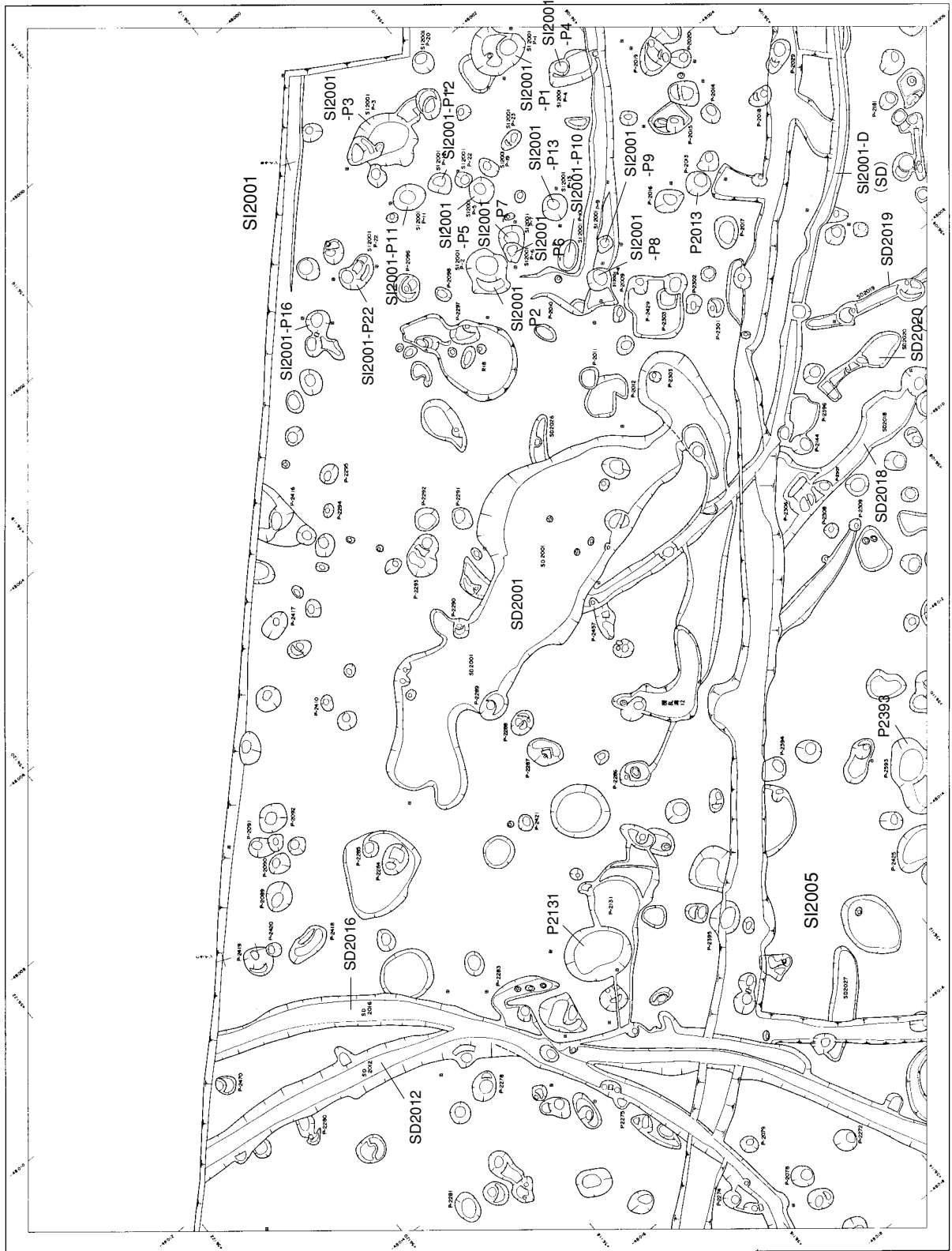
第7図 平成7年度(第1次)調査区(1)遺構平面図(S=1/80)



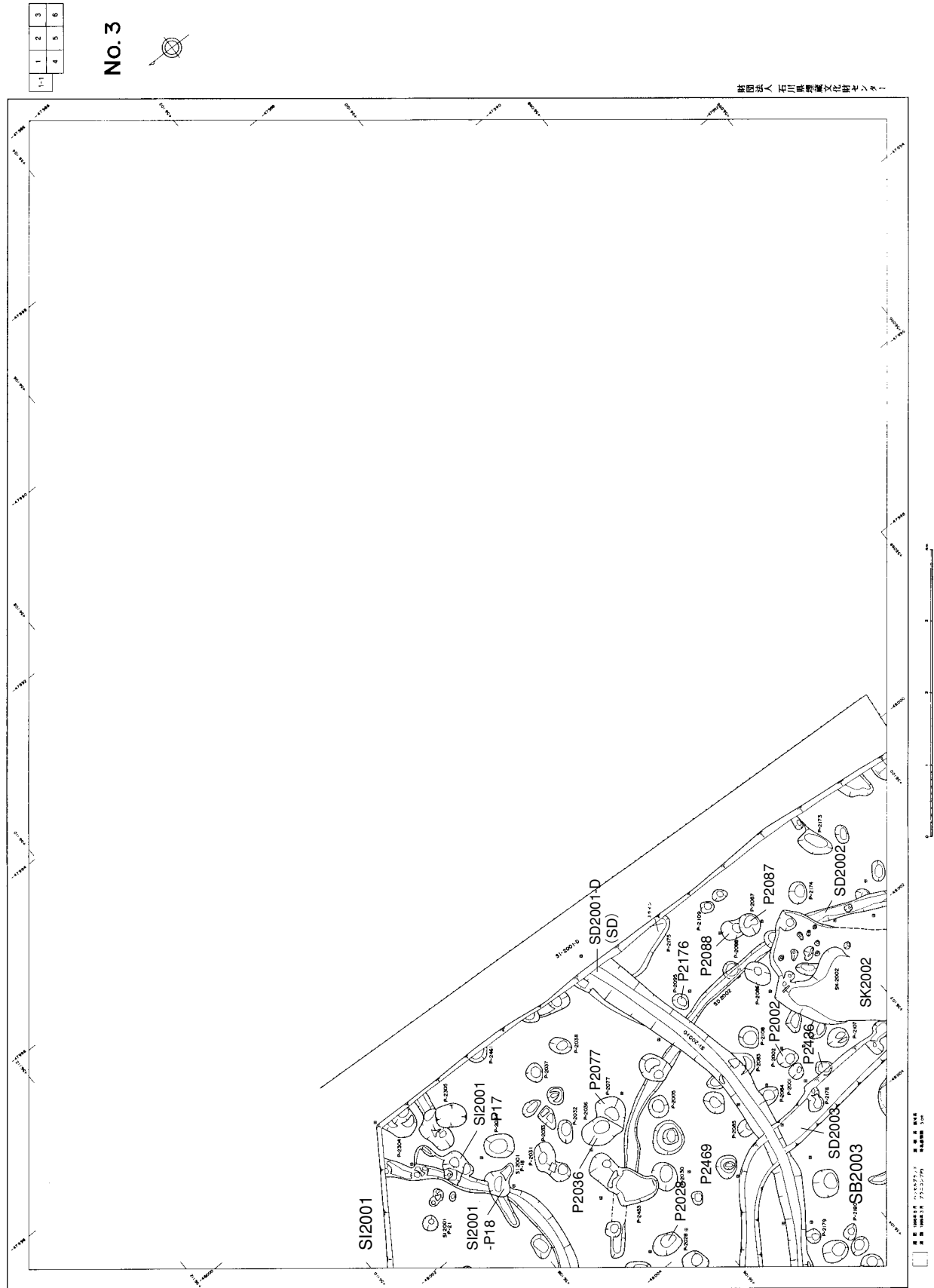
第9図 平成7年度(第1次)調査区(3)・平成10年度(第2次)調査区(2)遺構平面図(S=1/80)

1-1	1	2	3
	4	5	6

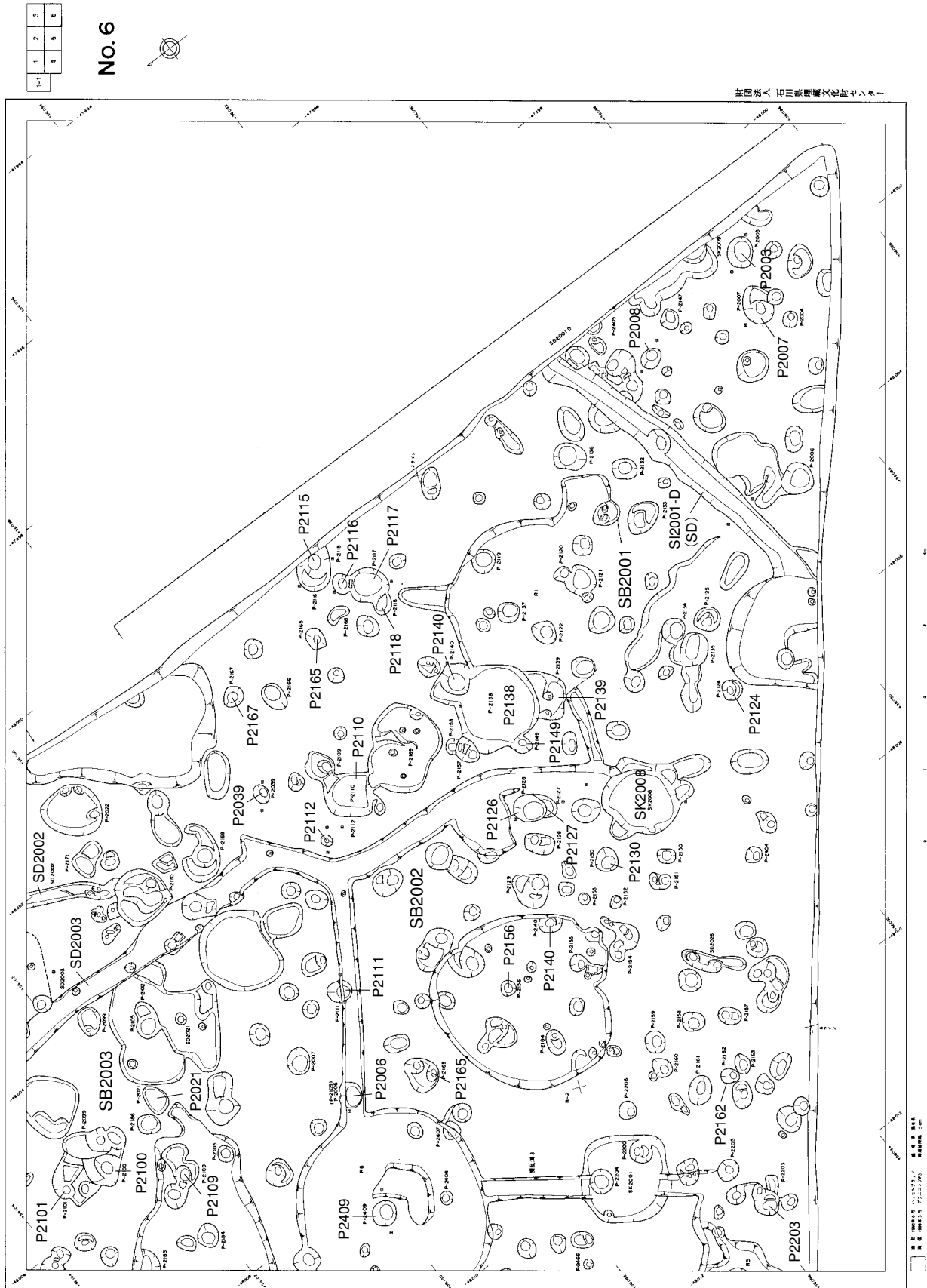
No. 2



第10図 平成10年度(第2次)調査区(3)遺構平面図(S=1/80)



第12図 平成10年度(第2次)調査区(5)遺構平面図(S=1/80)



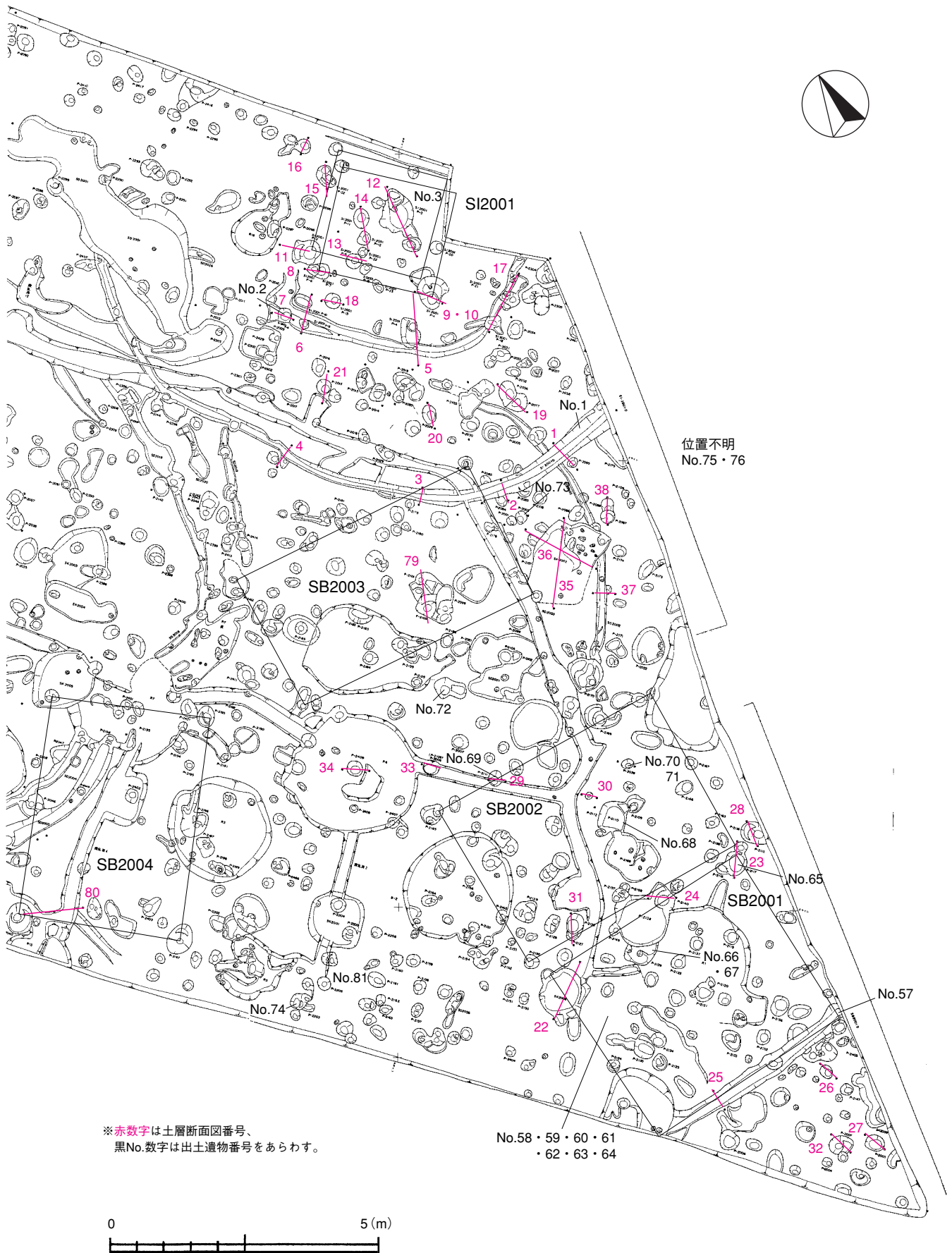
第13図 平成10年度(第2次)調査区(6)遺構平面図(S=1/80)

第2節 遺構と遺物

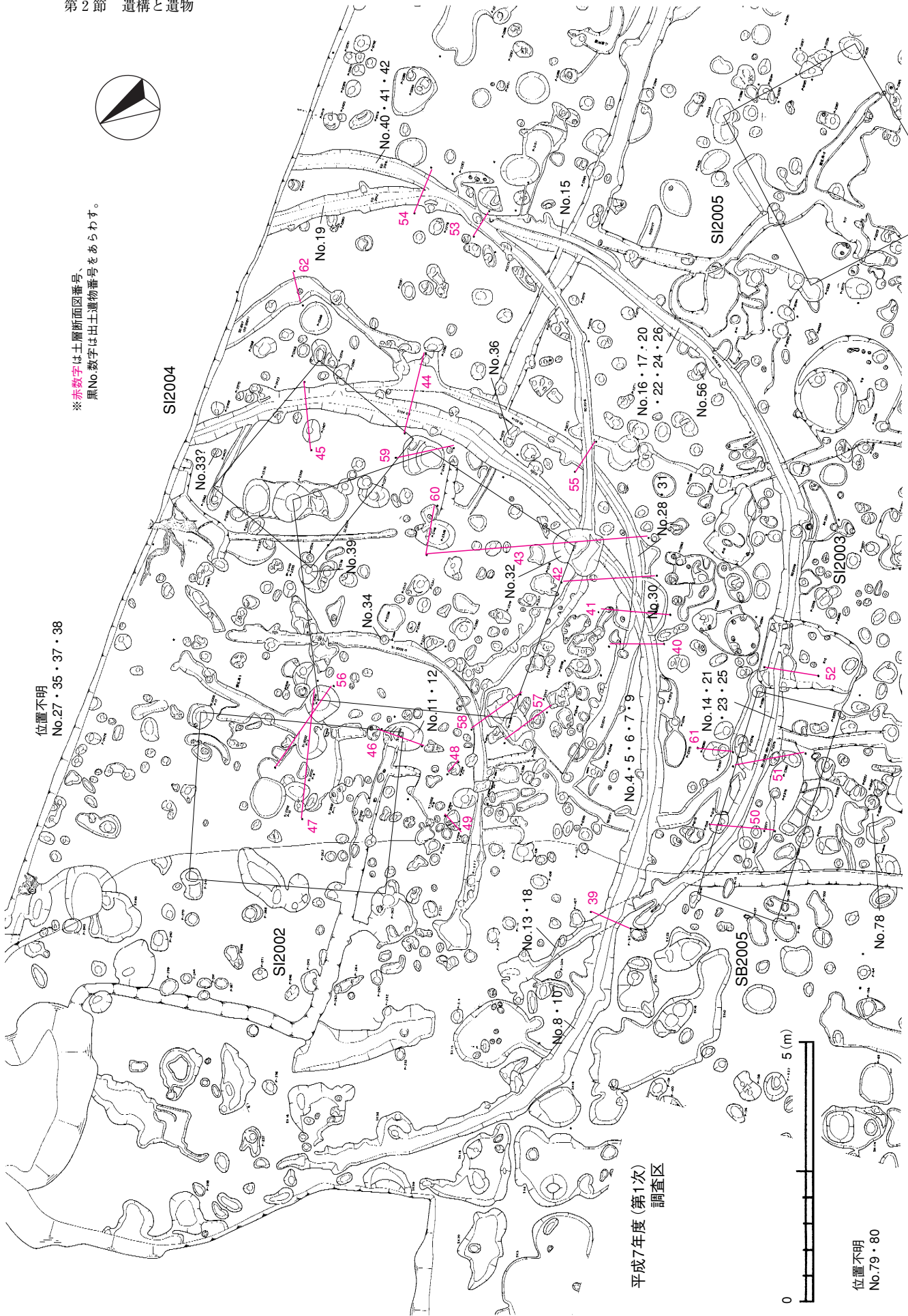
建物No	グリッド	遺構名	断面No	遺物No	備考
SI2001	A-3	SI2001-P1	9・10		柱穴
	B-3	SI2001-P2	11		柱穴
	B-3	SI2001-P6	8		柱穴
	B-3	SI2001-P7			
	A・B-3	SI2001-P3	12	3	炬?
	A・B-2・3	SI2001-D(SD)	1・2・3・4	1	外周溝
	A・B-3	SI2001(SD)	5・6		壁周溝
B-3	SI2001-P8	7	2	壁周溝内Pit	
A-3	SI2001-P4	5			
B-3	SI2001-P5	13			
B-3	SI2001-P9	6			
B-3	SI2001-P10				
B-3	SI2001-P11	14			
B-3	SI2001-P12				
B-3	SI2001-P13	18			
B-3	SI2001-P16	16			
A-3	SI2001-P17	17			
A-3	SI2001-P18				
B-3	SI2001-P22	15			
B-3	P2013	21		暗褐(黒褐)土、地山 ブロック・炭化物混	
A-3	P2028	20			
A-3	P2036	19			
A-3	P2077				
A-2・3	P2176	1			
D-3	SI2002-P1	46	11・12	柱穴	
D-4	SI2002-P17			柱穴	
	P1241			柱穴、1次調査Pit	
	P1263			柱穴、1次調査Pit	
D-3	SD2013	39・40・41・ 42・43・44・ 45	4・5・6・7・9・32 (P2315?・SD2016?) と連続、SD2013→ SD2014	外周溝、1次SD1003 と連続、SD2013→ SD2014	
	SD1003		8・10	外周溝、SD2013と連 続、1次遺物No5・6 壁周溝	
D-3・4	SI2002-D	58			
D-4	SI2002-P3	47			
D-3	SI2002-P4	48			
D-3	SI2002-P5	49		P6→P5	
D-3	SI2002-P6			P6→P5	
D-3・4	SI2002-P2	56		柱穴	
C-3	P2143	59		SI2003・SI2004柱穴	
D-3	P2315	43	32(SD2013?・ SD2016?)	柱穴、SD2013→ P2315→SD2016	
C-4	P2329			柱穴	
C-2	SK2006	57・58		柱穴	
C・D-3・4	SD2009 (SD2012)	39・50・51・ 52・53・54		外周溝、1次SD1002と 連続、SD2010→SD2009 →P2113→SD2016	
	SD1002		13・18	外周溝、SD2009と連 続、1次遺物No3・4	
C・D-3	SD2014	40・41・42・43・ 44・45・55	28・29・31・30 (SD2013?)	壁周溝、SD2013→ SD2014→SD2016	
D-3	P2080	61			
D-3	P2097				
C-3	P2148	60			
D-3	P2313		36		
C-3	P2328	60			
D-3	P2339		34		
CorD-4	P2422		33?		
C-4	P2427	45		柱穴	
D-3	SK2007	41		SD2013・SD2014上面	
C-3	P2143	59		SI2003・SI2004柱穴	
D-3	P2335(P21 45)・P2004	39		柱穴	
C-4	P2362			柱穴	
C-4	P2450			柱穴	
C-3・4	SD2016	42・53・54・55	40・41・42・32 (SD2013?・ P2315?)	外周溝、 SD2012→SD2016、 SD2009→SD2016	
C-3・4	SD2017 (SD2024)	62		壁周溝	
B-2	P2035			柱穴	
D-3	P2223			柱穴	
C-3	P2393			柱穴	
C-2	SI2005(柱穴)			柱穴	
B-3	SD2001	67	45・46・47・48・ 49・50・51・52	周溝	
B-2	SD2003	63・65・66	44	周溝、SD2004→ P2046→SD2003	
B-2	SD2004	66		周溝、SD2004→ P2046→SD2003	
C-2	SD2007	64		周溝	
C-2	SD2008			周溝	
B-2・3	SD2018			周溝	
B-2・3	SD2019			周溝	
B-2・3	SD2020			周溝	
C-2	SK2010		43	周溝	
B-2	P2023	69		P2023→P2025?	
B-3	P2024				
B-2	P2025	70・71		P2026→P2025、 P2027→P2025	
B-2	P2026	70			
B-2	P2027	71		P2027→P2025	
C-2	P2050	65			
C-2	P2061	65			

建物No	グリッド	遺構名	断面No	遺物No	備考
SI2005- 内側P	C-2	P2072	74		
	C-2	P2073	75		
	C-3	P2093	72	54	
	C-2	P2094	73		
	C-3	P2131	68		
	C-2	P2225		55	
	C-3	P2270		56	
	C-2	SD2005	65・77		
	C-2	SD2006	76		
	C-2	P2057	81		
C-2	P2058	82			
C-2	P2059	83・84			
C-2	P2060	83		P2060→P2061	
C-2	P2061	83		P2060→P2061	
C-2	P2062		77		
C-2	P2065	86		P2066→P2065	
D-2	P2066				
C-2	P2068	85			
A-1	SB2001-D (SD)	25	57	布掘建物? 溝・柱穴	
A-2	P2116	23		P2117→P2116	
A-2	P2117		65		
A-2	P2118				
A-1	P2124				
A-1	P2139			66・67	
A-1	SK2008	22		58・59・60・ 61・62・63・64	
A-1	P2003	27		褐色土	
A-1	P2007	32			
A-1	P2008	26			
A-2	P2111	29	69		
A-2	P2115	28			
A-2	P2116	23		P2117→P2116	
A-2	P2117		65		
A-1	P2130				
A-1・2	P2138				
A・B-1	P2140	24			
A・B-1	P2149				
A-1	P2156				
A-2	P2165				
A-2	P2167				
A-2	P2039		70・71		
A-2	P2110		68		
A-2	P2112	30			
A-1	P2126	31		P2127→P2126	
A-1	P2127				
A-2	P2006	33			
B-2	P2409	34			
A-2	P2021		72	褐色土	
A-2	P2109				
B-2	P2142				
A-2	P2436				
A-3	P2469				
A-2	P2100	79			
A-2	P2101				
A-2	P2002		73		
A-2	P2087	38		P2088→P2087?	
A-2	P2088				
A-2	P2435		75・76		
A-2	SK2002	35・36			
A-2・3	SD2002	37			
B-1	P2040	80			
B-2	P2046	66			
B-1	P2147				
B-2	P2193				
B-2	P2196				
B-2	P2208				
B-2	SK2005	78		褐色土	
B-1	P2162		81		
B-1	P2203		74		
A-2	P2113	50			
D-2	P2249				
D-2	P2253				
D-3	P2376				
D-2	P2381				
	P1065			1次調査Pit	
	P1090			1次調査Pit	
D-2・3	SD2010	50		SD2010→SD2009→ P2113	
D-2	P2377	50			
D-2	P2379	51			
D-2	P2380	51			
D-2	P2076	87			
D-2	P2082		78		
B-3	表土		53		
C-3・4	表土		37		
D-1	表土		79		
D-2	表土		80		
D-3	表土		38		
D-4	表土		35	灰色土	

第1表 平成10年度(第2次)調査区主要遺構一覧表

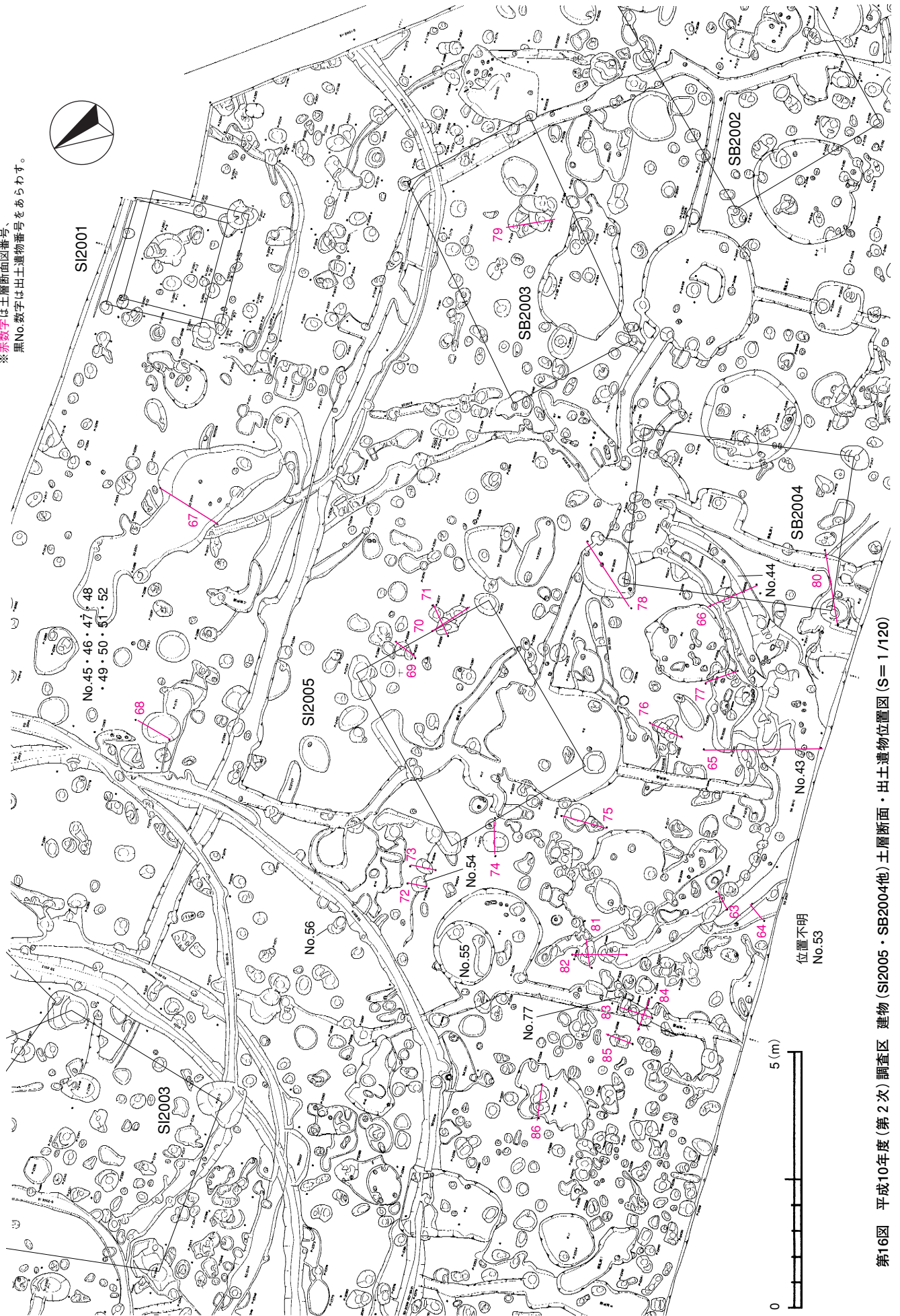


第14図 平成10年度(第2次)調査区 建物(SI2001・SB2001他)土層断面・出土遺物位置図(S=1/120)

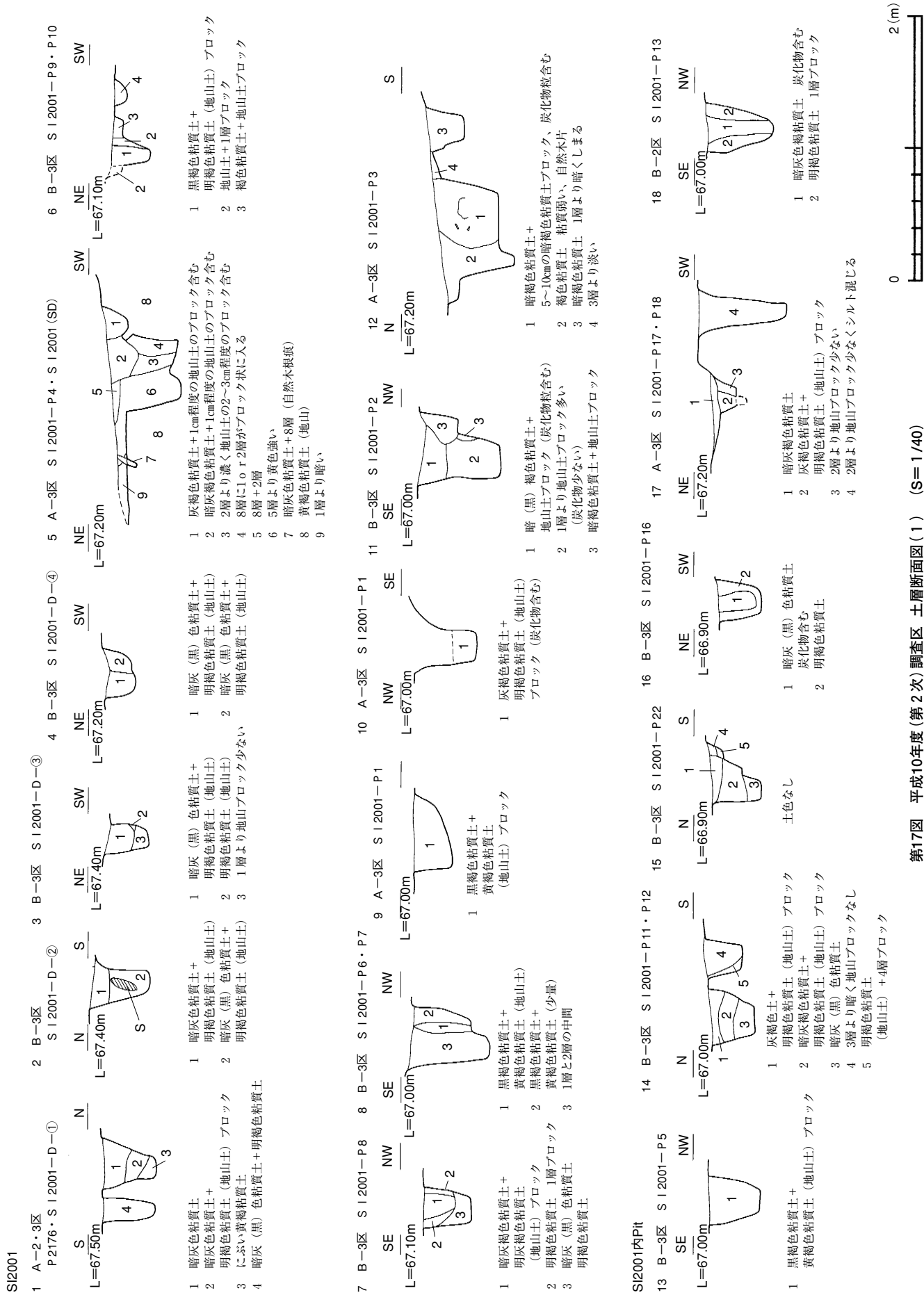


第15図 平成10年度(第2次)調査区 建物(SI2002・2003・2004他)土層断面・出土遺物位置図(S=1/120)

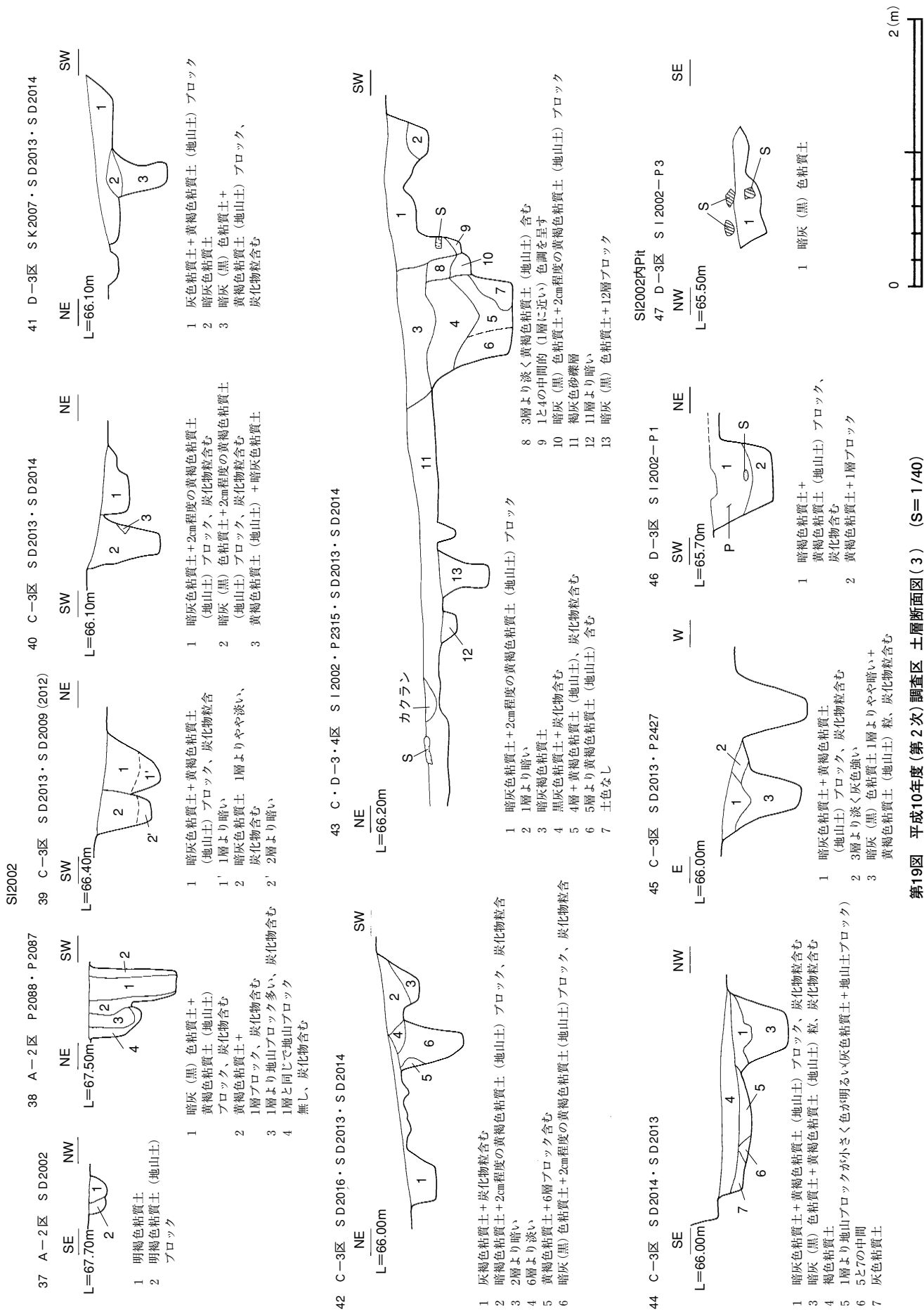
※赤数字は土層断面図番号、
黒No.数字は出土遺物番号をあらわす。



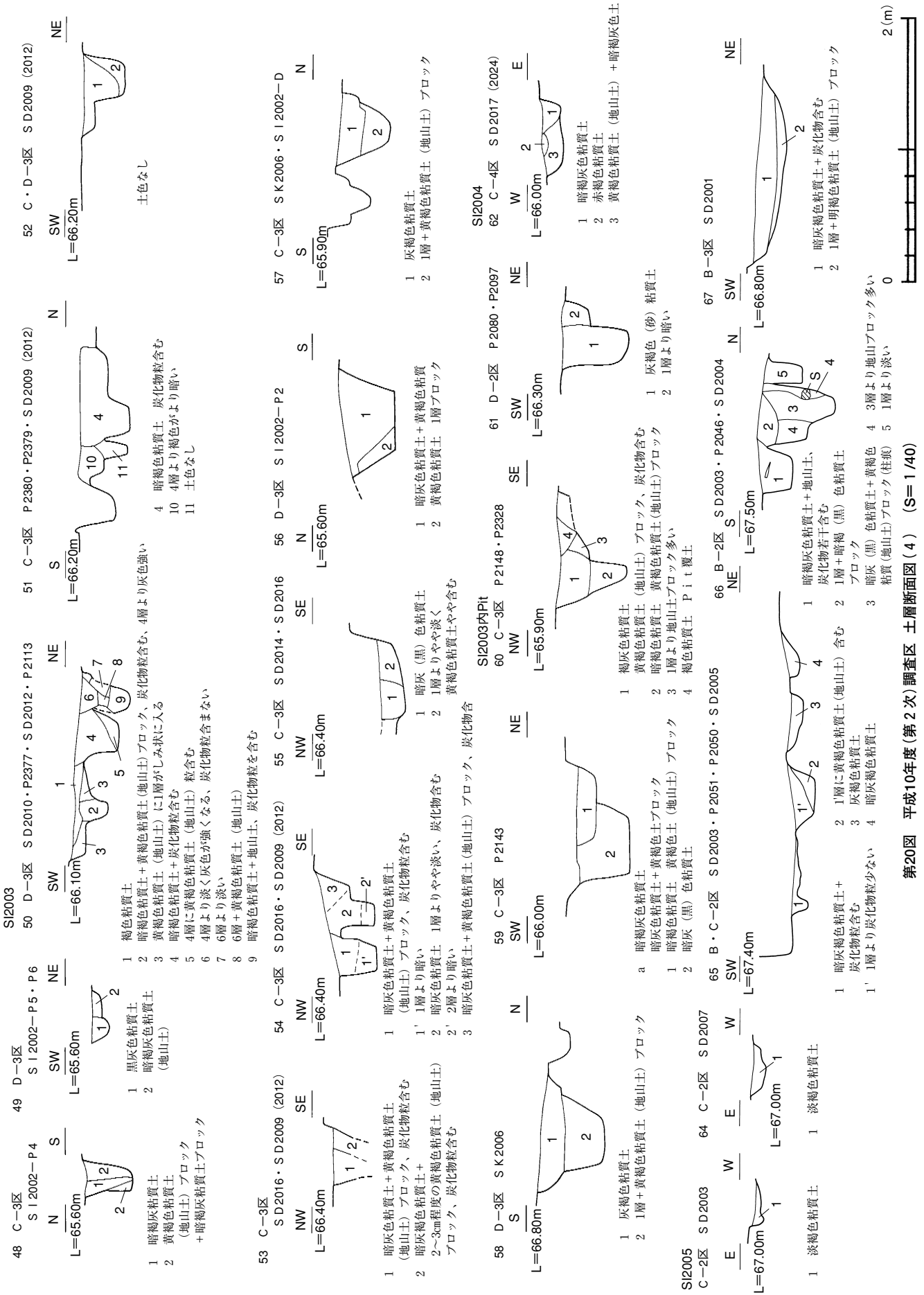
第16図 平成10年度(第2次)調査区 建物(SI2005・SB2004他)土層断面・出土遺物位置図(S=1/120)



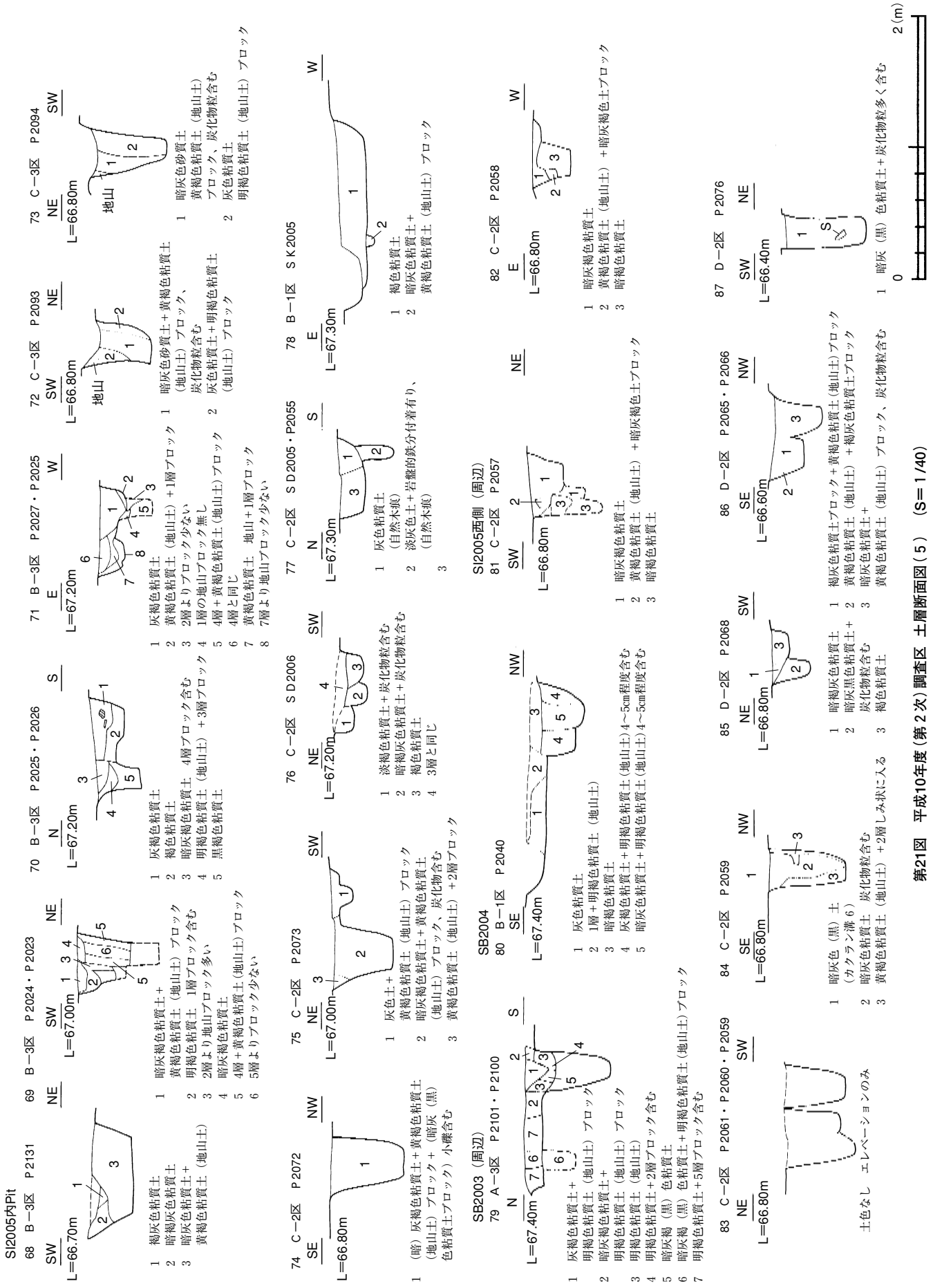
第17図 平成10年度(第2次)調査区 土層断面図(1) (S=1/40)



第19図 平成10年度(第2次)調査区土層断面図(3) (S=1/40)

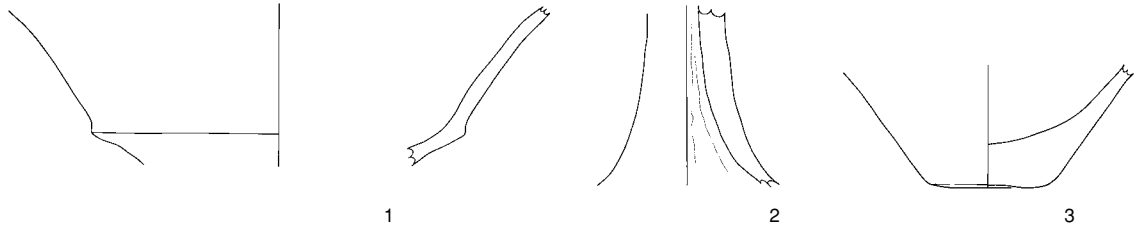


第2節 遺構と遺物

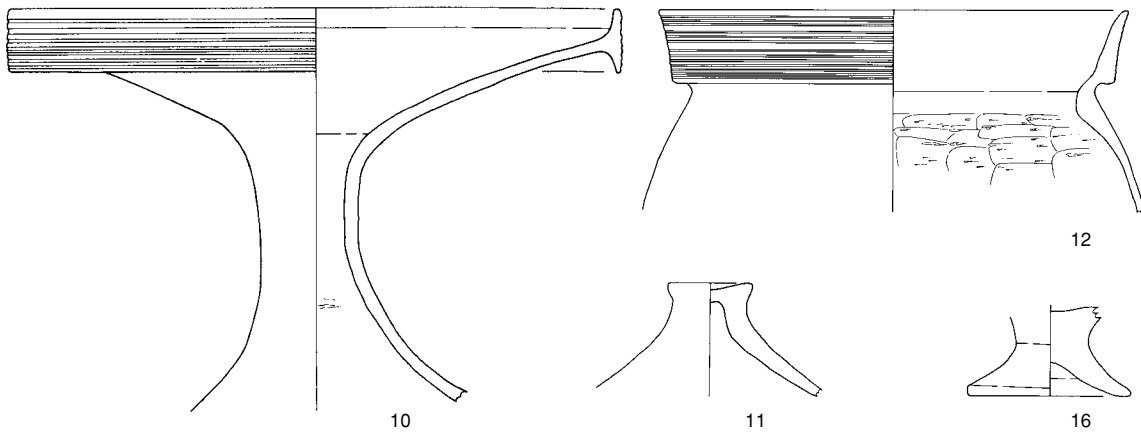
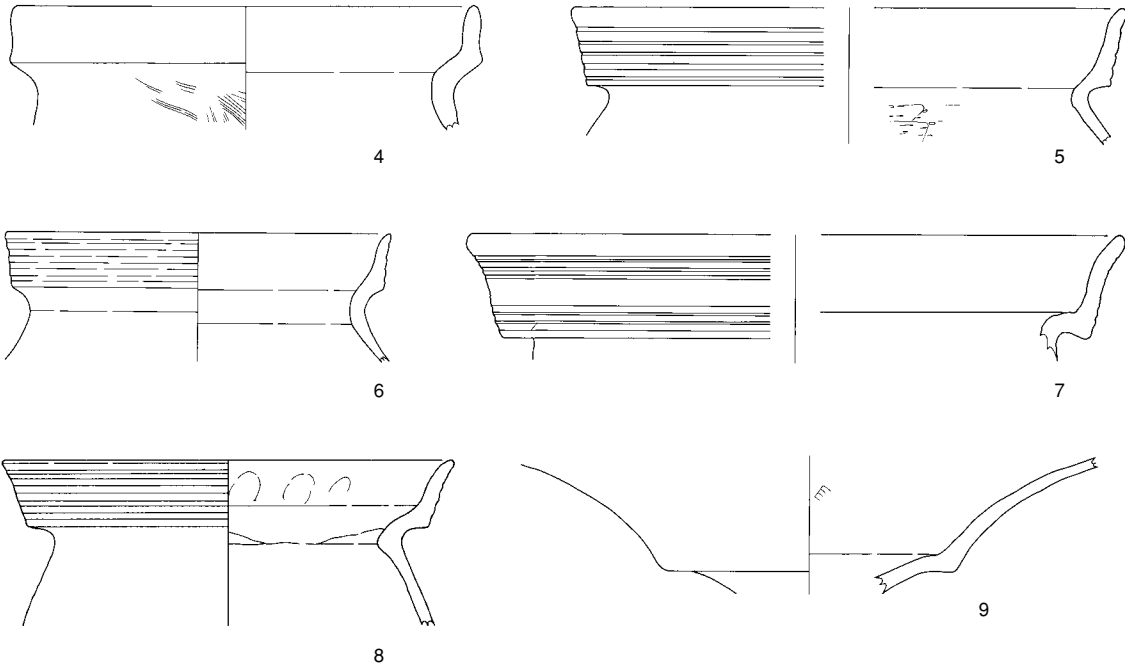


第21図 平成10年度 (第2次)調査区 土層断面図 (5) (S=1/40)

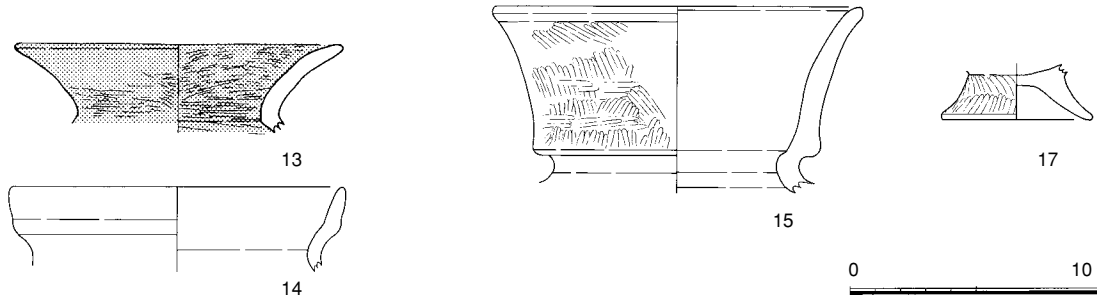
SI2001



SI2002

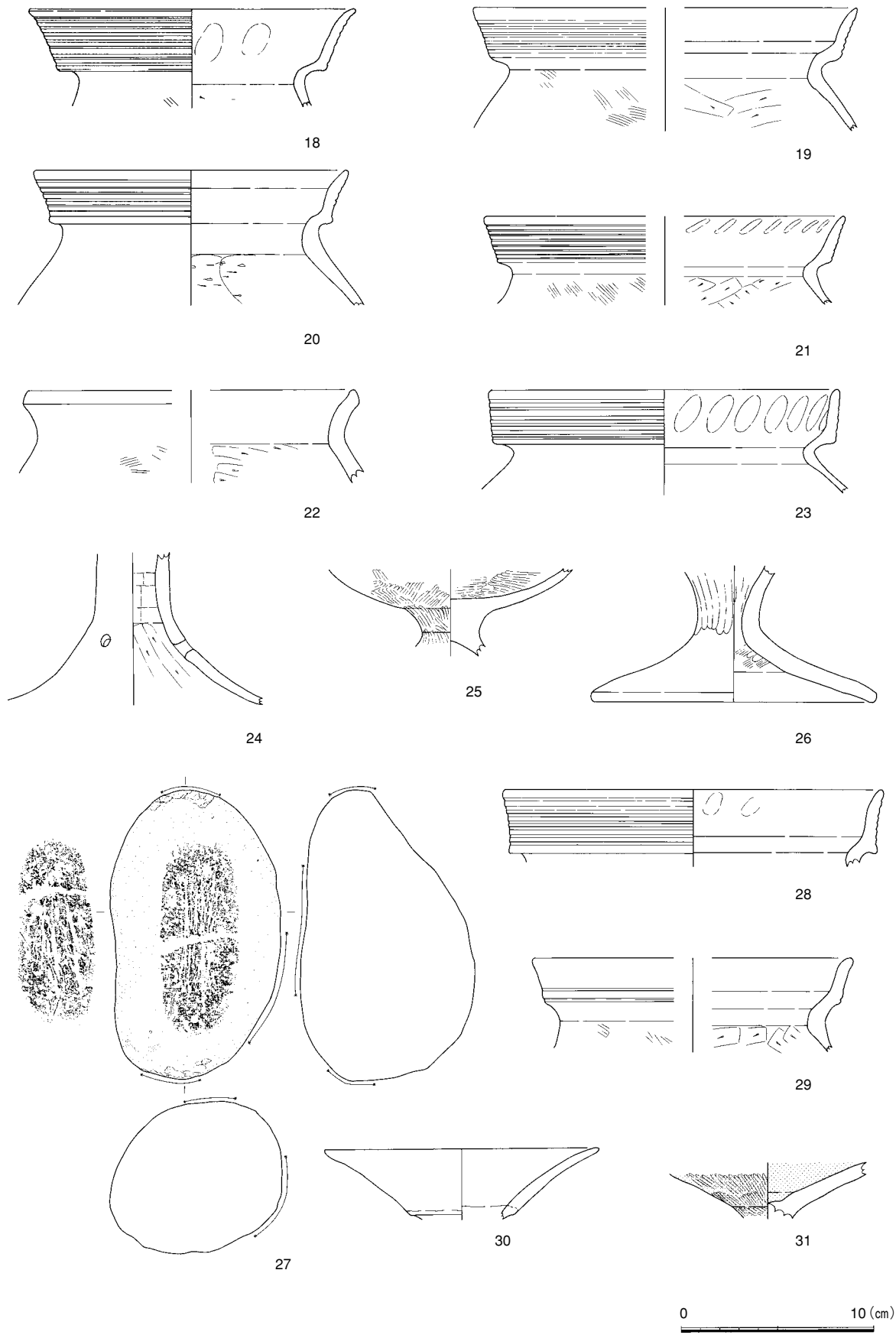


SI2003

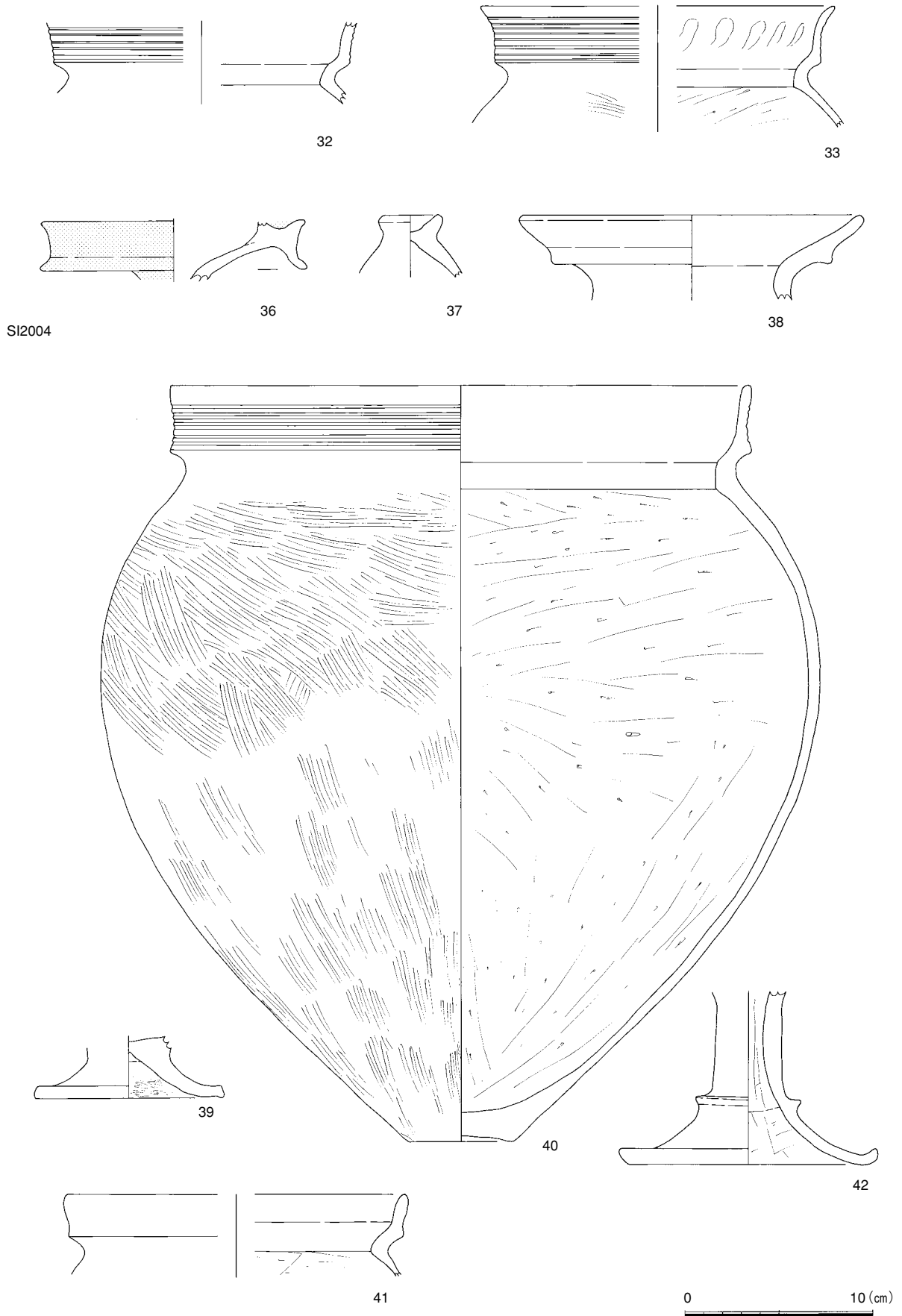


0 10 (cm)

第22図 平成10年度(第2次)調査区出土遺物(1)(S=1/3)



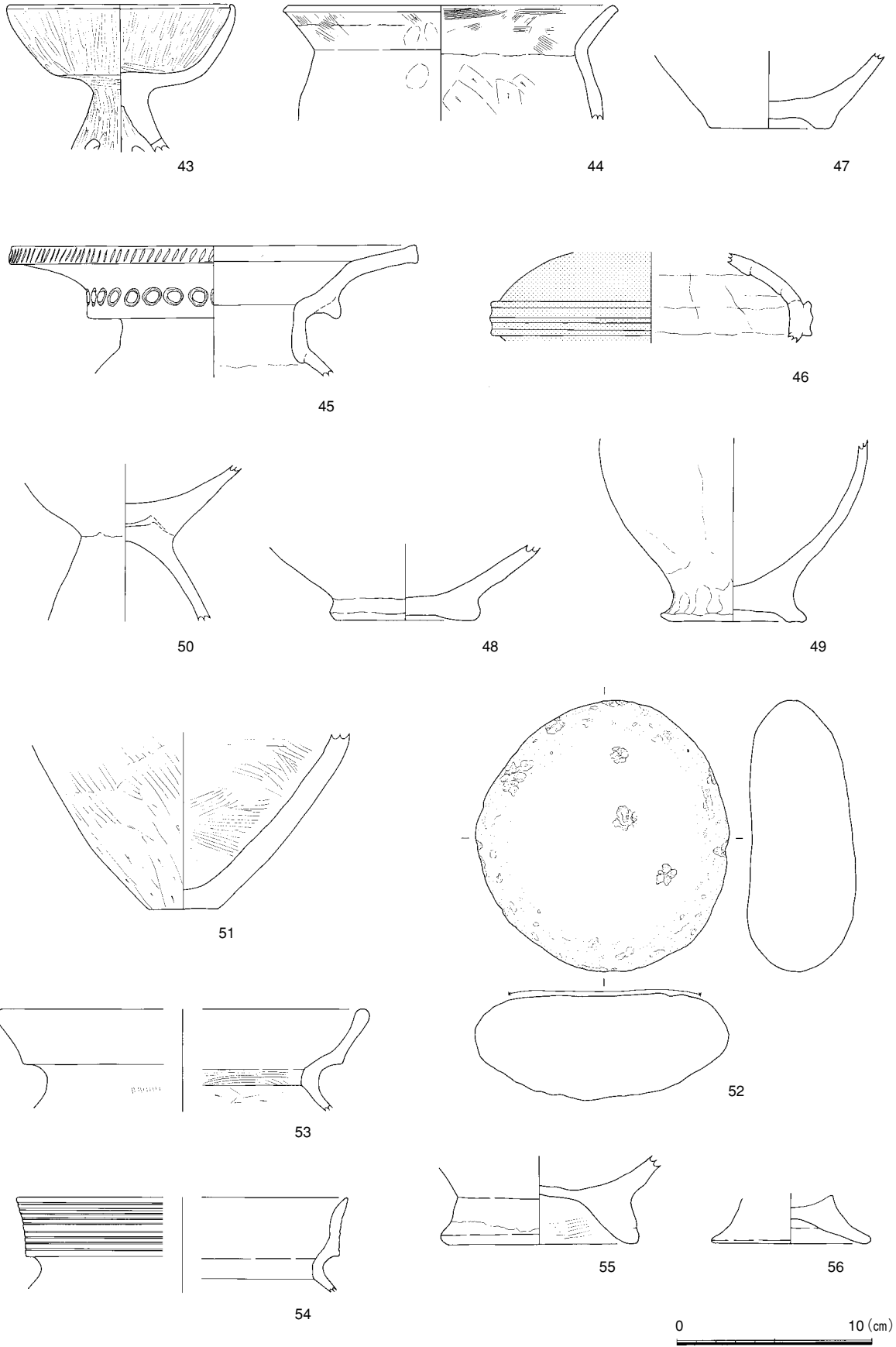
第23図 平成10年度(第2次)調査区出土遺物(2)(S=1/3)



第24図 平成10年度(第2次)調査区出土遺物(3)(S=1/3)

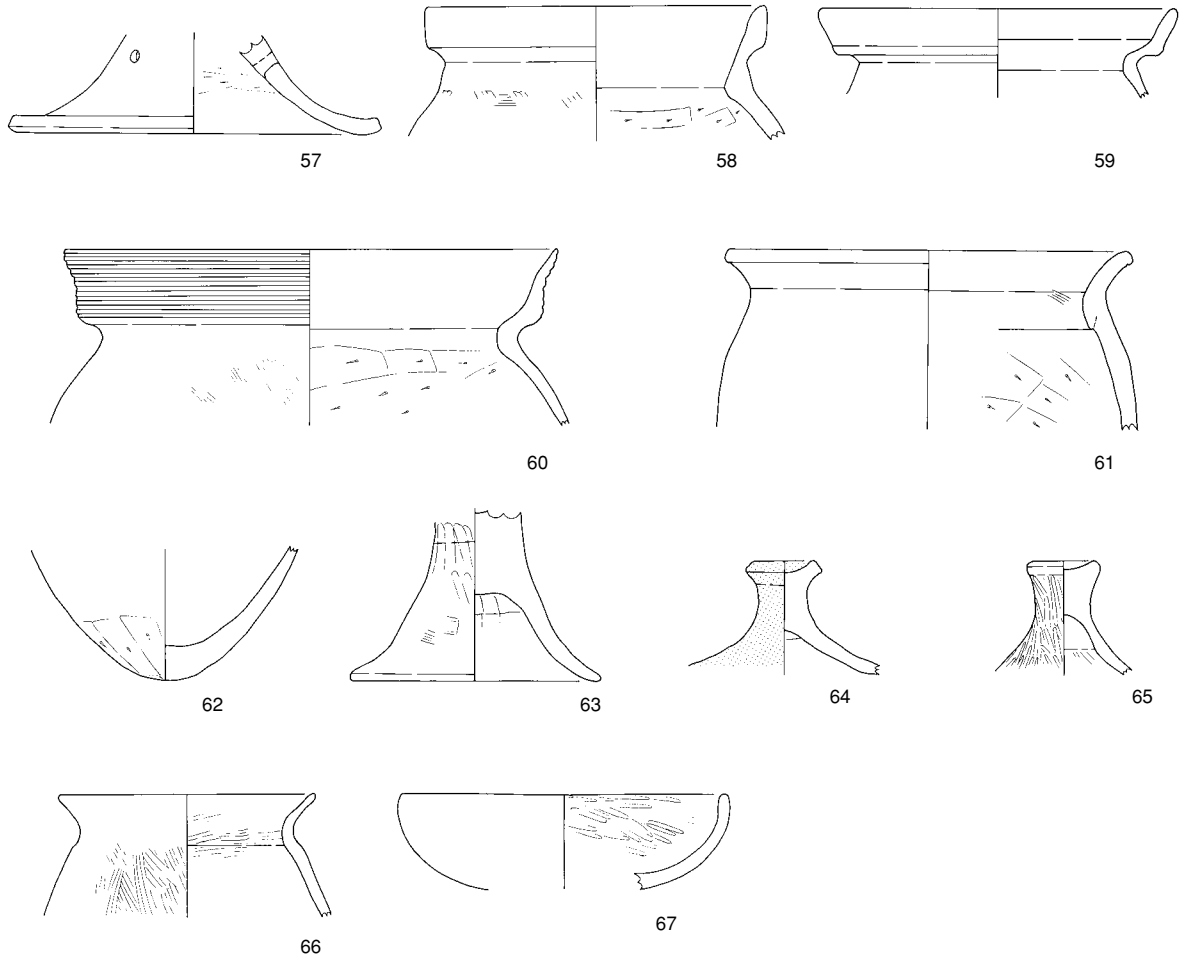
第2節 遺構と遺物

SI2005

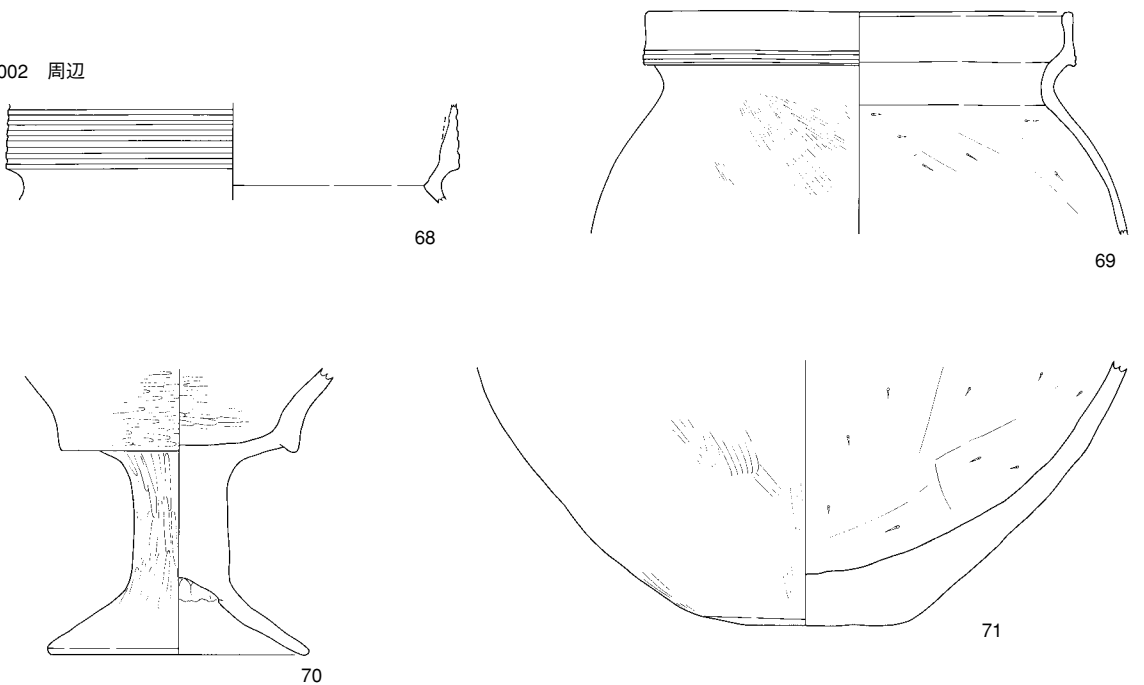


第25図 平成10年度(第2次)調査区出土遺物(4)(S=1/3)

SB2001 周辺



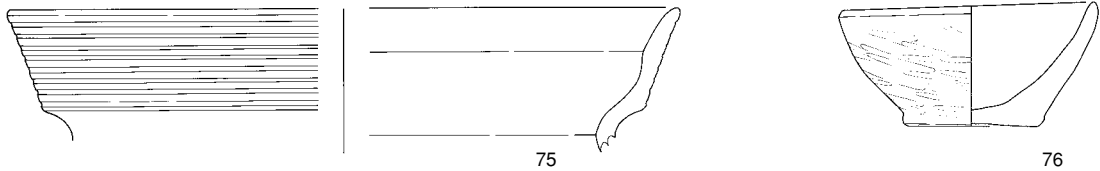
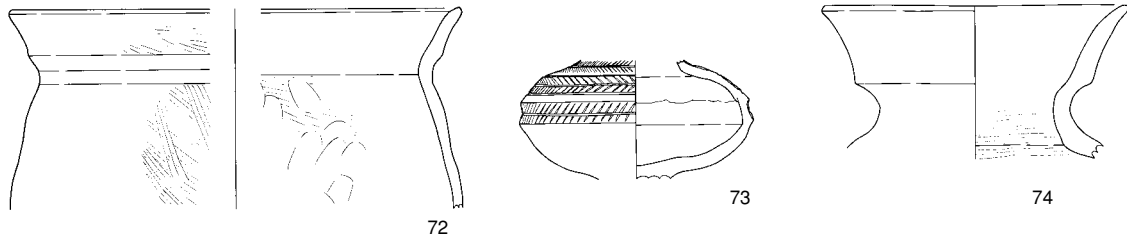
SB2002 周辺



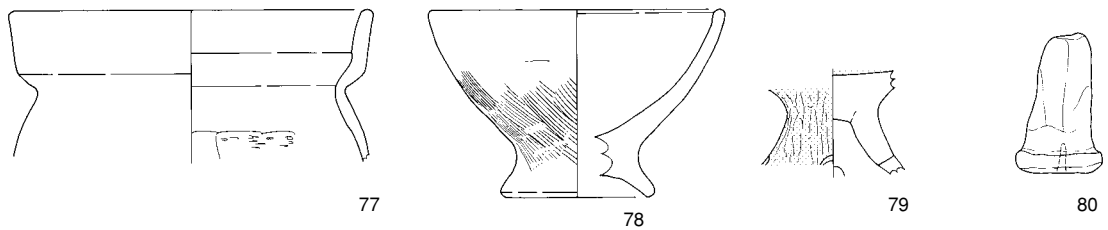
0 10 (cm)

第26図 平成10年度(第2次)調査区出土遺物(5)(S=1/3)

SB2003 周辺



SI2005 西側周辺



第27図 平成10年度(第2次)調査区出土遺物(6)(S=1/3)

額谷遺跡出土遺物観察表 凡例

- (1) 「番号」は遺物図版、観察表、写真図版で共通する。
- (2) 「区名(グリッド)」は調査時に現地で設定した区割りで、第3章第1節・第4章第1節に記すとおりである。
- (3) 「遺構名」の略記号は例言に記してある。
- (4) 「器種(部位)」では、器形から、弥生土器・土師器については甕・壺・鉢・椀・高杯・器台、須恵器については有台杯、珠洲焼については甕・壺・播鉢、近世陶磁器については瓶子・盤・皿・碗・甕に分類し各個体について口縁部、胴部、底部、受部、脚部の残存部位を記載した。
- (5) 石塔類については五輪塔・宝塔に分類し、五輪塔は空風輪・火輪・水輪・地輪、宝塔は宝珠・相輪・笠・塔身・基礎・基壇の各部位に分類した。
- (6) 各土器の法量は口縁部の直径を「口径」、底部の直径を「底径」、土器の高さを「器高」として記載した。遺物の径は復元値も含み、器高は残存値を()付とした。単位はcmである。
- (7) 「胎土混和材」は土器胎土中に見られる混和材のうち、白色で細かく細い針状のものを「海綿骨針」、真珠光沢をもつ鉱物の雲母であると思われる碎片を「雲母」、白色もしくは無色の珪質砂粒を「石英」、2mm以下の砂を「粗砂」、2mm以上の砂を「砂礫」、赤色の軟質粒を「焼土粒」、原土中に混ざられた繊維状の材が焼失し空隙となった状態の見られるものを「繊維」とし、それぞれの多寡により「大」「中」「小」を付けて記載した。
- (8) 「色調」は土器の内面と外面の主要な色調を記載した。
- (9) 「調整」は実測時に観察できた、土器の内面と外面の主要な調整を記載した。
- (10) 「焼成」は堅く焼けているものを「良」、やや脆いものを「並」とした。
- (11) 「主要文様」は土器面に施文される文様を記す。
- (12) 「実測No.」は遺物整理時の整理番号で、出土遺物に注記してある。

土器・陶磁器類

建物 No	図版 No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量 (cm)			胎土	色調		調整		焼成	特記事項	実測No	
				口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面				
S12001	1	A-2 SI2001-D	高杯	-	-	(6.3)	15mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	ミガキ	ミガキ	良	海綿骨針含む	D-18	
	2	B-3 SI2001-P8	高杯	-	-	(7.1)	0.2~0.5mm程度の砂粒多く含む	明褐	橙	不明	不明	良	海綿骨針含む	D-19	
	3	B-3 SI2001-P3	壺 底部	-	4.7	(4.5)	細砂、白粒粗砂多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不明	不明	良		D-20	
S12002	4	D-3 SD2013	壺 口縁	(18.15)	-	(4.7)	粗砂多い、4~6mm大の礫、赤色粒含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目	良		D-31	
	5	D-3 SD2013	甕 口縁	(21.8)	-	(5.1)	粗砂多く、礫わずかに含む、赤色粒含む	灰黄	にぶい黄	ケズリ・ヨコナデ	擬凹線(5条)・ヨコナデ	良		D-30	
	6	D-3 SD2013	甕 口縁	(15.2)	-	(5.1)	粗砂含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-83	
	7	D-3 SD2013	甕 口縁	(25.8)	-	(5.0)	1mm以下の細砂多く、粗砂少し含む	浅黄橙	にぶい黄橙	不明	ナデ?	良		D-29	
	8	1次 SD1003	甕 口縁	-	-	-	砂礫多く含む	灰褐	にぶい橙	ケズリ・口縁部ヨコナデ	擬凹線・ヨコナデ	良		C-13	
	9	D-3 SD2013	高杯 受部	-	-	(5.4)	粗砂多く含む	にぶい黄橙	にぶい橙	不明	不明	良		D-51	
	10	1次 SD1003	器台	-	-	-	砂礫多く含む	にぶい橙	にぶい橙	受部擬凹線	不明	良		C-19	
	11	D-3 SI2002-P1	蓋	-	-	(4.2)	礫少し、粗砂多く、赤色粒多く、海綿骨針含む	明赤褐	橙	不明	不明	良	つまみ径3.4cm	D-32	
	12	D-3 SI2002-P1	甕 口縁	(18.5)	-	(7.9)	2mm大の礫少し、粗砂やや多く、赤色粒多く含む	浅黄橙	にぶい黄橙	ケズリ・口縁部ヨコナデ	擬凹線・ヨコナデ	良		D-33	
	S12003	13	1次 SD1002	壺 口縁	-	-	-	砂礫多く含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		C-12
		14	C・D-3 SD2012	壺 口縁	(13.1)	-	(3.3)	粗砂含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-57
		15	C3 SD2012・2009	壺 口縁	(14.5)	-	(7.4)	粗砂含む	浅黄橙	黒	ナデ	ミガキ・ヨコナデ	良		D-53
16		C-3 SD2009	台付壺 底部	(6.4)	-	(3.5)	粗砂多く含む	橙	橙	不明	不明	良		D-49	
17		C-3 SD2009	台付壺 底部	-	(6.0)	(2.2)	礫、粗砂含む	浅黄橙	にぶい橙	ナデ	ミガキ	良		D-50	
18		1次 SD1002	甕 口縁	-	-	-	砂礫多く含む	浅黄橙	浅黄橙	ケズリ・口縁部ヨコナデ	擬凹線・ヨコナデ・ハケ	良		C-11	
19		C3・4 SD2012・2009	甕 口縁	(19.9)	-	(6.4)	粗砂、海綿骨針含む	橙	橙	ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ・擬凹線(6条)	良		D-52	
20		C-3 SD2009	甕 口縁	(16.15)	-	(6.95)	2mm大の礫、粗砂含む、赤色粒含む	にぶい橙	にぶい橙	ケズリ・口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ後擬凹線	良		D-26	
21		C・D-3 SD2012	甕 口縁	(8.6)	-	(4.6)	粗砂多く含む	にぶい橙	橙	ケズリ	ヨコナデ・ハケ・擬凹線(8条)	良		D-54	
22		C-3 SD2009	甕 口縁	(18.0)	-	(5.1)	粗砂多く、赤色粒多く含む	灰黄~橙	にぶい黄橙	ヨコナデ・ケズリ?	擬凹線(6条)・ヨコナデ	良		D-28	
23		C・D-3 SD2012	壺 口縁	(16.9)	-	(4.8)	礫、粗砂含む	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ	良		D-56	
24		C-3 SD2009	器台 脚部	-	-	(7.9)	粗砂含む	にぶい橙	にぶい橙	ケズリ	不明	良	透孔3ヶ所	D-27	
25		C・D-3 SD2012	高杯 受部	-	-	(4.5)	礫、粗砂含む	にぶい褐	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	良		D-55	
26		C-3 SD2009	高杯 脚部	-	(14.5)	(6.7)	2mm大の礫、粗砂を少し含む、赤色粒多く含む	褐灰~にぶい黄橙	にぶい橙	ハケ目後ミガキ	ミガキ	良	上下反転、受部か?	D-25	
28		D-3 SD2014 北東端	甕 口縁	(19.6)	-	(4.0)	粗砂、海綿骨針含む	浅黄橙	にぶい褐	不明	ヨコナデ・擬凹線(7条)	良		D-58	
29		D-3 SD2014	甕 口縁	(16.5)	-	(5.8)	粗砂多く含む	にぶい黄橙	浅黄橙・にぶい褐	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ・擬凹線(2条)	良		D-47	
30		D-3 SD2014・2013	器台 受部	(14.2)	-	(3.7)	1mm以下の細砂含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良	上下反転、脚部か?	D-46	
31		D-3 SD2014 北東端	高杯 受部	-	-	(2.8)	海綿骨針少量含む	にぶい橙	浅黄橙	ミガキ	ミガキ・赤彩	良		D-48	
32		D-3 P2315・SD2013・2016	甕 口縁	-	-	(4.3)	10mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	不明	擬凹線・ヨコナデ	良		D-24	
33		C-4orD4 P2422	甕 口縁	(18.4)	-	(6.5)	10mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	擬凹線・ヨコナデ・ハケ	良		D-17	
36		D-3 P2313	装飾器台	-	-	(3.2)	10mm程度の砂粒ほんの少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	良	赤彩・海綿骨針含む	D-14	
37		C-3・4 灰色濁地山土	蓋	-	-	2.3	細砂やや多く含む	橙	橙	不明	不明	良	つまみ径接地点:2.9、外径:3.4cm	D-61	
38		D-3	壺 口縁	(18.0)	-	(4.5)	礫、粗砂少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-63	
S12004		39	D-4 P2335 (P2145)	台付壺 脚部	-	9.9	(3.3)	10mm程度の砂粒少量含む	黒	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	不明	良	海綿骨針含む	D-16
		40	C-3 SD2016	甕 口縁	30.9	5.6	40.1	1.0~1.5mm程度の砂粒多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	凹線・ナデ・タタキ	良		D-36
		41	C-3 SD2016	甕 口縁	(18.0)	-	(4.4)	0.5~1.0mm程度の砂粒多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ?	良		D-35
		42	C-4 SD2016	高杯 脚部	-	13.8	(9.2)	0.2~0.5mm程度の砂粒多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	良		D-34
S12005		43	C-2 SK2010 (SD2003) 集中区29	高杯	11.4	-	(7.4)	2mm以下の粗砂:多、2~3mmの小礫少含む、赤色粒含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ・ミガキ・しほり目	ヨコナデ・ミガキ	良		D-59
	44	B-2 SD2003 集中区	甕 口縁	(16.6)	-	(5.9)	粗砂多く含む	にぶい橙	にぶい橙	ハケ・ケズリ	キザミ・ハケ	良		D-60	
	45	B-3 SD2001・B-2	壺 口縁	(20.7)	-	(6.7)	10mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-67	

第2表 平成10年度(第2次)調査区出土遺物観察表(1)

第2節 遺構と遺物

建物No	図版No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量 (cm)			胎土	色調		調整		焼成	特記事項	実測No
				口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面			
SI2005	46	B-3 SD2001-4	台付裝飾壺	-	-	(4.5)	10mm程度の砂粒少量含む	褐灰	浅黄橙	ナデ	ミガキ	良		D-69
	47	B-3 SD2001-9	弥生土器 壺 底部	-	6.3	(3.9)	0.5~1.0mm程度の砂粒多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	不明	良		D-66
	48	B-3 SD2001-7	壺 底部	-	7.6	(3.9)	10mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-65
	49	B-3 SD2001	壺 底部	-	9.5	(9.3)	2~3mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ	良		D-64
	50	B-3 SD2001-8	高杯	-	-	(8.0)	10mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-70
	51	B-3 SD2001-27・28	甕 底部	-	3.5	(9.0)	10mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	ハケ・ナデ	ハケ・ケズリ	良		D-68
	53	B-3	壺 口縁	(18.6)	-	(5.2)	10mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヨコナデ・ハケ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ	良		D-84
	54	C-3 P2093	甕 口縁	(16.9)	-	(3.8)	10mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	擬凹線・ヨコナデ	良		D-23
	55	C-2 P2225	台付壺 底部	-	10.1	(4.5)	0.5~1.0mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	ナデ・ハケ	ナデ	良		D-22
	56	C-3 P2270	台付壺 底部	-	7.8	(2.5)	10mm程度の砂粒少量含む	橙	橙	不明	不明	良		D-15
SB2001周辺	57	A-1 SB2001-D	高杯 脚部	-	(14.9)	(3.9)	10mm程度の砂粒多く含む	浅黄橙	浅黄橙	ケズリ・ナデ	ミガキ?	良		D-37
	58	A-1 SK2008-3	壺 口縁	(13.3)	-	(5.3)	粗砂含む	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ	良		D-45
	59	A-1 SK2008	甕 口縁	(14.0)	-	(3.5)	粗砂多く含む	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	良		D-40
	60	A-1 SK2008	甕 口縁	(19.6)	-	(4.9)	2mm以下の粗砂多く含む	橙	橙	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・擬凹線(8条)	良	口縁残存率 3/12	D-41
	61	A-1 SK2008	甕 口縁	(15.8)	-	(7.1)	粗砂少量含む	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ・タテナデ・ケズリ	ヨコナデ	良		D-39
	62	A-1 SK2008-4	壺 底部	-	(2.3)	(5.3)	粗砂含む	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ケズリ	良		D-44
	63	A-1 SK2008-1	高杯 脚部	-	10.0	(6.8)	粗砂含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	ミガキ・ハケ	良		D-43
	64	A-1 SK2008-6	蓋	-	-	(4.5)	シャモット含む	灰白	浅黄橙	不明	赤彩・不明	良		D-42
	65	A-2 P2117	蓋	-	-	(4.55)	2mm以下の粗砂、海綿骨針含む	にぶい黄橙・褐灰	にぶい黄橙・褐灰	ナデ・ハケ	ナデ・ミガキ	良	つまみ径 接地点:235 外径:29	D-12
	66	A-1 P2139	甕 口縁	(10.1)	-	(4.85)	2mm以下の粗砂含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ・ナデ	良	口縁残存率 4/12	D-9
67	A-1 P2139	椀	(12.8)	-	(3.75)	0.5mm以下の粗砂少し、海綿骨針含む	にぶい橙	橙	ミガキ	ミガキ?	良	口縁残存率 4/12	D-2	
SB2002周辺	68	A-2 P2110	甕 口縁	-	-	(3.95)	2mm以下の粗砂多く、海綿骨針含む	褐灰	にぶい黄橙	不明	ヨコナデ・擬凹線(6条残存)	良		D-6
	69	A-2 P2111	壺 口縁	(16.8)	-	(8.8)	2mm以下の粗砂多く、2~3mmの小礫含む	浅黄橙	にぶい橙	ヨコナデ?	ヨコナデ・凹線・ハケ	良	口縁残存率 5/12	D-5
	70	A-2 P2039	高杯 脚部	-	10.15	(11.4)	2mm以下の粗砂多く、2~3.5mmの小礫含む	にぶい黄橙・褐灰	にぶい黄橙・褐灰	ミガキ・指頭圧痕	ミガキ	良	口縁残存率 10/12	D-10
	71	A-2 P2039	壺 底部	-	8.3	(10.5)	細砂、2mm以下の粗砂多く、2~3mmの小礫少し含む	灰	橙・黒	ケズリ	ハケ・ナデ	良	底部残存率 9/12	D-11
	72	A-2 P2021	甕 口縁	(17.8)	-	(7.9)	1mm以下の粗砂、海綿骨針含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ・ハケ・指頭圧痕	ハケ・ヨコナデ	良		D-8
SB2003周辺	73	A-2 P2002	台付裝飾壺	-	-	(4.7)	1mm以下の粗砂多く含む	灰黄褐	にぶい橙	不明	綾杉文・沈線	良		D-7
	74	B-1 P2203	壺 口縁	12.0	-	(6.1)	2mm以下の粗砂多く含む	橙	橙	ヨコナデ?ハケ	ヨコナデ	良	口縁残存率 10/12	D-1
	75	A-2 P2435	甕 口縁	(26.6)	-	(5.7)	2mm以下の粗砂多く含む	橙	橙	ヨコナデ	擬凹線(8条)・ヨコナデ	良	口縁残存率 2/12	D-4
	76	A-2 P2435	小型鉢	10.2	5.3	4.9	2mm以下の粗砂多く、海綿骨針含む	褐灰	褐灰	工具による雑なナデ	ミガキ・ナデ	良	口縁残存率 7/12 底部残存率 9/12	D-3
SI2005西側周辺	77	C-2 P2062	甕 口縁	(14.0)	-	(5.7)	白粒粗砂やや多く、赤色粒含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙~黒褐	ケズリ・口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	良		D-21
	78	D-2 P2082	台付鉢	(11.5)	(6.15)	7.4	細砂、2~3mm大の砂粒ごく少し、赤色粒含む	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目・ヨコナデ	良		D-13
	79	D-1 排土	高杯 脚部	-	-	(4.1)	10mm程度の砂粒少量含む	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ・ナデ	ミガキ	良	赤彩	D-82
	80	D-2	陶製品 トチン?	-	-	-	-	-	暗赤灰	不明	不明	良	近世?陶製トチン(窯道具)か	D-62

石製品

建物No	図版No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量				石材	特記事項	実測No
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(kg)			
SI2003	27	C-4 P2219(SD2012含)・D-2 SD2012	磨石類	14.9	8.9	9.1	1.505	凝灰岩		石-3
SI2005	52	B-3 SD2001	磨石類	13.80	13.05	5.60	1.1859	凝灰岩		石-1
SB2003周辺	81	B-1 P2162	磨製石斧	12.50	10.2	3.1	0.5761	凝灰岩		-

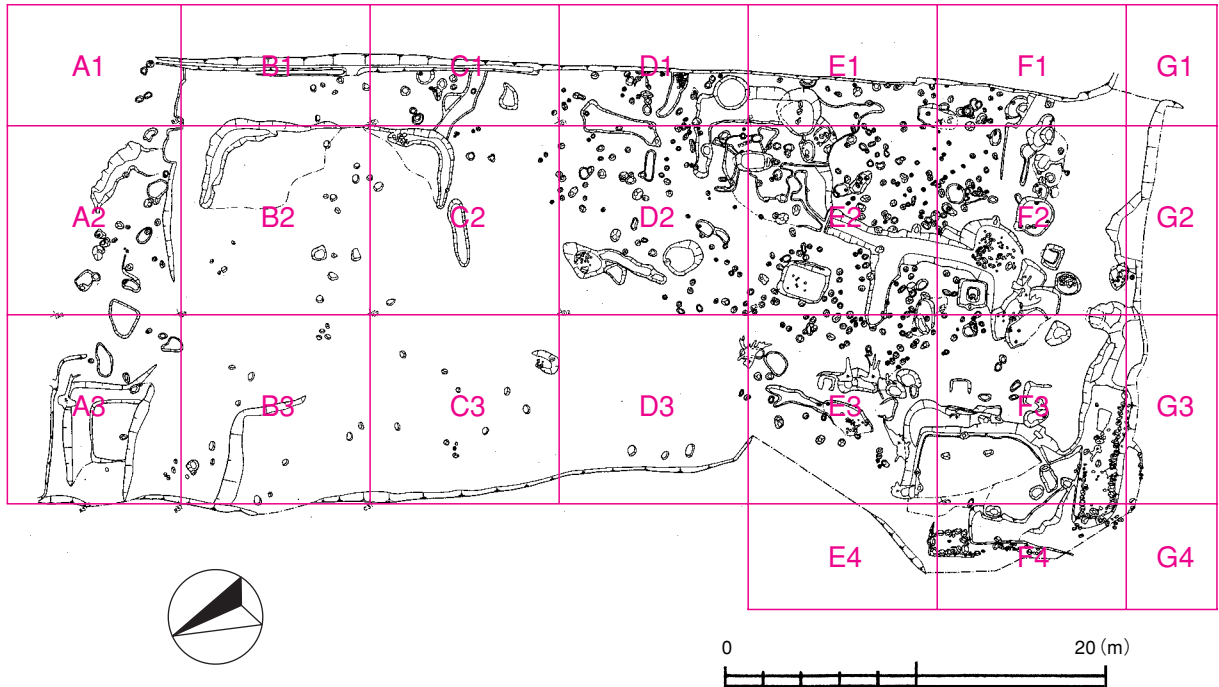
鉄製品

建物No	図版No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量				材質	特記事項	実測No
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)			
SI2003	34	P-3 P2339	刀子	5.2	1.5	0.75	7.61	鉄		-
	35	D-4 灰色土	鉄釘	4.45	頭:1.35 身:0.8	0.75	7.52	鉄		-

第3表 平成10年度(第2次)調査区出土遺物観察表(2)

第4章 平成12(2000)年度の調査

第1節 調査区の概要(第28・29図)



第28図 平成12年度(第3次)調査区 グリッド設定図(S=1/400)

平成12年度の調査以前には、前述どおり平成7年度(第1次)及び平成10年度(第2次)に調査が行われており、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属する竪穴系建物、掘立柱建物、近世末期～近代初頭の火葬場遺構等が確認されている。

平成12年度(第3次)の調査区は平成7年度(第1次)調査区の南側にあたり、地元で以前から通称「ドキザカ」と呼ばれていた谷部を挟み、周囲同様果樹園として利用されていた箇所と、近世末期～現代(調査直前)の墓地として利用されてきた平坦面と斜面部分が該当する。(第29図)

谷部は標高59m～65m代を測り、浅いV字型を呈し東から南へと低くなる。谷部からは弥生土器・古式土師器の壺・甕・高杯等の土器や石器が多数出土している。

平坦部は標高66m～68m代を測り緩やかに東から西へと傾斜する平坦面と、標高62m～66m代を測り平坦面から西と南へ急激に傾斜する斜面に分かれる。この地形を利用して中世以降、火葬遺構や墓地が形成されている。層序は厚さ20～30cmの表土を除去するとすぐに非常に安定した地山となる。

平坦部の南半分には調査開始前まで墓地が存在しており、第2次調査区部分に新たに移設されている。無縁仏となり残されていた墓石をみると、明治期のものが主体であるが近世末期のものもいくつか確認することができた。これは、第1次調査で確認された火葬遺構や墓跡と同時期のものである。もともとこの地域の火葬場は調査区南側に位置する谷奥部に存在していたことが知られていたが、平野から見上げることのできるこの地に、近世末期～近代の額谷村の火葬場と墓地が存在していたことがわかった。

また、平坦部に存在する建物の柱穴と思われるいくつかの小穴から、小片ではあるが弥生土器・古式土師器が出土しており、谷南側の平坦部へも集落が広がることが確認された。しかし、弥生時代～古墳時代の遺構面は後世に完全に削平されていたことから、比較的掘削が深く行われた遺構のみが検出され、竪穴系建物や掘立柱建物のプランは復元できなかった。

現地調査の方法はグリッド法による全面発掘調査である。グリッドは10m方眼で、主軸を調査区の形に合わせ、任意に設定（国土座標の東西南北方位には合っていない。）した。基準点は東西軸を算用数字（0～6）、南北軸をアルファベット大文字（A～E）で表記して組み合わせた区割りを行い、グリッド名は北東の基準点を割り当てた。（第28図）

第2節 遺構と遺物（第30～53図、第4～6表、図版7～14・17～21）

谷部を挟み南側に広がる平坦部は東側から西側にかけて、高低差が最大約6mにもなる緩傾斜地と急傾斜地に立地しており、その地形を利用して中世以降、火葬場と墓地が形成されている。

今回の調査により、平坦部平坦面からは火葬土坑や方形の溝で区画された中世の墓が確認され、西側から南側にかけての斜面上部からも火葬遺構や配石墓、半横穴状に掘られ底に焼土と炭が堆積した方形土坑等が確認されており、五輪塔や宝塔などの石造物や蔵骨器と思われる珠洲焼片、陶磁器片、人骨片も出土する等、この地に中世の墓域が広がっていたことが確認された。これにより、当地では中世から現在までの間、墓域として利用されてきたことがわかった。

出土した遺物は総量でコンテナバット17箱におよぶ。内容は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、鉄製品・ガラス製品等である。量的には中世の石造物が圧倒的に多く、弥生時代終末～古墳時代初頭頃の谷部からの土器、平坦部の墓地からの中世土師器・珠洲焼・陶磁器等がそれに次ぐ。

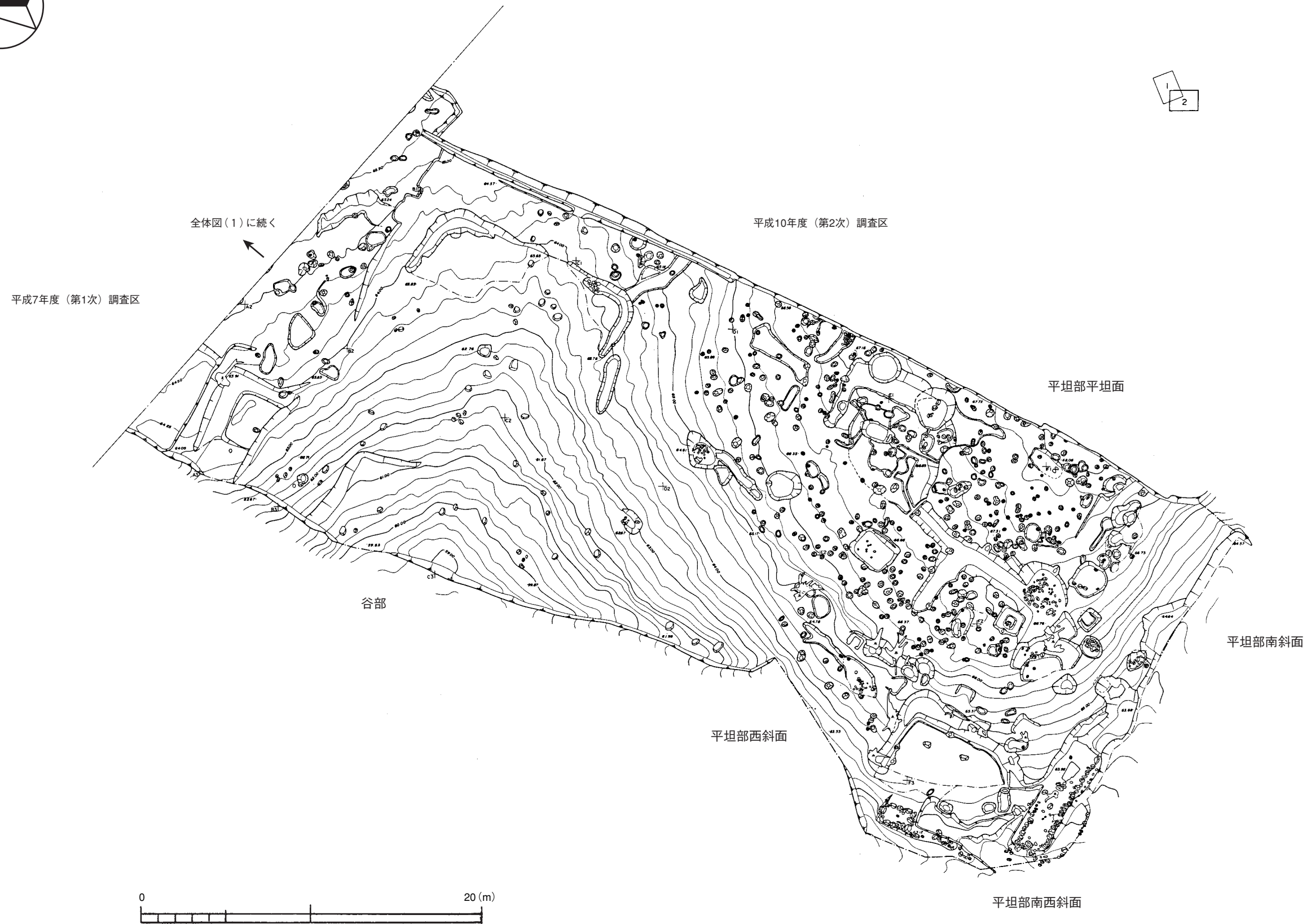
谷部 平成7年度（第1次）調査区の南側で、地元でも以前から通称「ドキザカ」と呼ばれていた部分にあたり、西側の集落から果樹園や墓地へと通じる小道が通っていた場所である。谷部には約30～50cm代の自然礫を多量に含み、上層は暗褐色、下層は黒褐色を基本とする堆積土中から周辺の平坦部から流れ込んだと見られる弥生時代終末～古墳時代初頭頃の土器（No.82～100）が多量に出土している。遺物の取り上げは、谷部を北斜面・中央・南斜面に分け、それぞれ上層・下層に分けて行った。

土器は集落から自然に流されて谷部に堆積したということも考えられるが、高杯脚部（No.90～93）が目立ち、まとめて出土する大型の破片も多いことから、自然に堆積したというよりも、当時の人が意識的に廃棄し、祭祀を行っていた可能性も考えられる。また、類例の少ない高さ約5cm大の砲弾型で、頂部に5mm程の穴のあいた小型の容器（No.100）も出土している。

また、谷部の東側と西側には斜面を平坦に造成し山側3方に排水用と考えられる区画溝を掘った平坦面が2箇所を確認された。東側の平坦面1は南北方向の区画の外幅約14m、溝幅約0.8～1m、深さ約0.4mを測る。出土遺物は無く、時期不明であり、後世の開墾によるものである可能性もあるが、溝内に集石が確認されており、平坦面が墓地として利用されていた可能性も考えている。

墓1 火葬土坑墓SK3022は整地された平坦部の中央に位置し、3方を方形の区画溝で囲まれ、中に黒灰が多く堆積した方形の土坑である。区画の規模は東西約7m×南北約7.5m、溝幅約1～2m、深さ約0.55m、土坑の規模は約1×2m、深さ約0.4mを測る。土坑底には少量の骨片が円形に堆積しており、火葬後曲物に入れて埋葬したとも考えられるが、1個体分の人骨には量が足りていないことから、火葬後の取り残しと思われる。

額谷遺跡遺構平面図2



第29図 額谷遺跡 全体図(2) (S=1/250)

さらに火葬土坑と区画溝の内部に盛土がされた後、新たに4方に回る方形の溝が掘られ、区画中央に掘られた小土坑に古瀬戸の瓶子(No.113)が蔵骨器として埋葬されていたようであるが、削平のため墓の上部構造はわかっていない。新たに掘られた区画溝の外幅約6m、溝幅約1.2m、深さ約0.25mを測る。このような火葬土坑を中心として方形の溝で囲まれた区画墓は、白山市の宮永ほじ川遺跡などでみつかっているが、これらは溝から五輪塔や宝塔などの石造物が多量に出土しており、額谷遺跡の区画墓の上部構造も墳墓に石造物が置かれているものだったと考えている。

また、区画溝が埋まった後に円形の土坑SK3021(径約2.5m)とSK3023(径約2m)等が掘られている。焼土や炭など焼けた痕跡は確認されなかったが、集石もあり土坑墓と考えている。

墓2 平坦部中央に位置する2方を方形の区画溝で囲まれた区画墓。区画の規模は東西約7m×南北約8.5m(推定)、溝幅約1.1~1.3m、深さ約0.3mを測る。区画中央に位置する方形の火葬土坑墓SK3002は、壁面が焼け、底には炭が堆積しており、その上に珠洲焼の播鉢片(No.105)や完形の土師器皿(No.106~112)が7枚程入れられていた。(第44図)土坑の規模は約2×2.5m、深さ約0.5mを測る。北側に接するP3020も内部が焼けており火葬時の煙出しの穴であった可能性がある。土坑内部からは、他に弥生土器片(No.101・102)が出土したが、蔵骨器や骨片は確認されておらず、土坑上部も削平されていたため、上部構造やその後墓として用いられたかどうかはわからなかった。

墓3 平坦部南側に位置する3方を方形の区画溝で囲まれた区画墓。区画の規模は東西約7m南北約7.5m(推定)、溝幅約1.1~1.5m、深さ約0.45mを測る。区画中央からやや北側に位置する不整楕円形の土坑SK3003の規模は約1×2m、深さ約0.2mを測る。

また、区画内の南側に位置する方形の土坑SK3009は、土坑中央に埋葬に用いられたと考えられる小穴があり、その周りには小礫がしきつめられていた。規模は約1.5m四方、深さ約0.25mを測る。

SX3007(3006)は、区画溝SD3004の南側コーナーに掘られた不整楕円形の土坑である。内部は集石が検出され、珠洲焼の播鉢片(No.117)が出土している。また、覆土からは水色のガラス小玉(No.116)も1点出土している。形態から弥生時代のものであると考えられ、周辺からの流れ込みと考えている。

墓4 平坦部中央に位置する方形の溝で囲まれた区画墓。区画の規模は東西約7.5m×南北約12m、溝幅約1.2~1.5m、深さ約0.1~0.45mを測る。平坦面最上部に位置することから、削平も大きく受けていると思われ、溝も浅く全周しない。区画内中央部分に土坑は確認されなかったが、かなり北側に寄ったところに不整楕円形の土坑SK3010が確認されている。土坑の規模は約0.8×1.5m、深さ約0.2mを測る。また、区画内には柱穴状の小穴が多く検出され、南側に位置するP3061周辺に掘立柱建物が存在する可能性が高いが、建物を復元するまでには至らなかった。

墓5 埋葬施設は確認されなかったが、2方を溝により区画された区画墓と考えられる。平坦部北側に位置し、区画の規模は東西約4.5m以上×南北約5mを測る。溝内に集石が検出されている。

墓6~8 平坦部西斜面上段に位置する区画墓。斜面山際に等高線に沿った方向で溝を掘り、それに近接して略円形の土坑がいくつか掘られている。土坑には集石が伴うものもある。

墓7-SK3017からは近代以降の煉瓦組の火葬遺構が確認されている。近接した土坑からは炭や焼土が確認されており、火葬後近接地の土坑に埋葬していたようである。

墓9 配石墓SX3003は平坦部南西斜面上段に位置し、表土除去後は多量の拳大の礫が斜面に堆積していた。配石墓内部には人頭大の礫を並べた区画列が見られ、複数の墓が同時に存在しており、礫の間から珠洲焼の甕や播鉢（No.118～121）、土師器皿（No.122・123）等が出土している。また、墓1で出土した古瀬戸の瓶子（No.113）と同一固体の破片も出土している。

配石墓の下部からは、中央部に平らな面を外側にそろえた石を方形に積み上げた基壇の基礎が確認され、基壇石組東側には宝塔（No.124～129）が粉々になった状態で検出された。組合せは不明であるが、基壇上部に宝塔を置き、珠洲焼の蔵骨器を埋納していた単独の墓であったと考えられる。この宝塔は、従来五輪塔として分類されてきたが、笠の上部に沈線を巡らせ、複弁反花の露盤装飾を持つ加賀地方独自の宝塔として近年新たに分類されているもので、14C後半頃のものが多く確認されている。意図的に配石東側にまとめられていたことから、何らかの宗教的あるいは政治的要因により壊されたものと考えられる。表土から出土した相輪（No.127）もこの墓からの可能性が高いと考えている。

また、平坦面底には長さ約1mの石が2個置かれており、平坦面の斜面西側半分は流されていることから、元々は斜面を大規模に造成して山側に排水溝を巡らせた平坦面を作り、4個の大石を礎石とした墓に伴う建物が建てられていた可能性も考えられる。（第45図、写真図版11・12）

墓10 平坦部南西斜面下段に位置する石区画1は、自然石の平坦面を外側に向けて組まれた墓の基壇である。上部は削平されていたが、周辺の表土中から珠洲焼甕（No.133・134）の破片と五輪塔の火輪（No.132）が出土しており、この墓に伴うものと考えている。

また、隣接した石列1には、五輪塔の火輪（No.131）が転用されている。

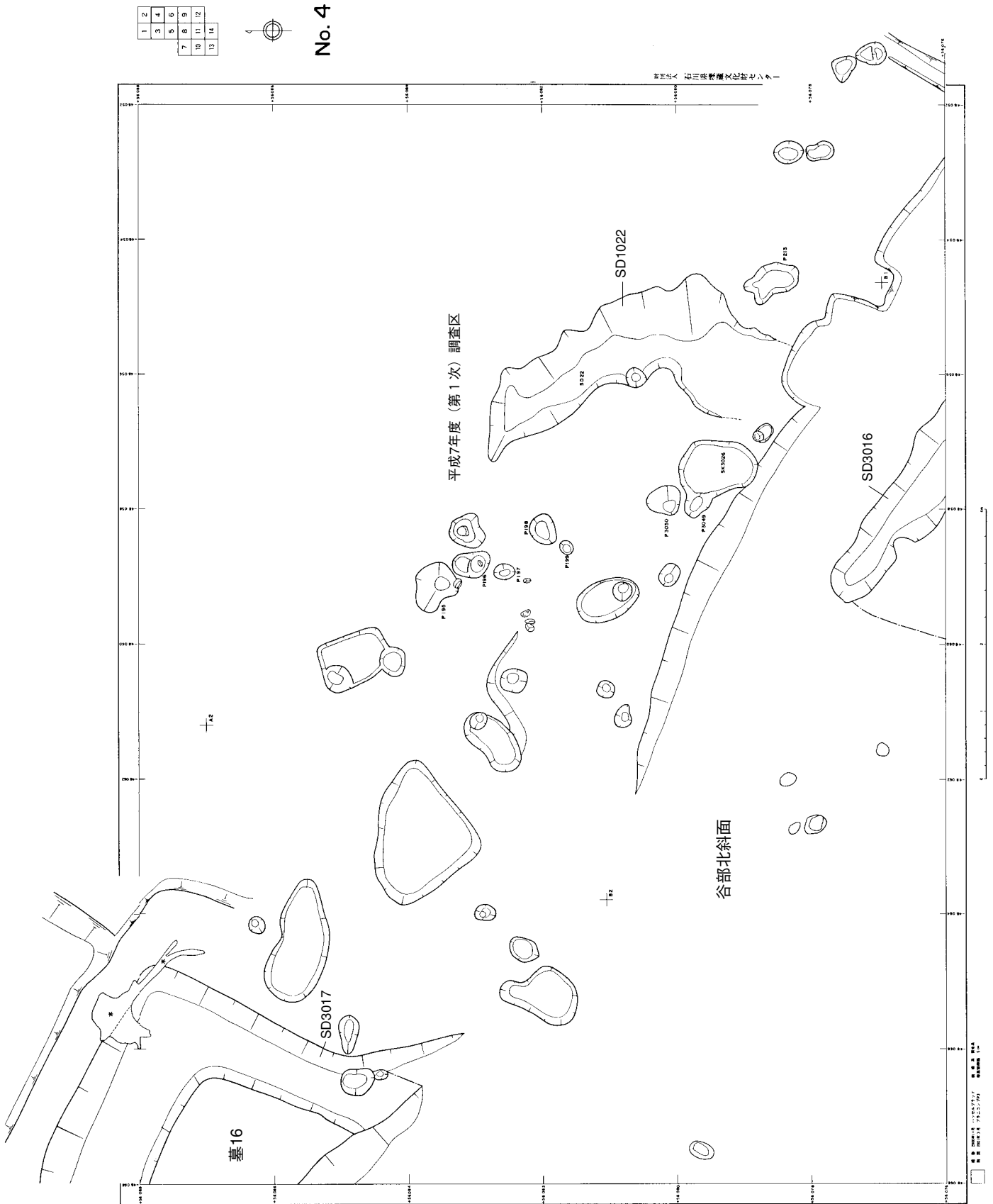
墓11～13 平坦部南西～南斜面上段に位置する土坑墓。それぞれ略方形の土坑が重なるようにして検出されている。集石を伴うものもある。

墓13-SK3007は、底が焼け、炭が堆積していた土坑である。石が3つ並んで検出されており、もともとは火葬のための石組みがあった可能性がある。

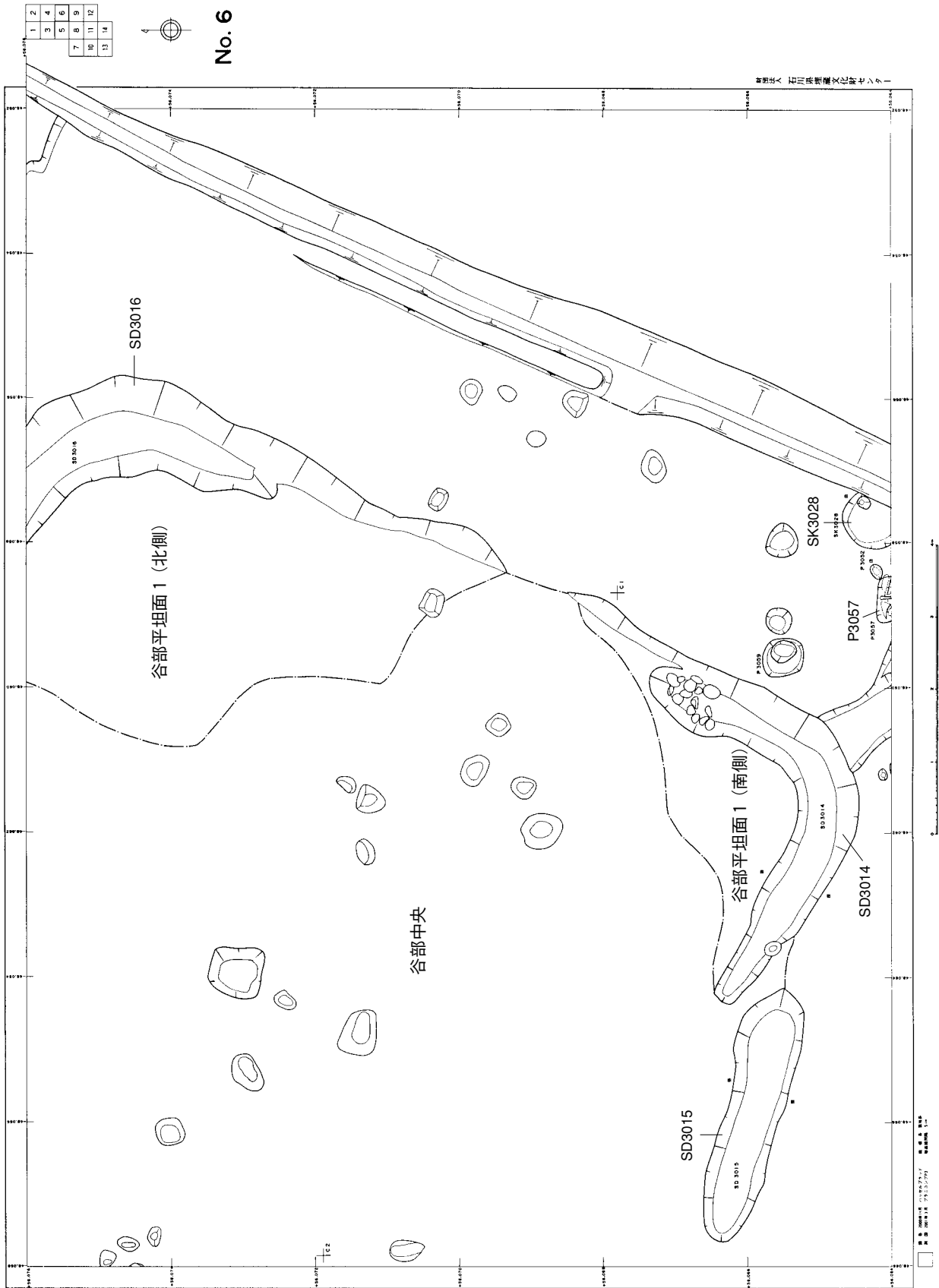
墓14 平坦部南斜面下段に位置する墓14は、斜面を平坦に造成し、山側に半横穴状に土坑を掘り込んでいる。SK3005-a上部には素焼きの蔵骨器が石製の枠組（No.135）に入れられて検出されたが、下部に掘られた方形の土坑からは焼土と炭が検出されており、火葬が行われていた可能性もある。

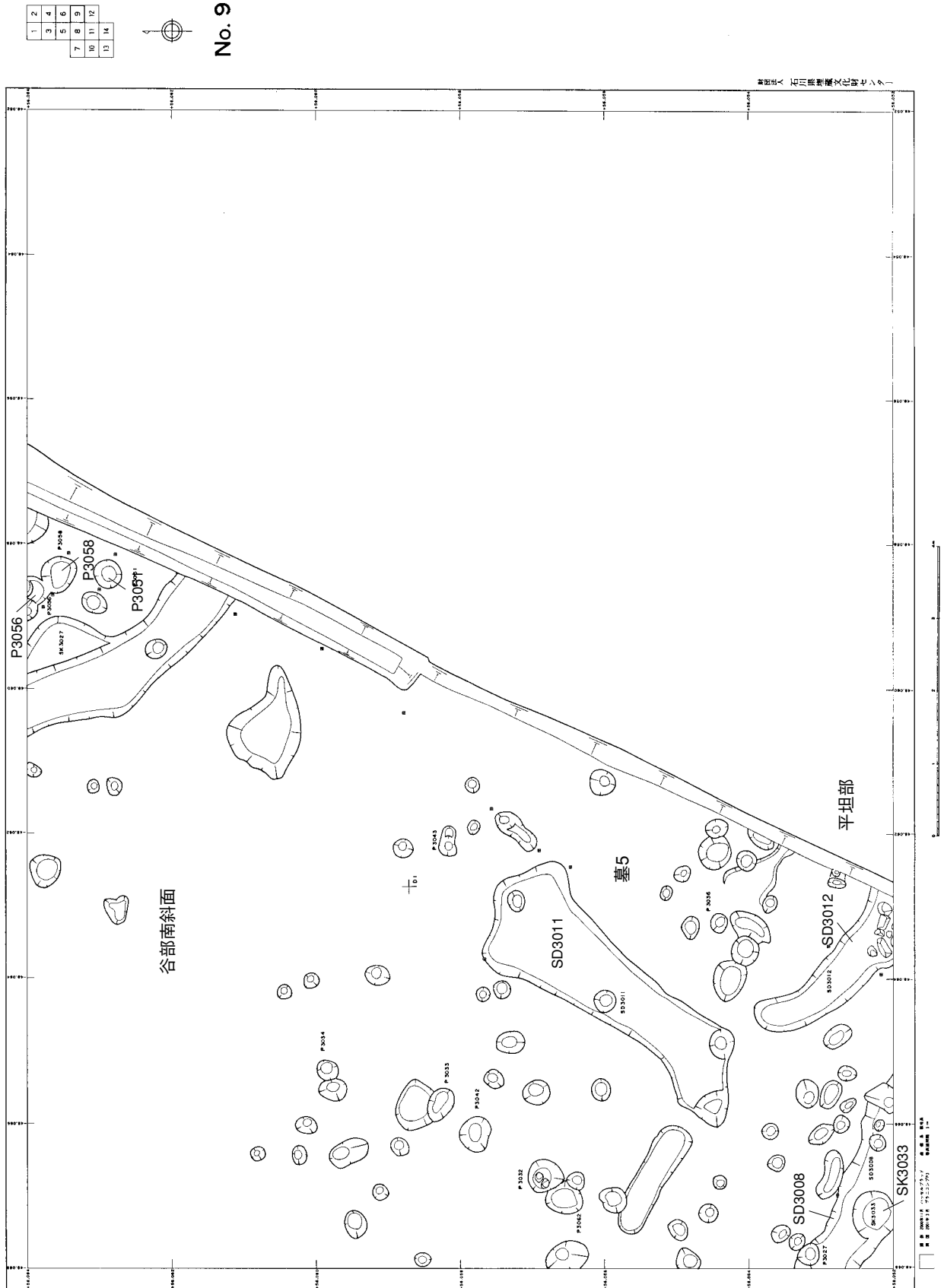
墓15 平坦部南西斜面下段に位置する石区画2は、石組の墓基壇で、内部でさらにいくつかの区画に分かれる。中で検出された煉瓦組や扁平な自然石をはずすと下から素焼きの蔵骨器が出土した。蔵骨器の中には小型の曲物が入れられていたものもあり、人骨も検出されている。

墓16 谷部北側に単独で位置する区画墓。周囲に方形の溝を巡らせ、中央に盛土で基壇をつくり、墓石を置いていたものである。

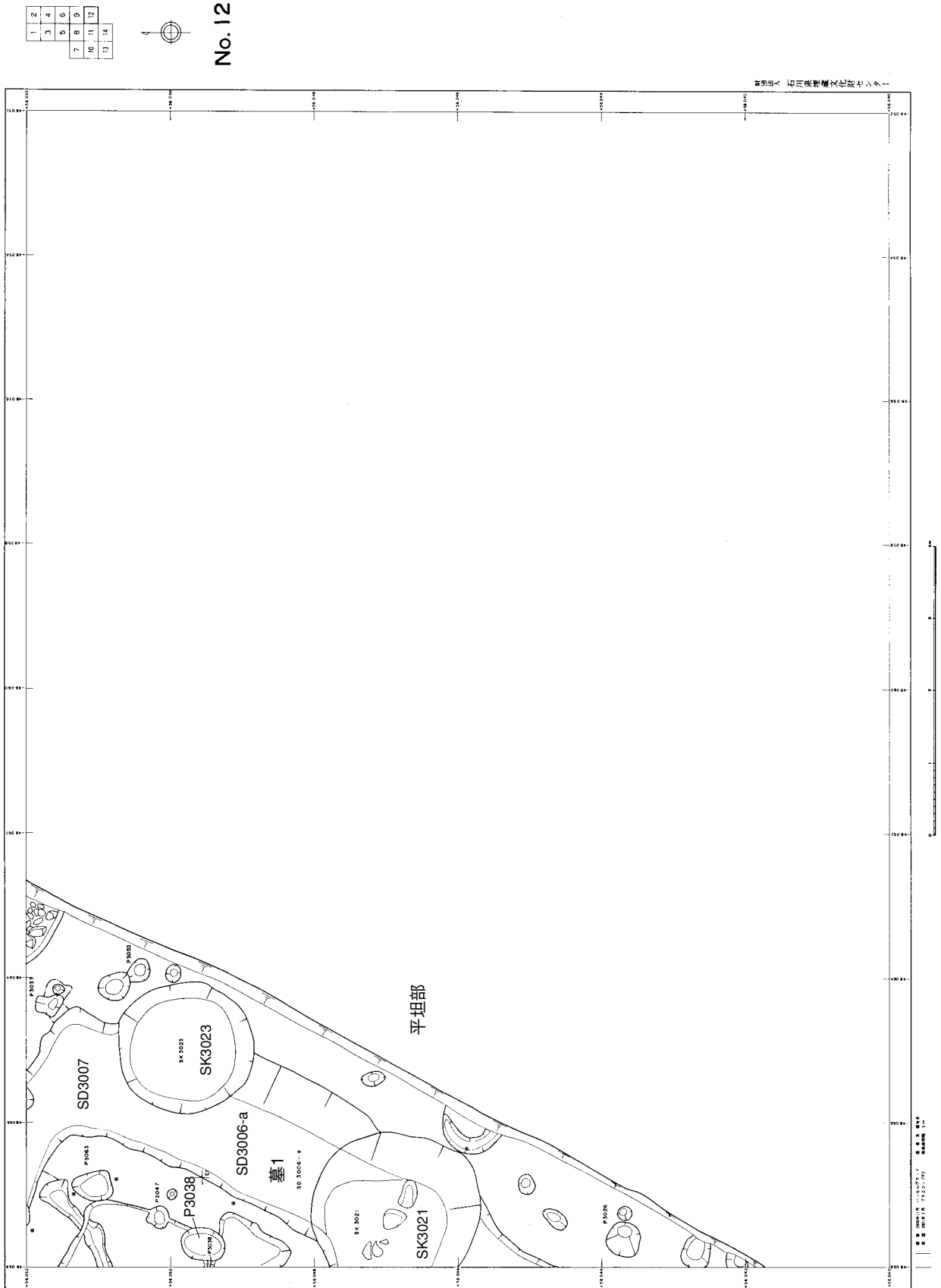


第30図 平成12年度(第3次)調査区(1)遺構平面図(S=1/80)





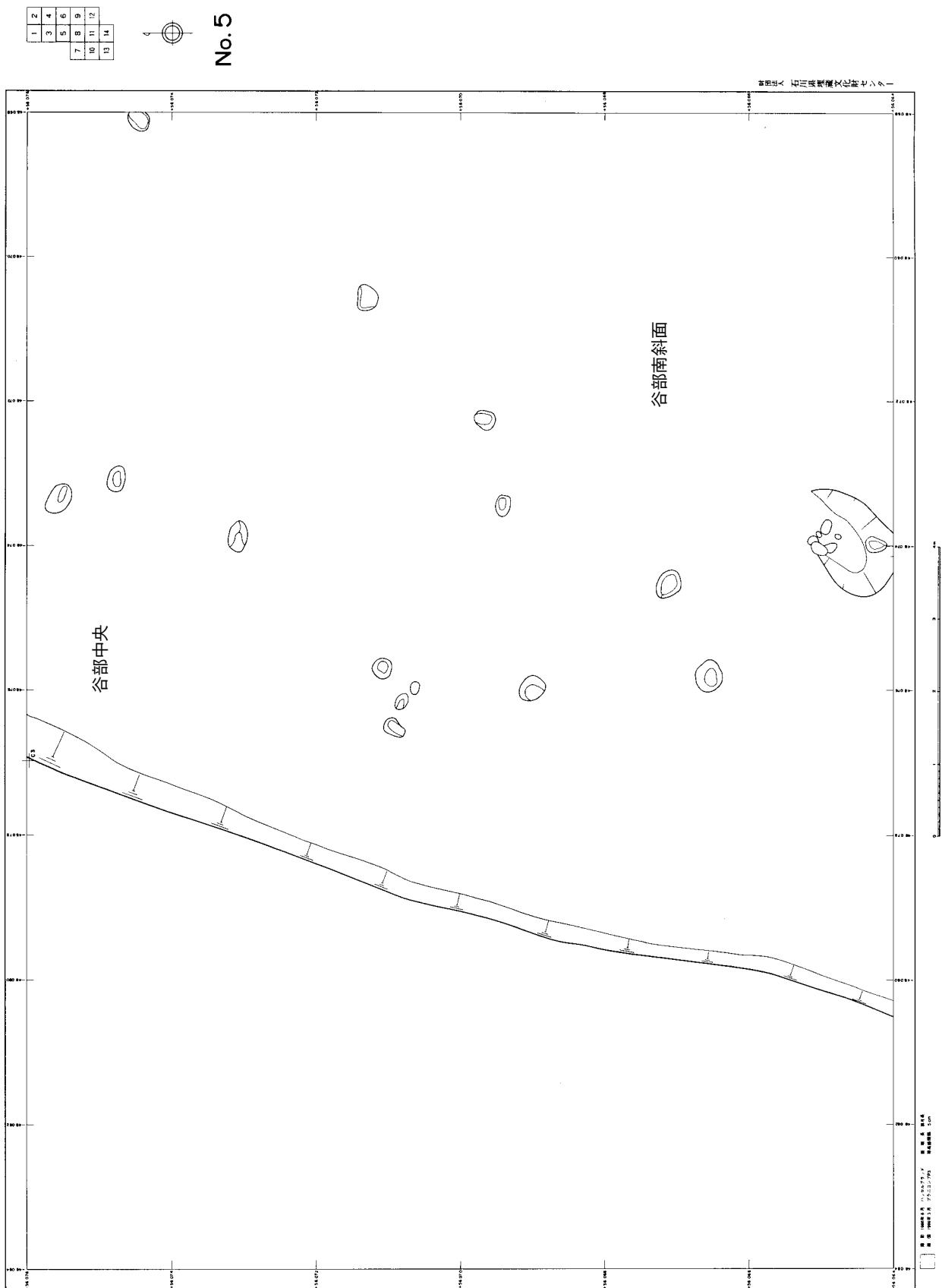
第32図 平成12年度(第3次)調査区(3)遺構平面図(S=1/80)



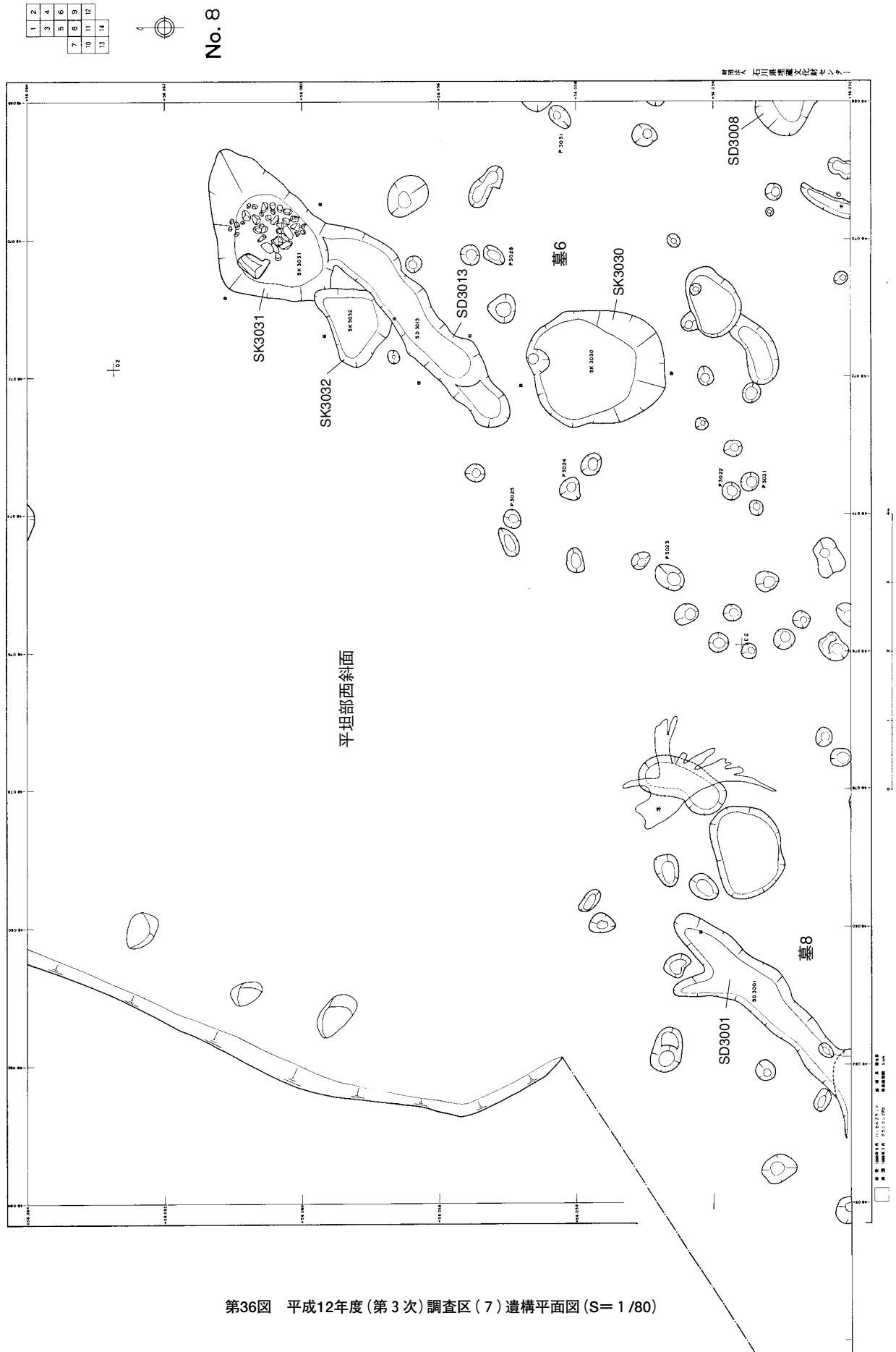
第33図 平成12年度(第3次)調査区(4)遺構平面図(S=1/80)



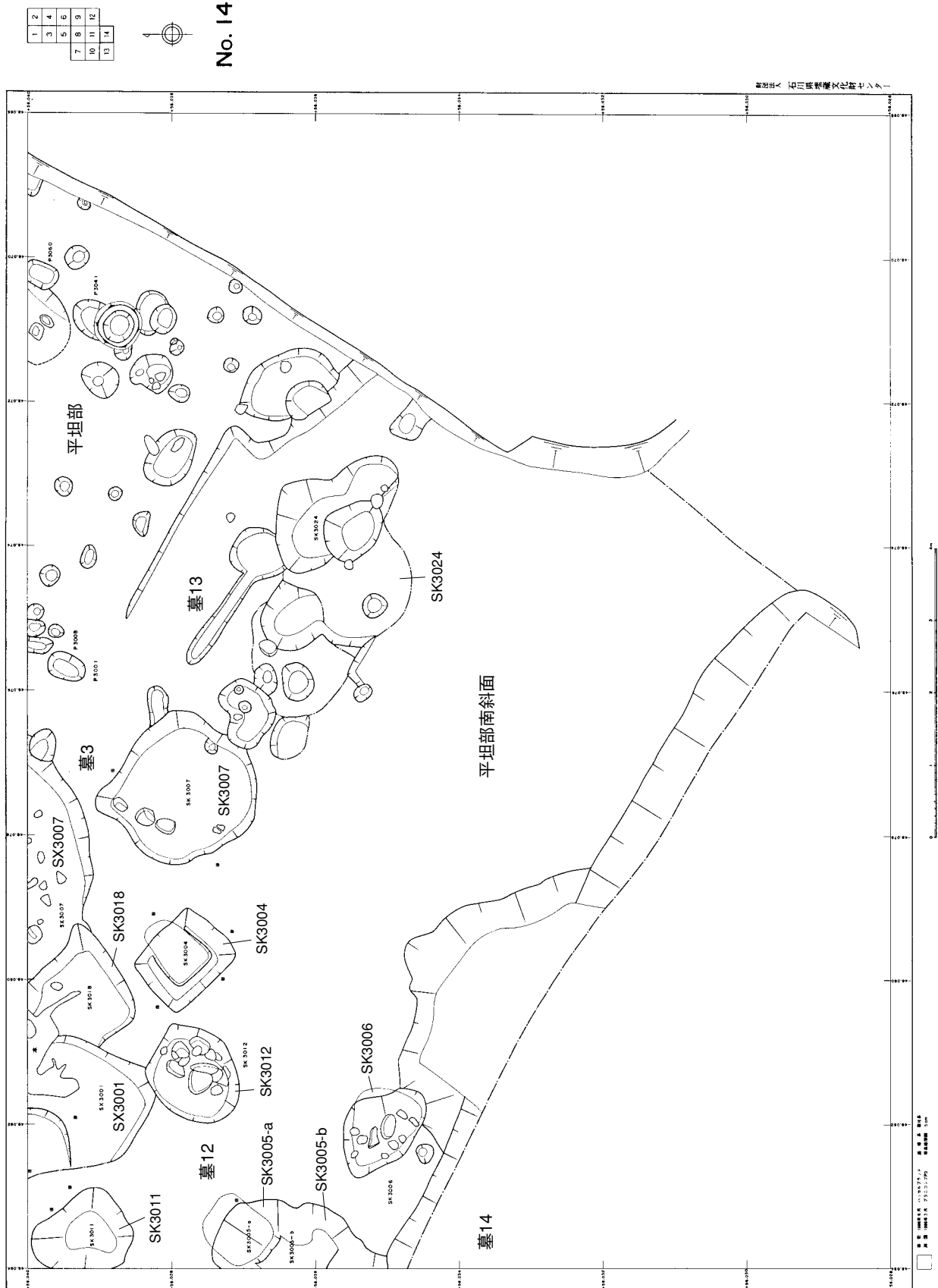
第34図 平成12年度(第3次)調査区(5)遺構平面図(S=1/80)



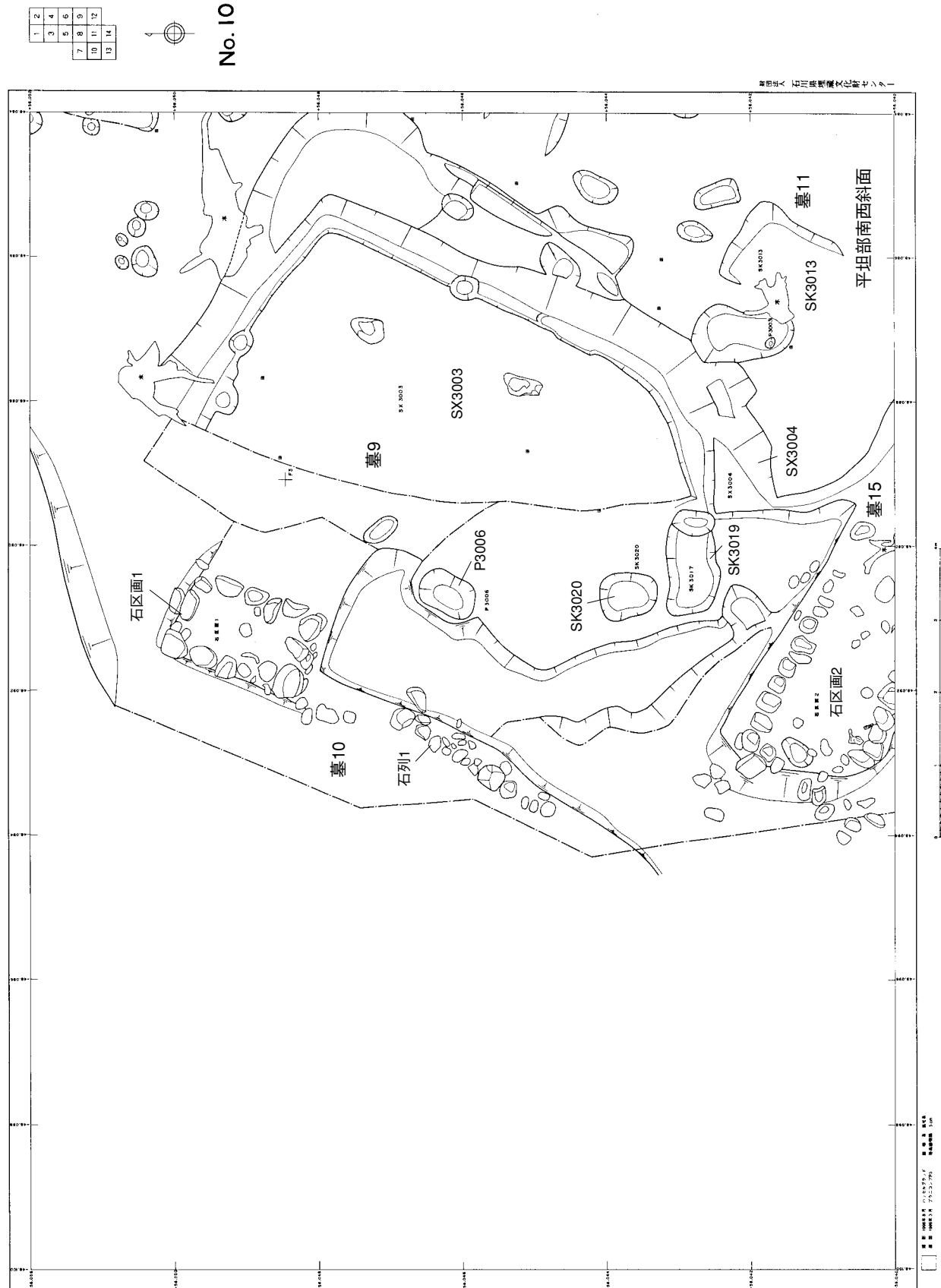
第35図 平成12年度(第3次)調査区(6)遺構平面図(S=1/80)



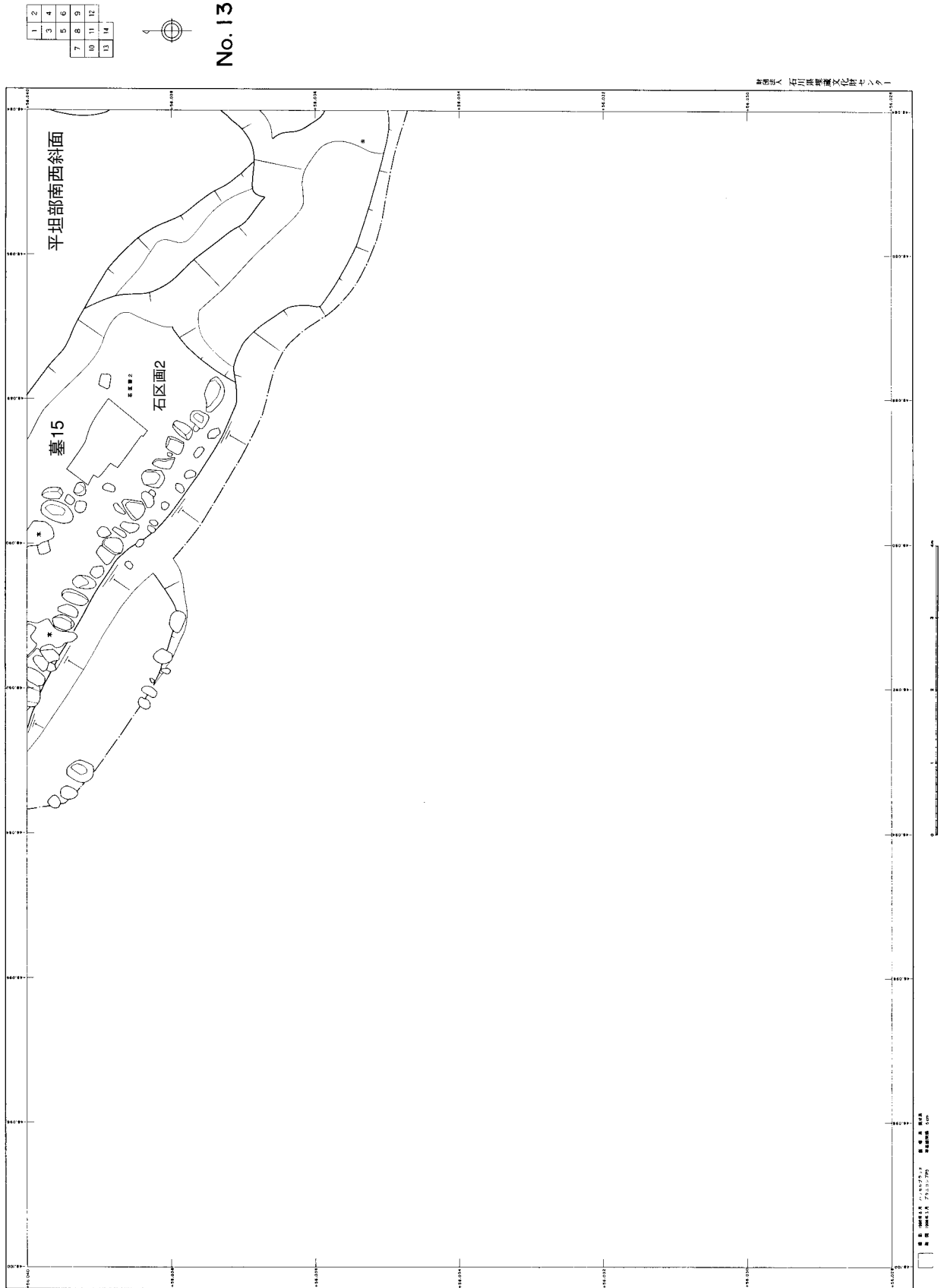
第36図 平成12年度(第3次)調査区(7)遺構平面図(S=1/80)



第38図 平成12年度(第3次)調査区(9)遺構平面図(S=1/80)



第39図 平成12年度(第3次)調査区(10)遺構平面図(S=1/80)



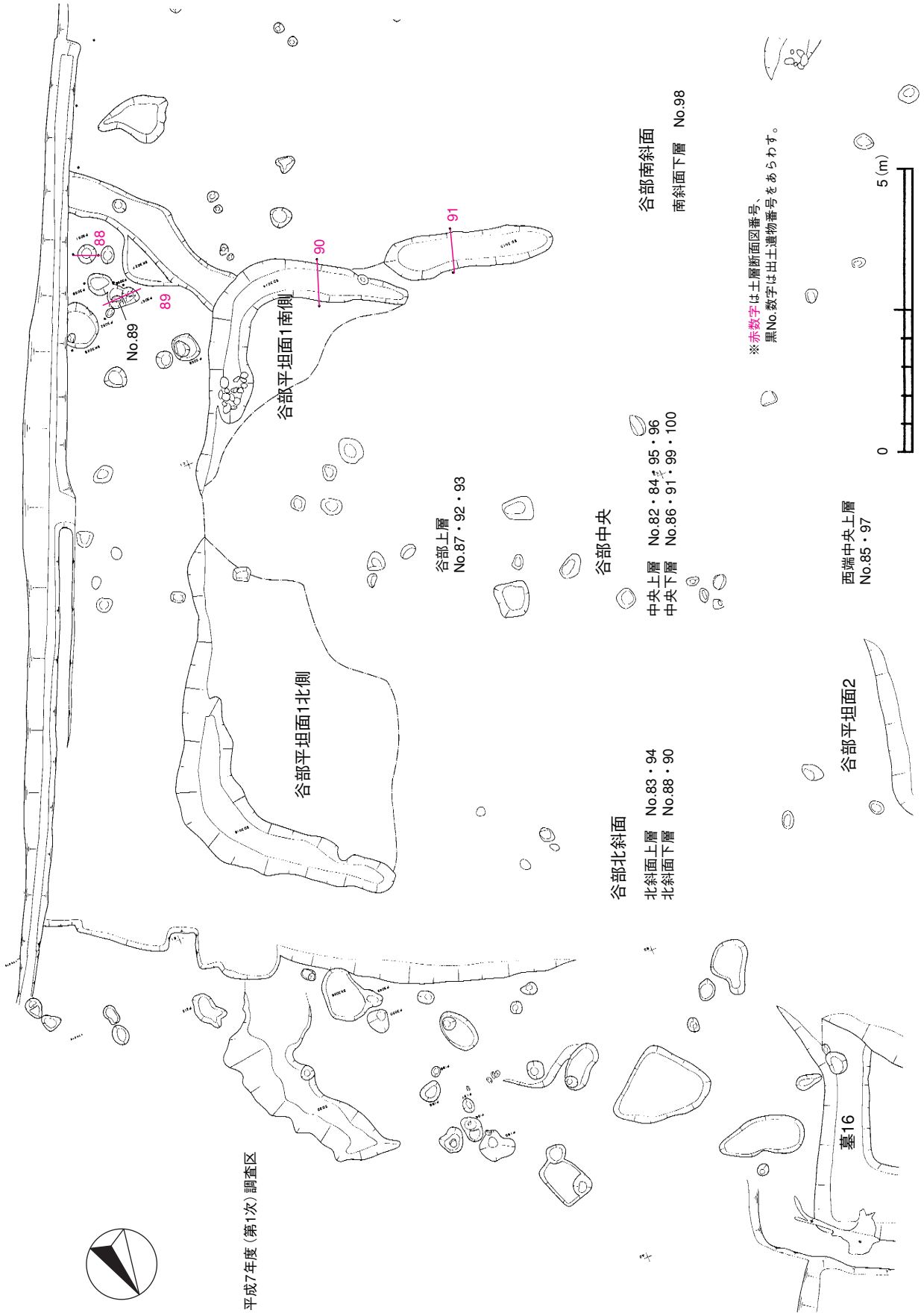
第40図 平成12年度(第3次)調査区(11)遺構平面図(S=1/80)

第2節 遺構と遺物

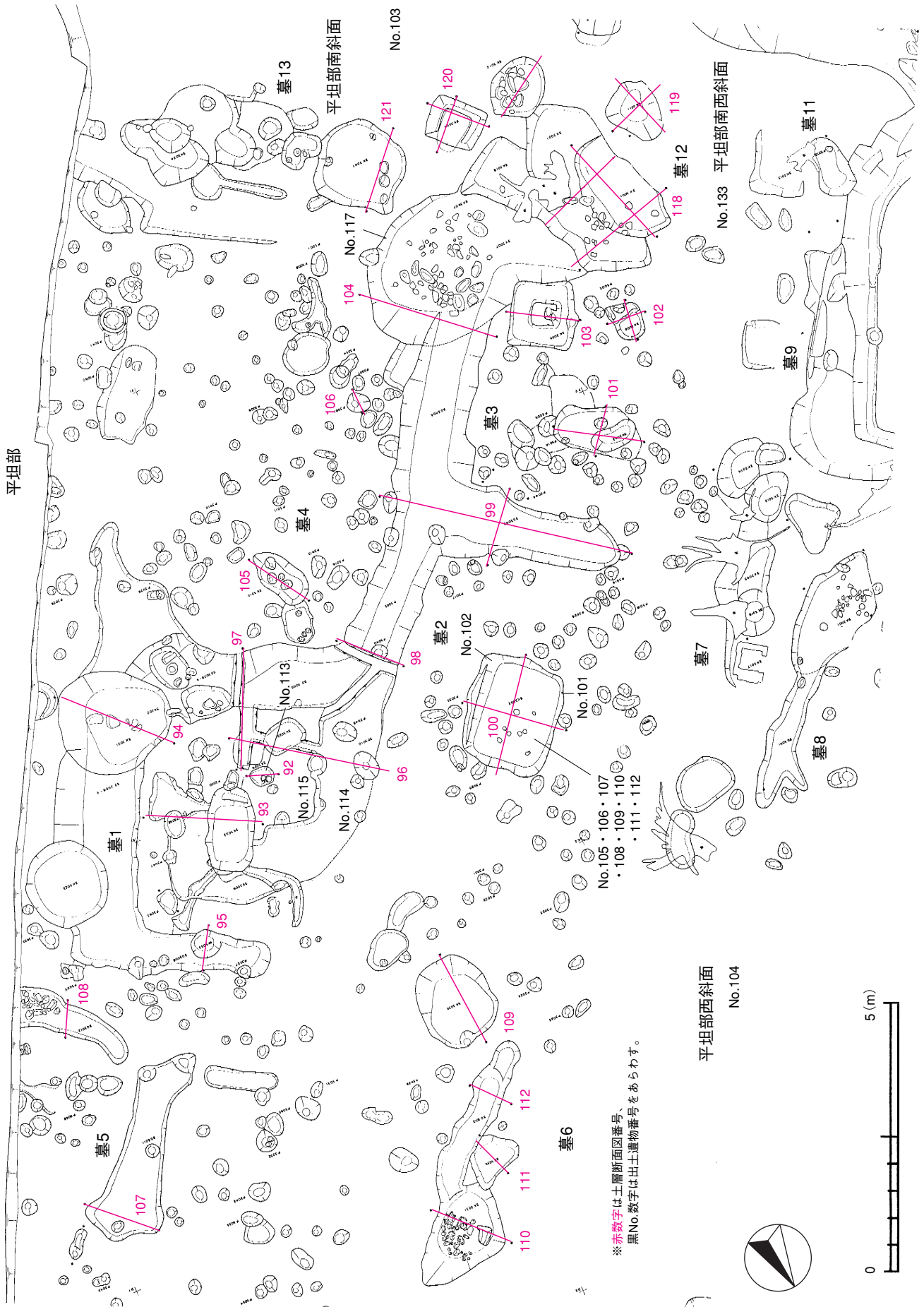
谷部	グリッド	遺構名	断面No	遺物No	備考
上層				87・92・93	
北斜面上層				83・94	
北斜面下層				88・90	
中央上層				82・84・95・96	
中央下層				86・91・99・100	
中央西端				85・97	
南斜面上層					
南斜面下層				98	
南斜面東端	D-2	P3028			
	C-1	P3051	88		
	C-1	P3056	89	89	
	C-1	P3057			
	C-1	P3058			
平坦面1北側	B-2	SD3016			
平坦面1南側	C-2	SD3014	90		
	C-2	SD3015	91		
平坦面2北側					
平坦部					
西斜面	D・E-3			104	
南西斜面	E・F-3			133	
南斜面	F-2・3			103	
墓 No					
墓 1	D・E-2	SK3022	93		
	E-2	SK3029	92	113	
	E-1-2	SK3021	94		
	D-1	SK3023			
	D-2	SK3033	95		
	E-2	P3030			
	E-2	P3038			
	E-2	P3041		114	P3041の南側より出土
	E-2	SD3005	97・98		
	E-1	SD3006a			
	E-2	SD3006b			
	D-1	SD3007			
	D-2	SD3008	95		
	D-2	SD3009			
	E-2	SD3010	96		
	D・E-2	盛土		115	
墓 2	E-2	SK3002	100	101・102・105・106・107・108・108・109・110・111・112	
	E-2	P3020			
	E-2・3	SD3002	99		
	E-2	SD3003	98		
墓 3	E-2・3	SK3003	101		
	F-3	SK3008	102		
	F-2	SK3009	103		
	F-2	SX3006		116	
	F-2	SX3007	104	117	
	E・F-2	SD3004	104		

墓 No	グリッド	遺構名	断面No	遺物No	備考
墓 4	E-2	SK3010	105		
	E-2	P3061	106		
墓 5	D-1・2	SD3011	107		
	D-1	SD3012	108		
墓 6	D-2	SK3030	109		
	D-2	SK3031	110		
	D-2	SK3032	111		
	D-2	SD3013	112		
墓 7	E-3	SK3014	113		
	E-3	SK3015			
	E-3	SK3016	114		SX3005と切合う
	E-3	SK3017			
	E-3	SX3005	114		SK3016と切合う
	E-3	SK3001	115		SD3001と切り合う
墓 8	E-3	SK3001	115		SD3001と切り合う
	E-3	SD3001	115		SK3001と切合う
墓 9	E・F-3	SX3003	116・117	(113)・118・120・121・122・123・124・125・126・128・129	
	F-3	SX3004		130	
	F-4	P3006		119	
墓 10	E・F-4	石区画1		127・132・134	石区画1の北側表土より出土
	F-4	石列1		131	
墓 11	F-3	SK3013			
	F-3	SK3019			
	F-3	SK3020			
墓 12	F-2	SK3004	120		
	F-3	SK3011	119		
	F-2	SK3012			
	F-2	SK3018			
	F-2・3	SX3001	118		
墓 13	F-3	SX3002	118		
	F-2	SK3007	121		
墓 14	F-2	SK3024			
	F-2・3	SK3005a	122	135	
	F-2・3	SK3005b	122		
	F-2	SK3006			
墓 15	F-3・4	石区画2			
墓 16	A-3	SD3017			

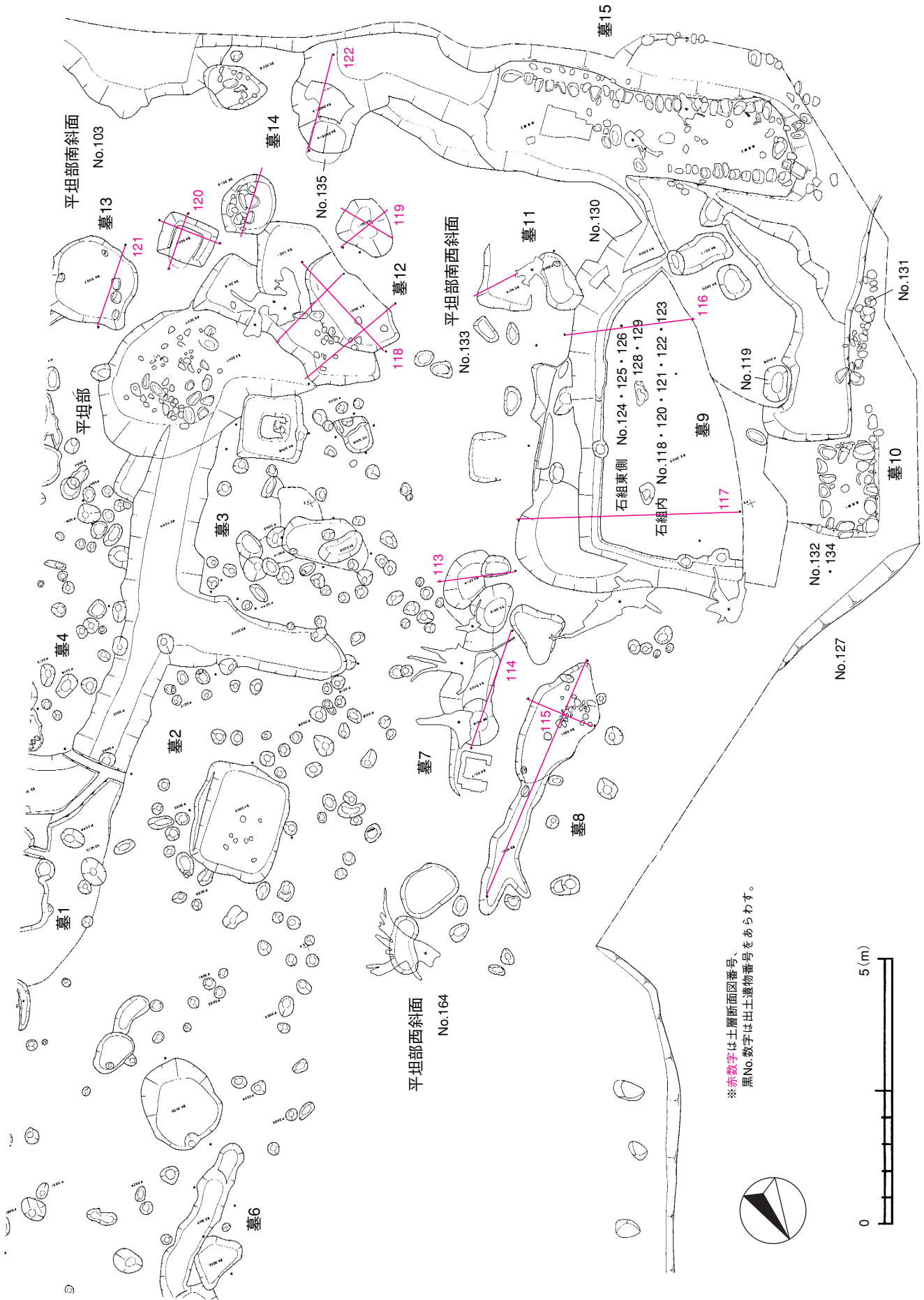
第4表 平成12年度(第3次)調査区主要遺構一覧表



第41図 平成12年度(第3次)調査区 谷部遺構(SD3014・SD3015・P3056他)土層断面・出土遺物位置図(S=1/120)



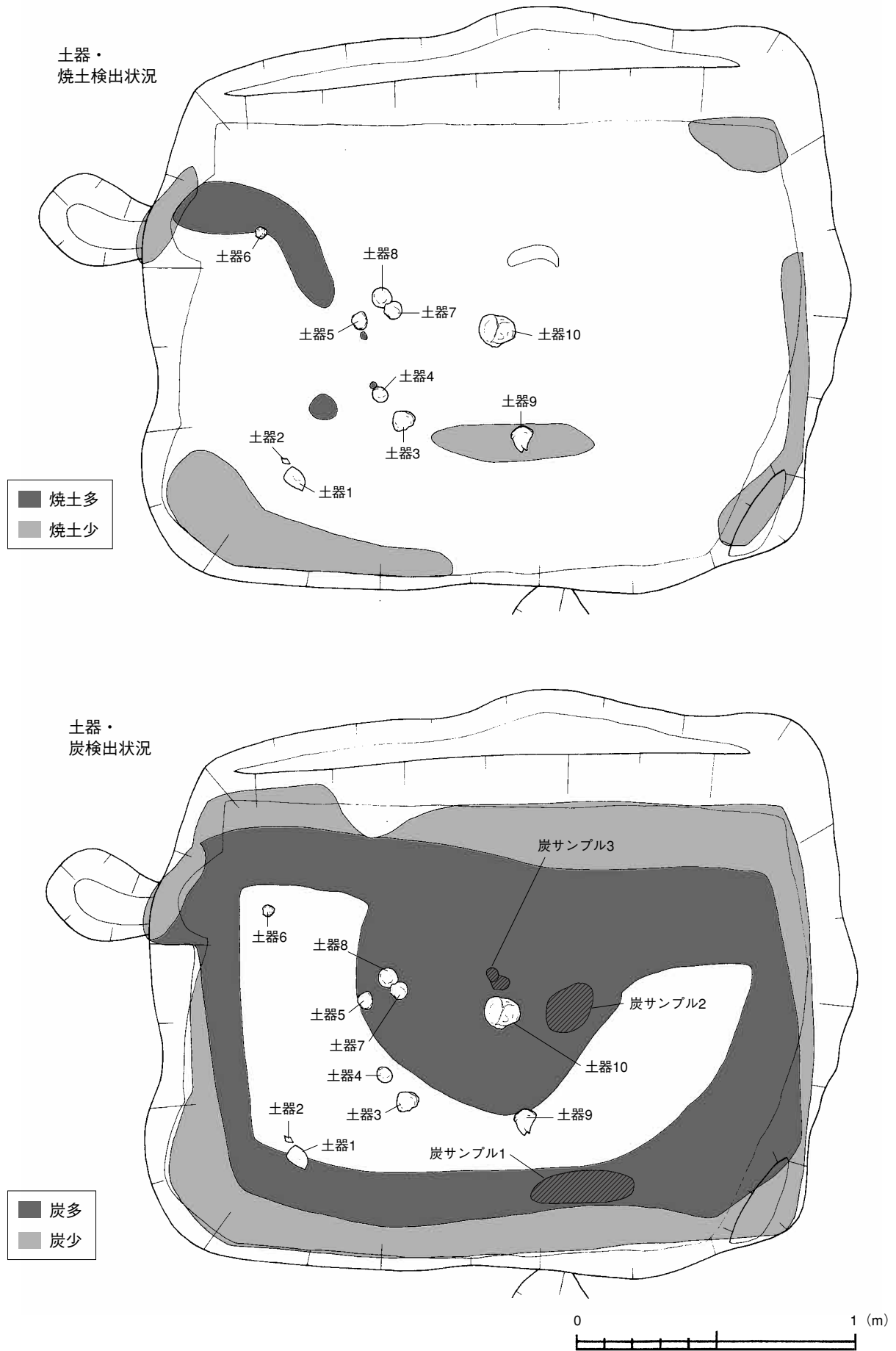
第42図 平成12年度(第3次)調査区 平坦部遺構(墓1~6)土層断面・出土遺物位置図(S=1/120)



第43図 平成12年度(第3次)調査区 南西斜面部遺構(墓7~15)土層断面・出土遺物位置図(S=1/120)

※赤数字は土層断面図番号、
黒No.数字は出土遺物番号をあらわす。

第2節 遺構と遺物



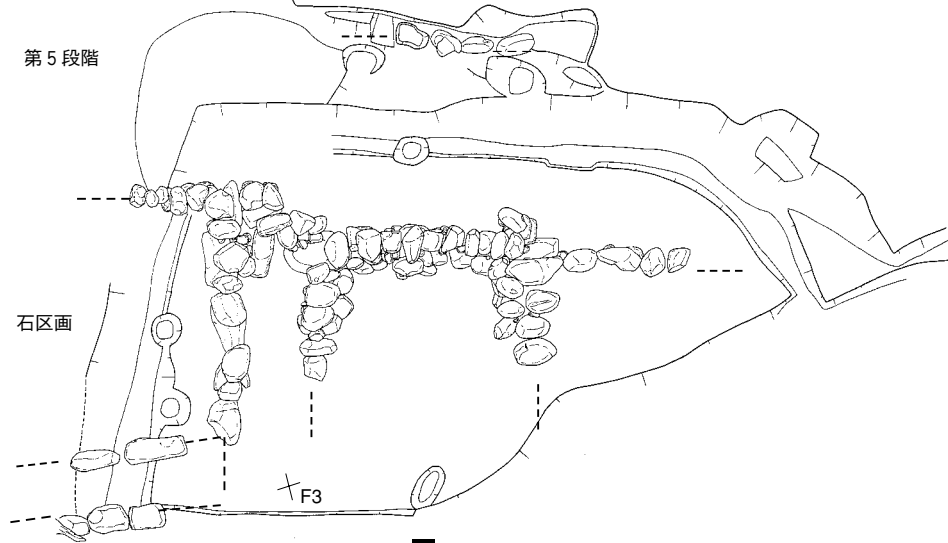
第44図 墓2-SK3002 土器・焼土・炭検出状況図(S=1/20)

配石



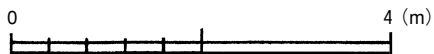
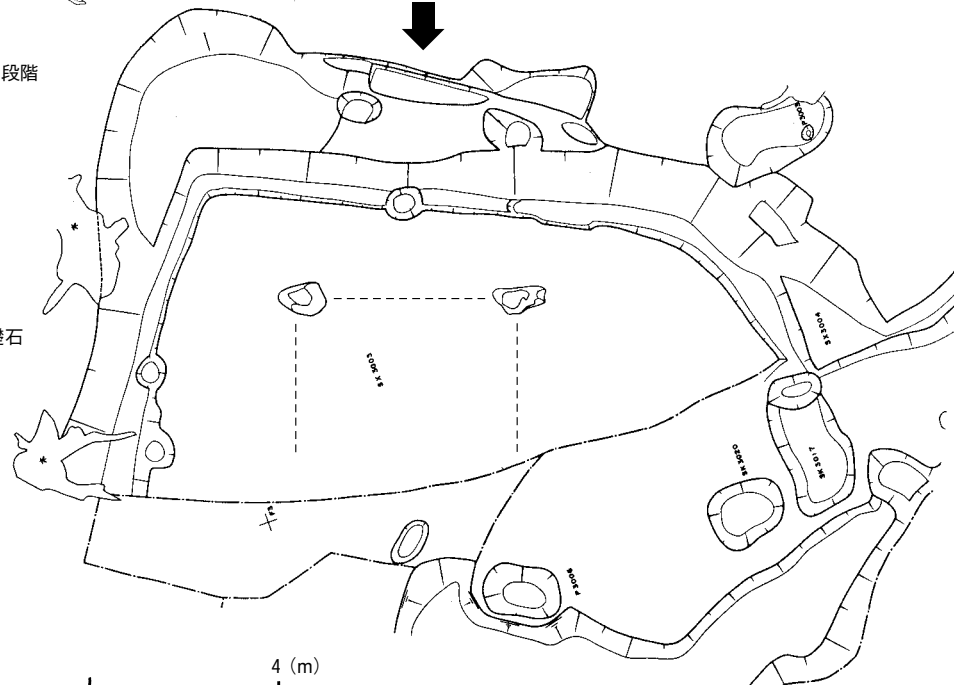
第5段階

石区画



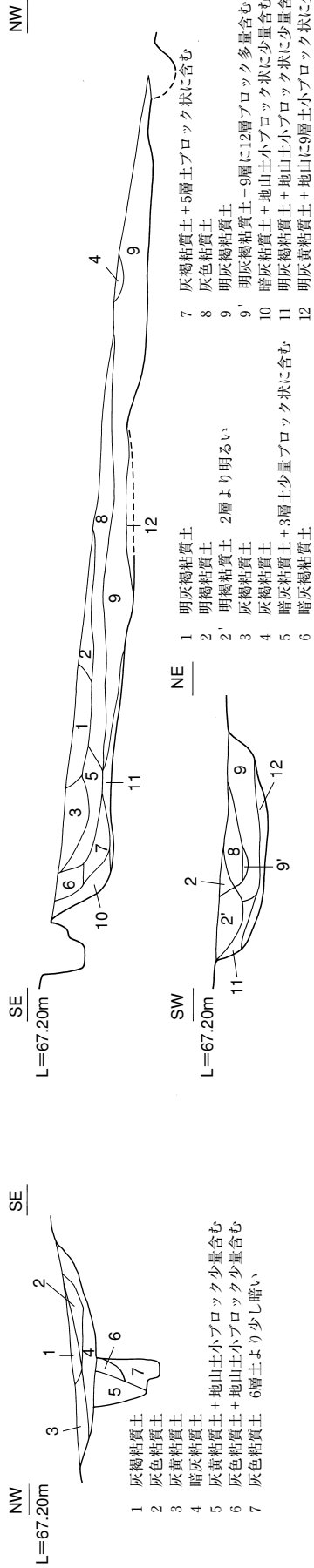
第6段階

礎石

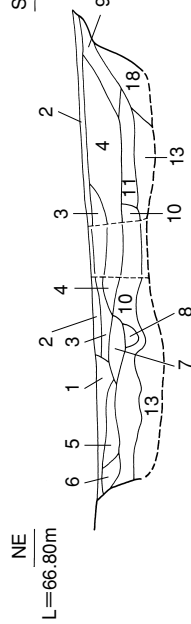


第45図 墓 9-SX3003 配石検出状況・変遷図 (S=1/80)

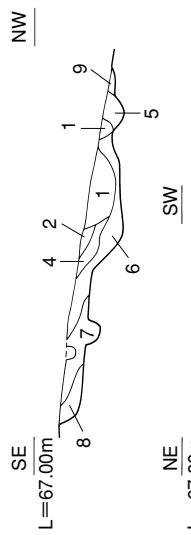
墓2 98 E-2区 SD3003・SD3005間アゼ



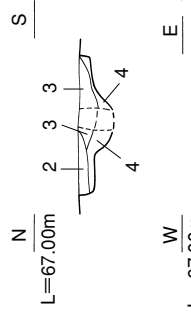
100 E-2区 SK3002



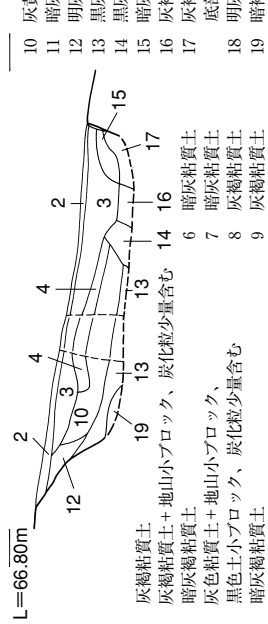
101 E-2・3区 SK3003



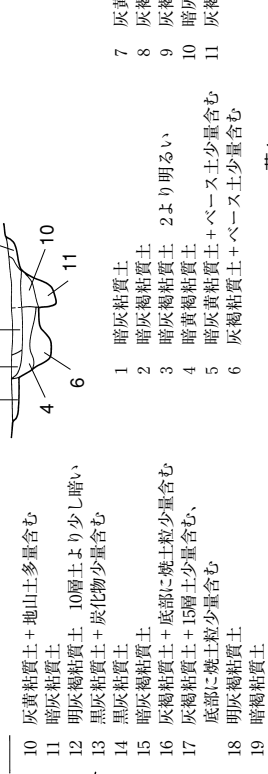
102 F-3区 SK3008



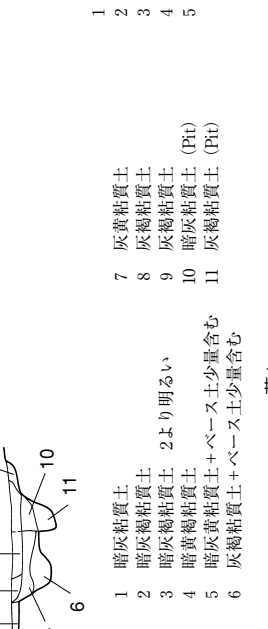
103 F-2区 SK3009



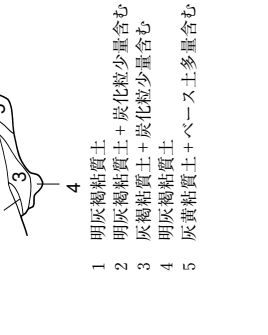
104 F-2区 SK3007



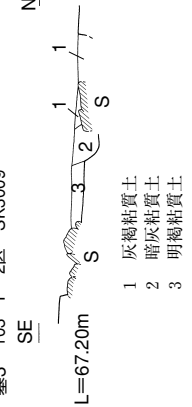
105 E-2区 SK3010



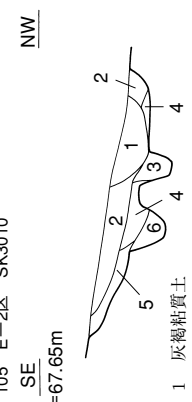
106 E-2区 P3061



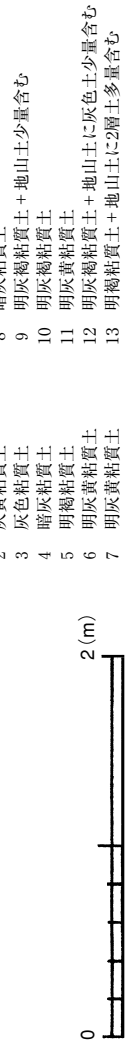
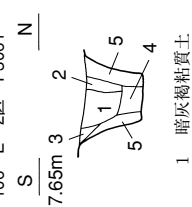
墓3 103 F-2区 SK3009



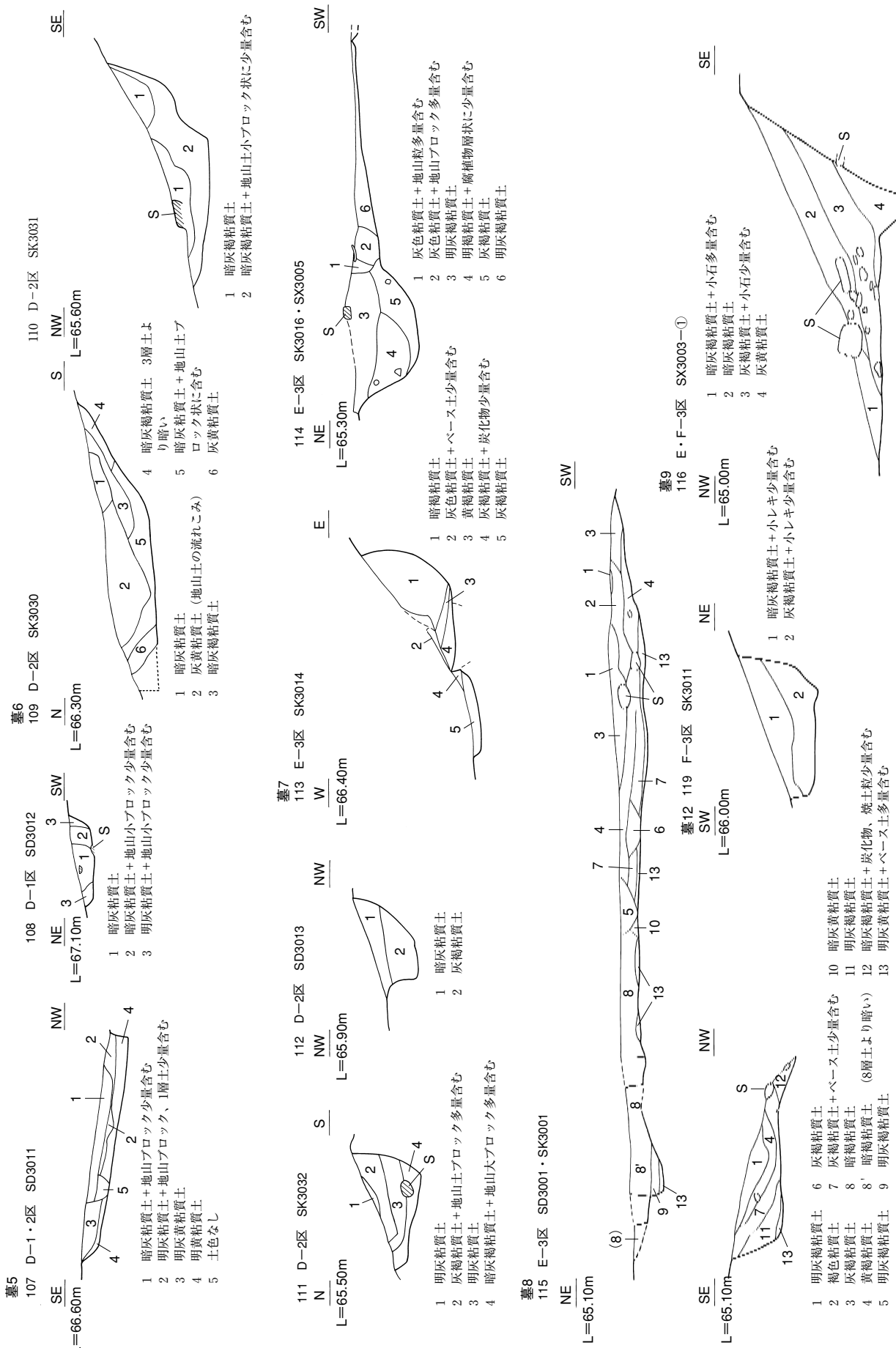
墓4



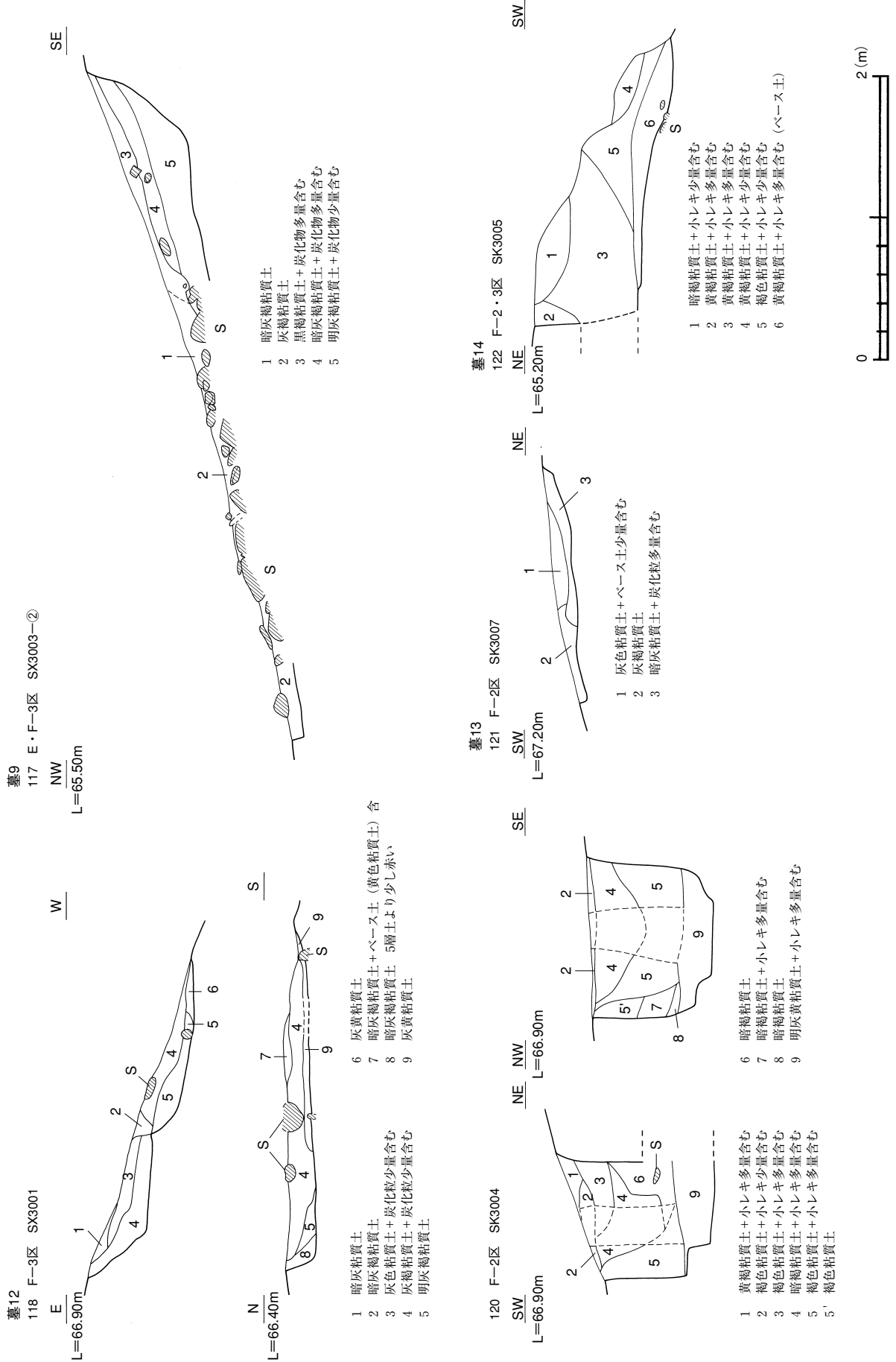
106 E-2区 P3061



第47図 平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(2) (S=1/40)



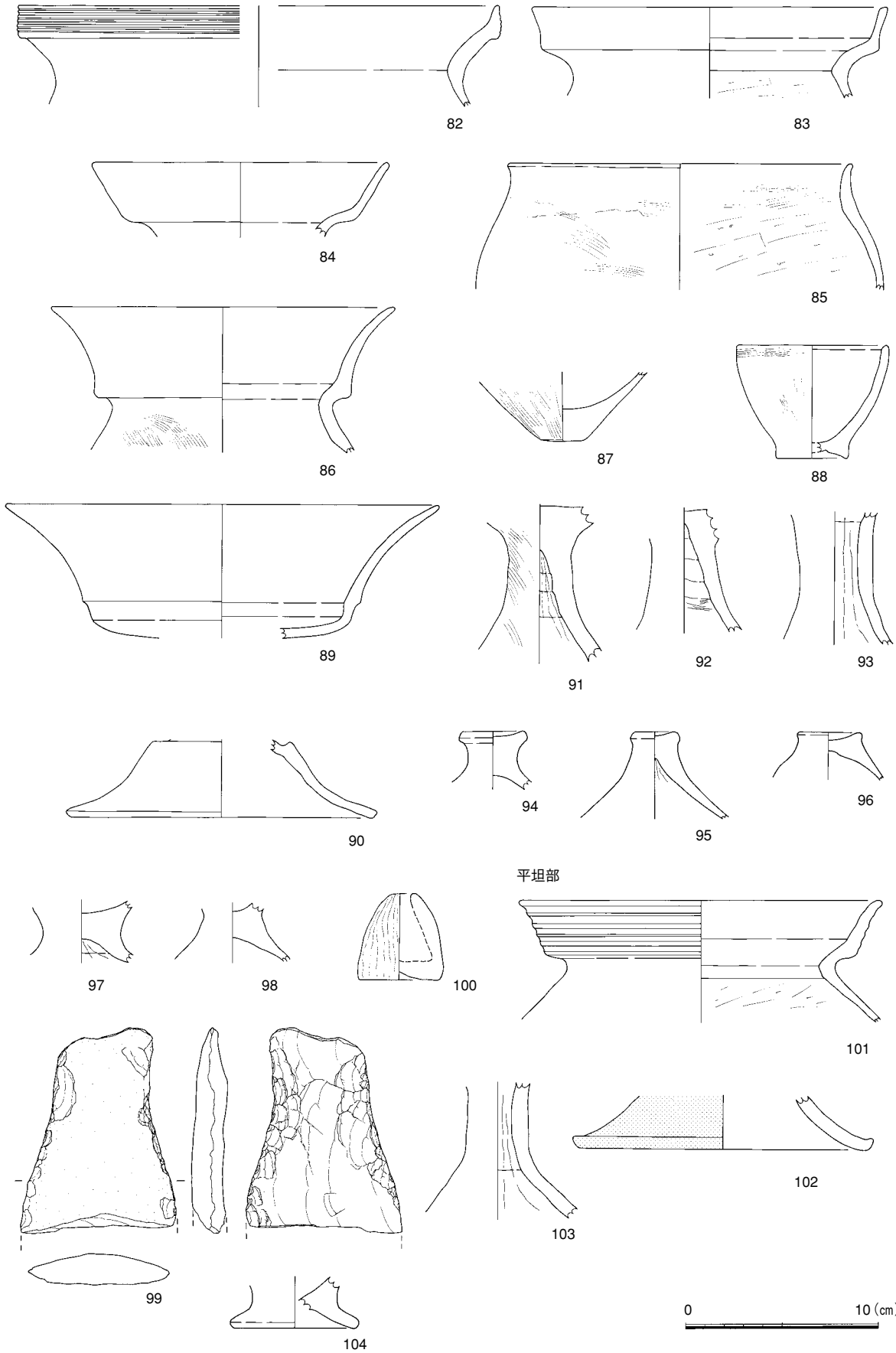
第48図 平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(3) (S=1/40)



第49図 平成12年度(第3次)調査区 土層断面図(4) (S=1/40)

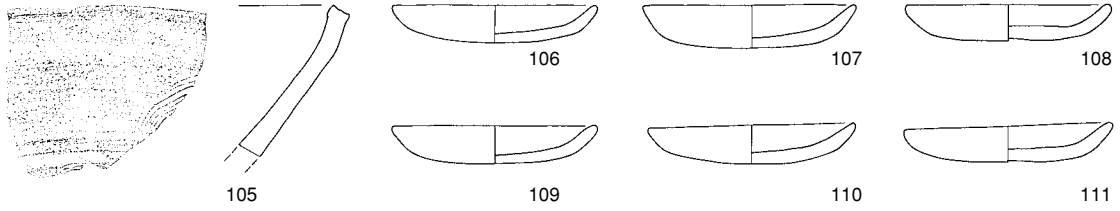
第2節 遺構と遺物

谷部

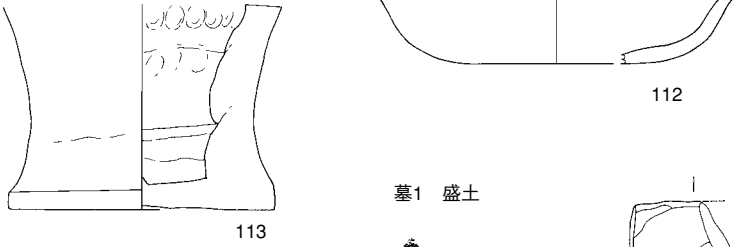


第50図 平成12年度(第3次)調査区出土遺物(1)(S=1/3)

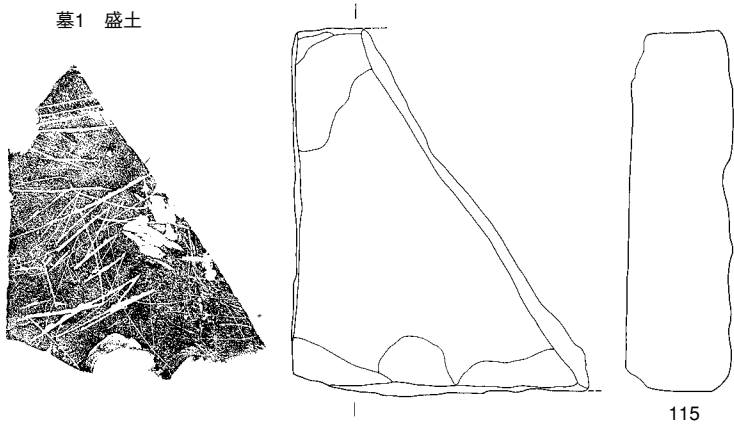
墓2 SK3002



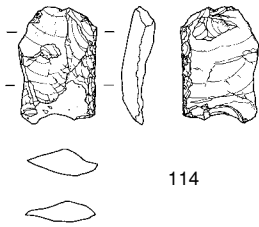
墓1 SK3029 (SX3003)



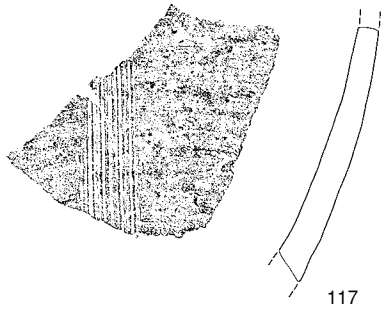
墓1 盛土



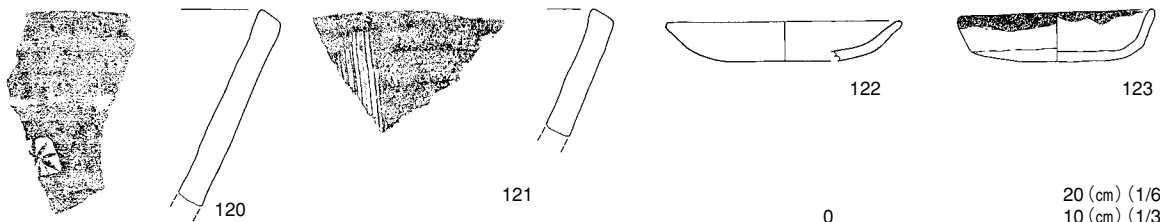
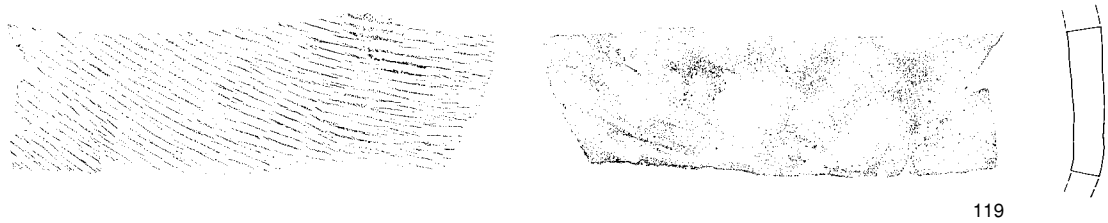
SD3010



墓3 SX3007

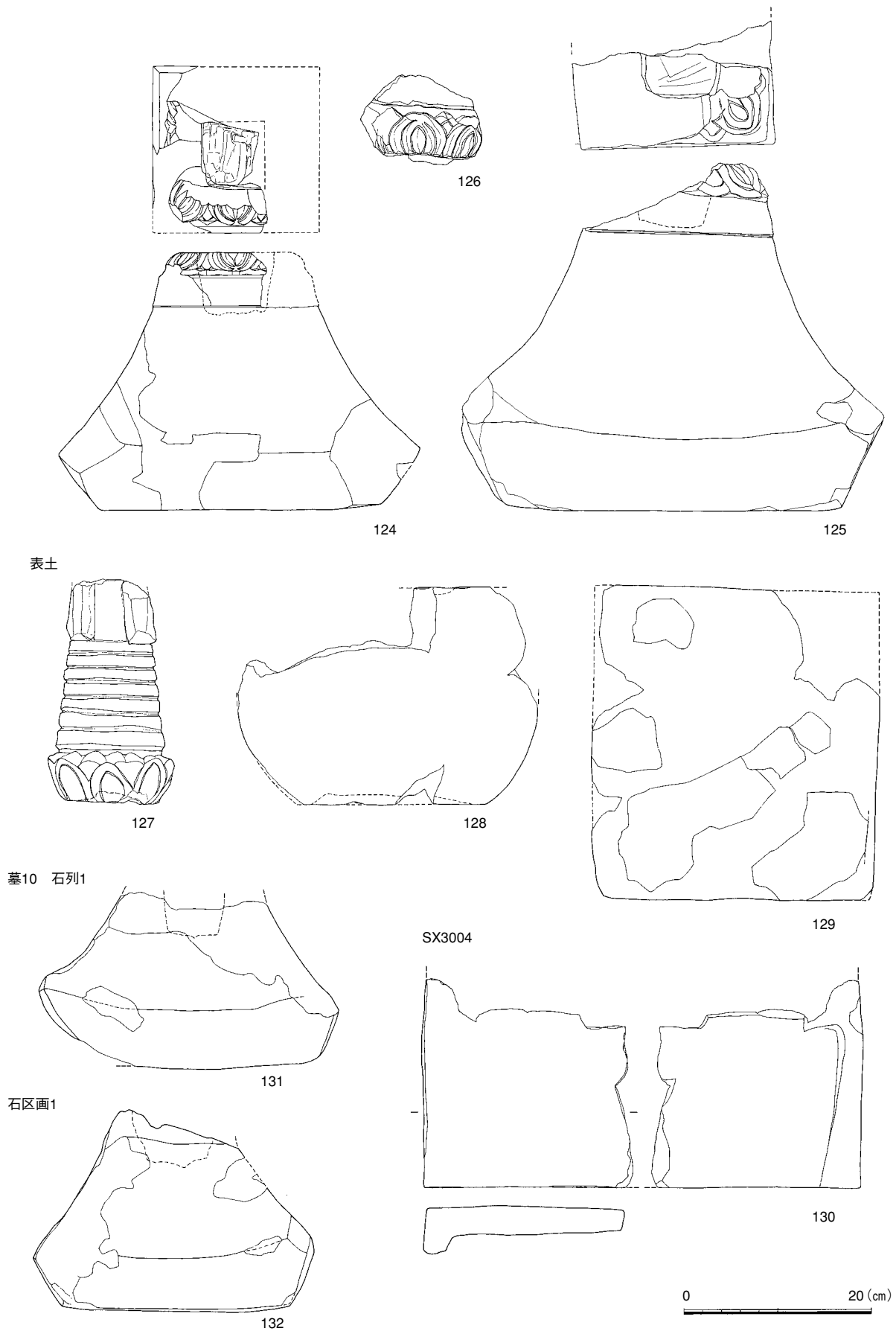


墓9 SX3003

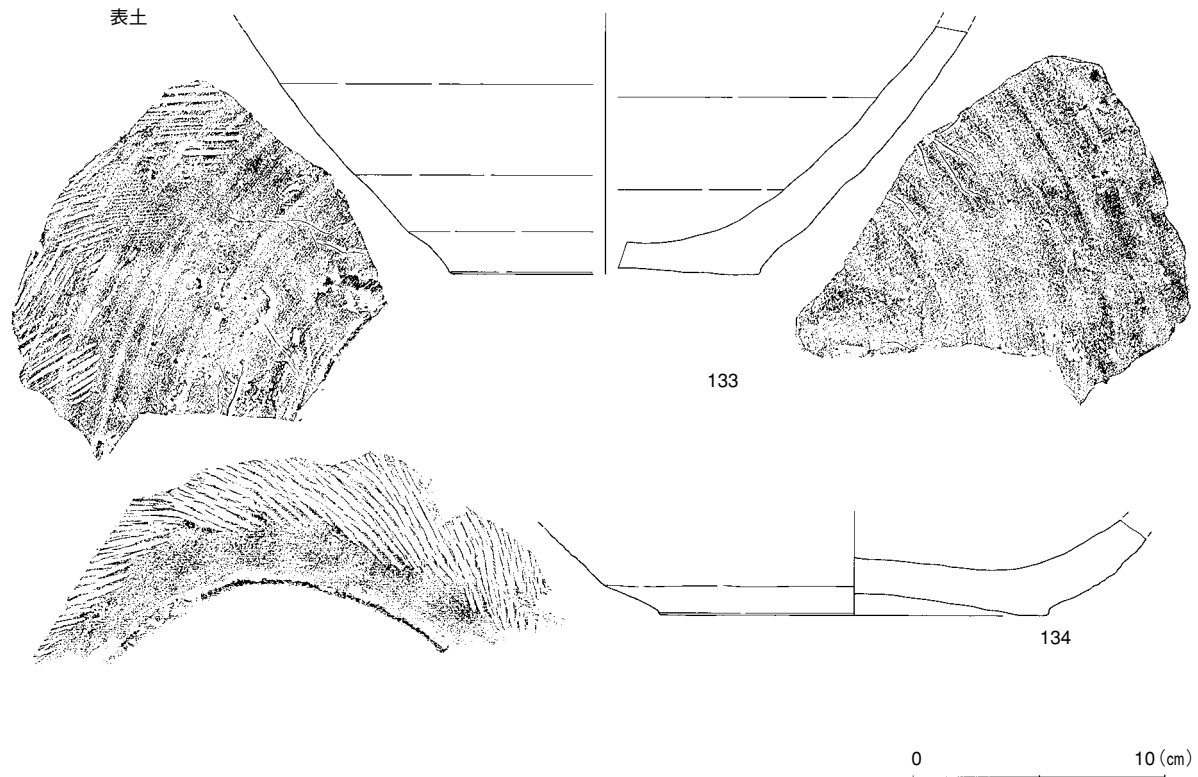


0 20 (cm) (1/6)
10 (cm) (1/3)

第51図 平成12年度(第3次)調査区出土遺物(2) 105~114・117~123(S=1/3)、115(S=1/6)



第52図 平成12年度(第3次)調査区出土遺物(3)(S=1/6)



第53図 平成12年度(第3次)調査区出土遺物(4)(S=1/3)

土器・陶磁器類

墓 No	図版 No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	特記事項	実測No
				口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面			
谷部	82	B-2 谷部 中央上層下	壺 口縁	(24.8)	-	(5.2)	1.0mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	不明	擬凹線	良		D-92
	83	B-2 谷部 北斜面	壺 口縁	(18.4)	-	(4.7)	1.5mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケズリ	不明	良		D-86
	84	B-3 谷部 中央上層 黒褐色土	壺 口縁	(15.2)	-	(3.9)	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-93
	85	B-3 谷部西端 中央上層	壺 口縁	(17.8)	-	6.5	0.5~1.0mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	ハケ・ケズリ	ハケ	良		D-71
	86	C-2 谷部 中央下層 黒褐色土	壺 口縁	(17.8)	-	(7.5)	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	良		D-77
	87	B-2 谷部 上層 暗褐色土	壺 底部	-	2.3	(3.5)	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄	淡黄	ケズリ	ハケ	良		D-89
	88	B-2 谷部北斜面 下層	小型鉢	(6.7)	(2.6)	5.85	1.0mm程度の砂粒少量含む	橙	にぶい橙	ナデ	ミガキ	良		D-73
	89	C-1 P3056・B・C-1 谷部東端 壁際アゼ 褐色土含	高杯 受部	(22.6)	-	(6.8)	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-105
	90	B-2 谷部 北斜面下層	高杯 脚部	-	(15.9)	(4.0)	1.5mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-72
	91	B-2 谷部 中央下層	高杯 脚部	-	-	-	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ハケ	良		D-75
	92	B-1 谷部 上層	高杯 脚部	-	-	(6.3)	1.0mm程度の砂粒多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ?	良		D-88
	93	B-2 谷部 上層 暗褐色土	高杯 脚部	-	-	(6.9)	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	不明	良		D-94
	94	B-2 谷部 北斜面	蓋	-	-	(3.05)	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-87
	95	B-2 谷部 中央上層	蓋	-	-	(4.5)	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-90
	96	B-2 谷部 中央上層	蓋	-	-	-	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-91

第5表 平成12年度(第3次)調査区出土遺物観察表(1)

第2節 遺構と遺物

墓No.	図版No.	区名 遺構・層位	器種 部位	法量 (cm)			胎土	色調		調整		焼成	特記事項	実測No.
				口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面			
谷部	97	C-3 谷部西端中央上層黒褐色土	蓋	-	-	(3.1)	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	ミガキ・ナデ	不明	良		D-78
	98	C-1 谷部南斜面下層	蓋	-	-	(3.0)	1.0mm程度の砂粒少量含む	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良		D-76
	100	B-2 谷部中央下層 黒褐色土	小型容器	-	4.4	4.45	0.2~0.5mm程度の砂粒多く含む	不明	にぶい橙	不明	ナデ	良		D-74
墓2	101	E-2 SK3002-d 上層排土	甕 口縁	18.5	-	(6.3)	1.0~1.5mm程度の砂粒多く含む	にぶい黄橙	浅黄橙	ケズリ	擬凹線・ヨコナデ	良		D-96
	102	E-2 SK3002-b	高杯 脚部	-	(15.6)	(2.8)	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不明	ミガキ	良	外面 赤彩	D-113
	103	F-2 平坦部南斜面 表土	高杯 脚部	-	-	(6.9)	1.0mm程度の砂粒多く含む	橙	橙	不明	不明	良		D-85
	104	D・E-3? 平坦部西斜面 表土	台付壺 底部	-	6.7	(2.65)	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ?	良		D-81
	105	E-2 SK3002-1	珠洲 搦鉢 口縁	-	-	(5.98)	礫、粗砂含む	灰	灰	ロクロナデ、おろし目	ロクロナデ	良		D-104
	106	E-2 SK3002-4	土師皿	8.2	6.8	1.55	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-102
	107	E-2 SK3002-5	土師皿	8.5	6.95	1.7	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-103
	108	E-2 SK3002-6	土師皿	8.2	6.6	1.4	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-97
	109	E-2 SK3002-7	土師皿	8.2	6.6	1.5	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-99
	110	E-2 SK3002-8	土師皿	8.3	6.9	1.65	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-100
	111	E-2 SK3002-9	土師皿	8.35	7.0	1.7	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-101
	112	E-2 SK3002-10	土師皿	(14.4)	(12.3)	3.2	1.0mm程度の砂粒少量含む	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	良		D-98
墓1	113	E-2 SK3029 (・F-3 SX3003他)	瀬戸 瓶子 底部	-	10.6	(8.1)	礫含む	灰	オリブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	良	施釉、14c前半	D-112
墓3	117	F-2 SX3007	珠洲 搦鉢 胴部	-	-	-	礫、粗砂含む	灰	灰	ロクロナデ、おろし目	ロクロナデ	良		D-106
墓9	118	F-3 SX3003	珠洲 甕 口縁	-	-	-	礫、粗砂含む	灰	灰	ロクロナデ	タタキ	良	13C後半	D-107
	119	F-3 SX3003・F-4 P3006	珠洲 甕 胴部	-	-	-	礫、粗砂含む	灰	灰	ロクロナデ	タタキ	良		D-95
	120	E・F-3 SX3003	珠洲 搦鉢 口縁	-	-	-	礫、粗砂含む	灰	暗灰・灰	ロクロナデ	ロクロナデ	良	印花文あり	D-111
	121	E・F-3 SX3003	珠洲 搦鉢 口縁	-	-	-	礫、粗砂含む	灰	灰	ロクロナデ、おろし目	ロクロナデ	良		D-110
	122	E・F-3 SX3003	土師皿	(9.4)	(6.45)	(1.56)	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・指頭圧痕あり	良		D-109
	123	E・F-3 SX3003	土師皿	7.6	6.8	2.1	1.0mm程度の砂粒少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	灯明皿、海綿骨針含む	D-108
墓10	133	E・F-3 平坦部南西斜面 表土	珠洲 甕 底部	-	(12.4)	(9.9)	礫、粗砂含む	灰	灰	ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・タタキ・ハケ	良		D-80
134	E-4 表土	珠洲 甕 底部	-	15.5	(3.8)	礫、粗砂含む	灰	灰	不明	不明	良		D-79	

石製品

墓No.	図版No.	区名 遺構・層位	器種 部位	法量				石材	特記事項	実測No.
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (kg)			
墓1	99	B-2 谷区 中央下層	打製石斧	(10.3)	8.1	1.8	0.1537			石-2
	114	E-2 SD3010 (P3041南付近)	二次加工剥片	465	3.15	1.05	0.0157	黒曜石	最大厚125 (cm)	石-4
墓3	115	E-2 墓1 盛土上層 濁黄	砥石 (転用)	29.2	23.6	8.5	465	凝灰岩	元は、宝塔 基礎or五輪塔 地輪	特-2
	124	F-3 SX3003 石組東側	宝塔 笠	27.3	38.6	-	28.45	凝灰岩	掘り込み 約6.5 (cm)	特-6
	125	F-3 SX3003 石組東側	宝塔 笠	(36.9)	(44.8)	(26.2)	28.45	凝灰岩		特-3
	126	F-3 SX3003 石組東側	宝塔 相輪	(9.5)	(12.95)	(8.1)	0.75	凝灰岩		特-10
	127	表土中 (表採)	宝塔 相輪	(23.8)	13.5	13.3	3.25	凝灰岩		特-4
	128	F-3 SX3003 石組東側	宝塔 塔身	23.05	31.9	-	10.8	凝灰岩	or五輪塔 水輪	特-8
	129	F-3 SX3003 石組東側	宝塔 基礎	33.4	30.75	29.65	24.25	凝灰岩	or五輪塔 地輪	特-7
		F-3 SX3003 石組東側	宝塔 破片	-	-	-	21.4	凝灰岩	接合不可の破片	-
130	F-3 SX3004 東オチギワ	宝塔 基礎	22.2	22.2	4.88	1.2	凝灰岩	or五輪塔 地輪	特-9	
墓10	131	F-4 石列1	五輪塔 火輪	18.8	32.0	-	11.7	凝灰岩		特-1
132	E-4 石区画1北側 表採	五輪塔 火輪	21.3	29.9	-	14.6	凝灰岩		特-5	
墓14	135	F-3 SK3005上部・壺枠1	蔵骨器 石製枠組	31.7	-	-	2.05	凝灰石	残存高10.4 (cm)	石-5

ガラス製品

墓No.	図版No.	区名 遺構・層位	器種 部位	法量				材質	特記事項	実測No.
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)			
墓3	116	F-2 SX3006	ガラス小玉	0.35	0.15	0.28	0.03	ガラス	青色	-

第6表 平成12年度(第3次)調査区出土遺物観察表(2)

第5章 まとめ

第1節 弥生時代～古墳時代の建物と集落

今回調査を行なった調査区は南東側から北西側にかけて、高低差が最大約4mになる緩傾斜地に立地しており、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落が調査区全域に形成されている。

平成10年度（第2次）の調査成果としては、SI2001やSI2002等壁の立ち上がりを残した竪穴系建物の検出により、平成7年度（第1次）調査において外周溝や主柱等の配置から想定されていた建物の規模や構造を確認する具体的材料を得られたこと。また、SI2005における古墳時代初頭頃の土器を伴う周溝状遺構の検出により集落の存続時期幅が広がることが明らかになったことである。

竪穴系建物は、外周溝が伴うものが主体的で、調査区全域にて確認された。調査区北東部に位置するSI2001が、北東部分は調査区外のため全掘できなかったが、他の遺構に比べ後世の削平の度合いが低かったことなどから、壁の立ち上がりが確認されている。外周溝SI2001-Dを伴うこの建物は、平面プランは隅丸方形のプランで4本主柱と想定でき、柱穴を若干ずらし建て替えも行われている。

また調査区の北西部の一角には3棟の竪穴系建物が重なっており、弥生時代終末頃の土器が出土している。切合い関係から西側から東側へSI2002→SI2003→SI2004と変遷している。各建物の構造をみると、西側の建物SI2002はSD2013を外周溝として伴い、壁周溝SI2001-Dの形状より隅丸方形のプランで4本主柱と想定される。壁の立ち上がりも確認された。中央に位置する建物SI2003は外周溝がSD2009（2012）、壁周溝がSD2014と考えられ、壁周溝の形状から円形か五角形のプランで5本主柱の可能性がある。東側の建物SI2004は、外周溝がSD2016、壁周溝がSD2017（2024）と考えられる。外周溝は円形、壁周溝は方形のプランで4本主柱と想定される。

他に、調査区中央付近において検出されたSI2005に伴う3重に回る周溝状遺構SD2001・SD2003・SD2004・SD2007・SD2008・SD2018・SD2019・SD2020・SK2010などから古墳時代初頭の土器が出土している。周溝状遺構は竪穴式建物の壁周溝と考えているが、上部削平が著しく今後の再検討を残している。建物の切合い関係からSI2001→SI2005、SI2004→SI2005と変遷する。

竪穴系建物の変遷と出土遺物の検討は、今後に再検討の課題を残すが、前報告に加え集落の存続時期が広がり、建物の構造も明らかになったことは、今回の最大の成果である。

第2節 中世～近世にかけての墓地

今回調査を行なった調査区は北側から南側にかけて、高低差が最大約6mにもなる傾斜地に立地しており、その地形を利用して中世～近世の墓地が形成されている。

平成12年度（第3次）の調査により、平坦部平坦面から火葬土坑や方形の溝で区画された中世の区画墓や西側から南側にかけての斜面上部からも火葬遺構や配石墓等の遺構が多数確認されており、石造物や蔵骨器と思われる珠洲焼片、陶磁器片、人骨片等の遺物が出土している。

墓1は当初、3方を方形の区画溝で囲まれた中央に火葬土坑墓SK3022が位置していた。その後、新たに4方に回る方形の溝が掘られ、区画中央に掘られた小土坑に古瀬戸の瓶子（No.113）が蔵骨器として埋葬されていた。（第46図）火葬土坑を中心として方形の溝で囲まれた区画墓は、他遺跡でもみつかっており、額谷遺跡の区画墓も同様に、墳墓に石造物が置かれていたものだったと考えている。

墓2は2方を方形の区画溝で囲まれた区画墓で、区画中央に位置する方形の火葬土坑墓SK3002は、壁面が焼け、底には炭が堆積しており、その上に珠洲焼の播鉢片（No.105）や完形の土師器皿（No.106～112）が7枚程入れられていた。（第44図）土坑内部からは、蔵骨器や骨片は確認されていない。

墓9のSX3003は平坦部南西斜面上段に位置し、斜面を造成し多量の拳大～人頭大の礫を用いた配石墓である。配石墓内部には人頭大の礫を並べた区画列が見られ、複数の墓が同時に存在しており、礫の間から珠洲焼の甕や播鉢（No.118～121）、土師器皿（No.122・123）等が出土している。また、墓1と墓9では古瀬戸の瓶子（No.113）や未実測の加賀焼の鉢片等同一固体の破片が出土していることから、墓9の配石墓は、墓1が削平された時期以降に造られた可能性が高い。

配石墓の下部からは、自然石を方形に積み上げた基壇の基礎が確認され、基壇石組東側には宝塔（No.124～129）が粉々になった状態で検出された。組合せは不明であるが、基壇上部に宝塔を置き、珠洲焼の蔵骨器を埋納していた単独の墓であったと考えられる。この宝塔は、意図的に配石東側にまとめられていたことから、何らかの宗教的あるいは政治的要因により壊されたものと考えられる。

また、当初は斜面を大規模に造成して山側に排水溝を巡らせた平坦面を作り、4個の大石を礎石とした墓に伴う建物が建てられていた可能性も考えられる。（第45図、写真図版11・12）

前報告では、近世末期～近代の火葬場遺構が検出されていたが、これにより、当地では中世以降、現代までの間、墓域として利用されてきたことがわかった。今回の調査で見つかった火葬土坑や墓はどれも上部が削平されており、完全に構造がわかったものはないが、出土遺物の時期と重なる遺跡北方に位置する額谷カネカヤブ遺跡の火葬土坑や御廟谷墳墓群など、遺跡周辺には中世の墓域が展開しており、さらに北側に所在する高尾城跡や富樫氏との関連も含めて、今後さらに遺跡の位置づけをして行く必要があると考えている。

第3節 既往の調査から（第54～56図、第7表、図版22～24）

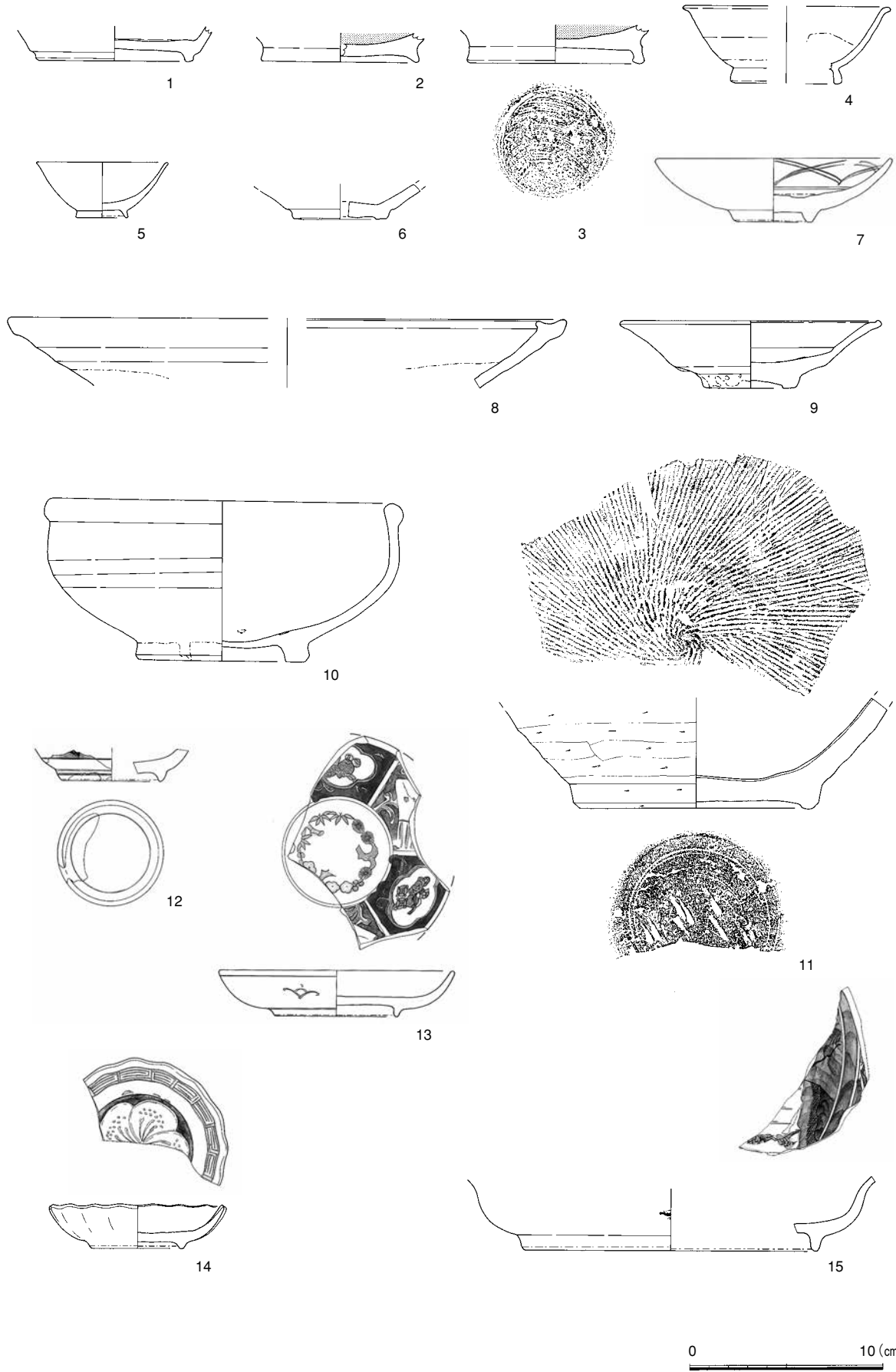
高尾城跡出土遺物 額谷遺跡北東側の丘陵上に位置する高尾城跡からは、今回検出された中世～近世の陶磁器類・五輪塔等の遺物が多数出土しており、額谷遺跡との比較のため一部を紹介したい。

高尾城跡は、金沢市高尾町の背後の丘陵に位置する富樫氏の山城で、標高170mの高尾山をはじめとする標高100～200mの山々からなり、中谷川と七瀬川に挟まれた南北1,500m、東西1,500mの広大な地域に存在する。長享二（1488）年に守護の富樫正親が一向一揆を中心とする勢力に破れ自刃した城として知られているが、富樫氏の平時の館は野々市町にあり、高尾城は戦時の拠点となる城砦である。築城については明確ではないが、14世紀前半頃ではないかと考えられている。

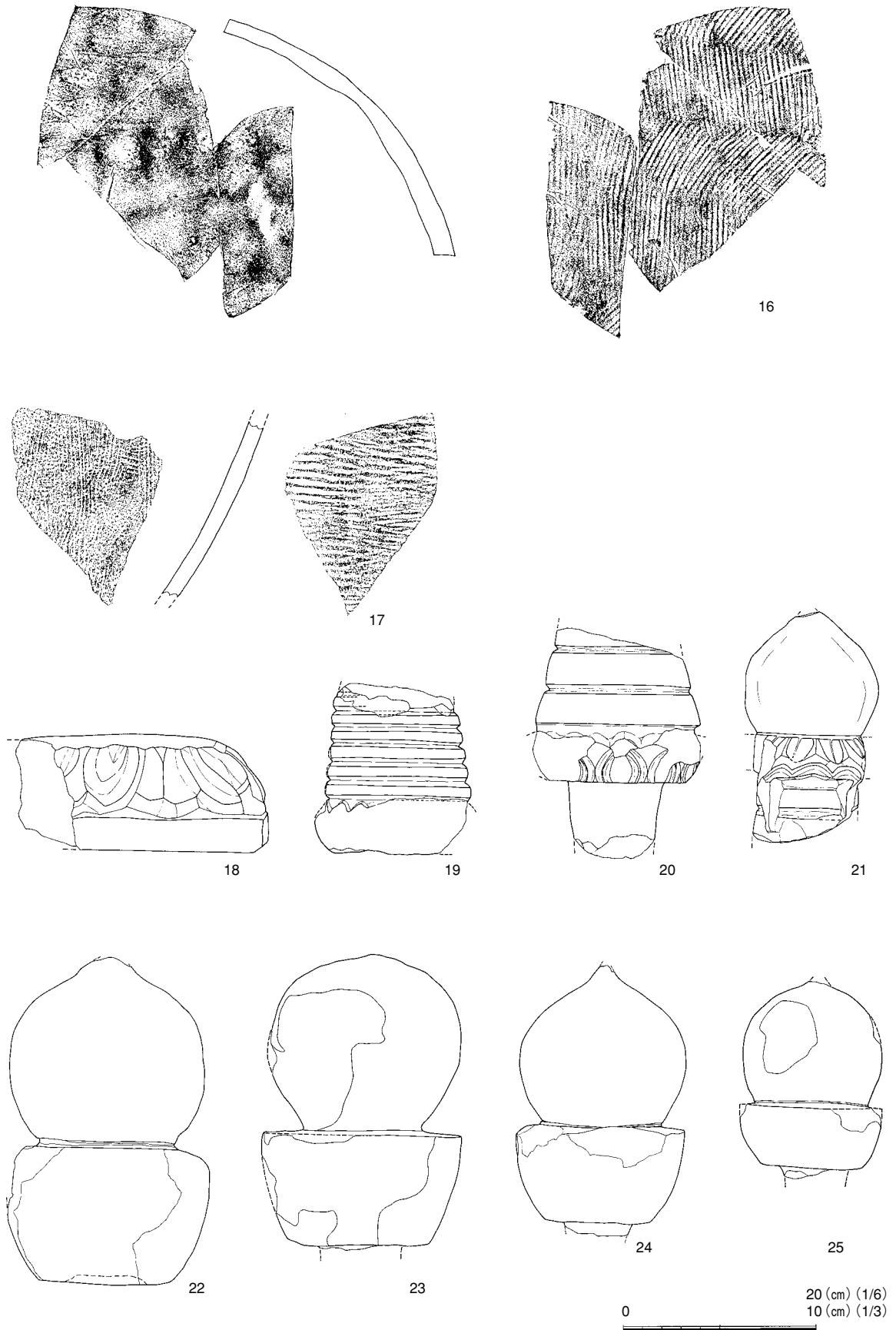
昭和45（1970）年、北陸自動車道建設のための土取りにより破壊され、昭和45・46年に石川県教育委員会により緊急発掘調査が実施されたが、ジョウヤマ地区の遺構の大半は残っていない。この時に調査されたジョウヤマ、フッコジ、館、広貞、城の上の五地点から、越前焼・珠洲焼・貿易陶磁・五輪塔等の石塔類とともに、弥生土器・土師器・須恵器等の遺物も出土している。

今回はこの時の遺物を紹介するが、遺物の記名が記号であるため出土地点を特定することが難しいが、14・15世紀頃の遺物が多く出土していることは、高尾城存続時期と重なる部分大きい。

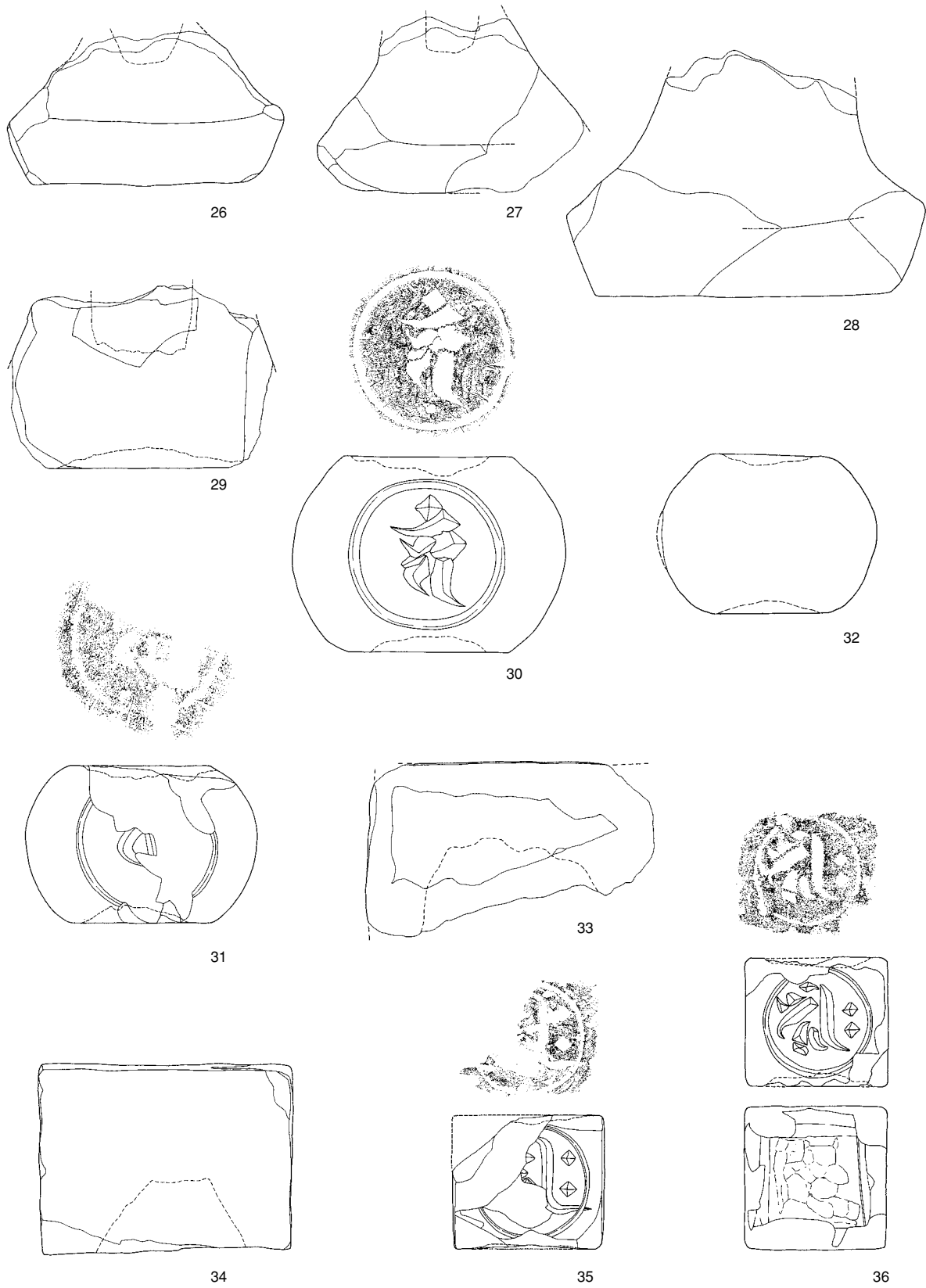
また、弥生時代以降この地が利用されてきていることは額谷遺跡の状況とも一致する。額谷遺跡との関連性の検討は今後の課題としたいが、弥生時代以降ある程度の一体性を持ちながら遺跡群が展開してきていると考えている。



第54図 高尾城跡出土遺物(1) (S= 1/3)



第55図 高尾城跡出土遺物(2) 16・17(S=1/3)、18~25(S=1/6)



第56図 高尾城跡出土遺物(3) (S=1/6)

第3節 既往の調査から

土器・陶磁器類

図版No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量 (cm)			胎土	色調		調整		焼成	特記事項	実測No
			口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面			
1	TO・O・E1	須恵器 有台坏	-	(8.2)	(1.8)	細砂多く含む	灰白	灰白	ロクロ ナデ	特記事項 参照	良	調整：外面 ロクロナデ・押さえナ デ・回転ヘラ切り・貼り付け高台	D-129
2	TO・TE1	土師器 内 黒碗 底部	-	(8.1)	(1.25)	細砂。緻密。礫をわずか に含む。赤色粒多く含む	暗灰	橙	ミガキ	ヨコナデ	良		D-123
3	TO・O・D1	土師器 内 黒碗 底部	-	9.2	(1.7)	細砂、海綿骨針、赤 色粒含む	灰	灰白～ 灰黄	不明	特記事項 参照	良	調整：外面 ヨコナデ・底部糸切り・ 高台ハリツケ後押さえてナデ	D-125
4	D-1 黒褐色土	灰釉陶器 碗	(10.4)	(5.8)	(4.0)	白い1mm未満の細砂 を少し含む	灰白	灰白	回転 ナデ	回転ナデ	良		D-126
5	TO・O・F2	白磁 小碗	6.8	2.6	2.4	素地：白くて堅緻					良	釉：透明。ピンホール少しあり。	D-119
6	TO・S・A4	瀬戸 灰釉 平碗	-	4.8	(1.85)	素地：色浅黄、小さ な気泡少、緻密				回転クロ ケズリ	良	釉：色・オリーブ黄、透明感あり、 貫入、こまかい 削り出し高台	D-128
7	TO・O・E5	肥前蛇の目 釉剥ぎ 染付小皿	12.0	3.9	-	素地：白くて堅緻					良	釉：透明。少し厚めにかかった腰 部と高台内にひび割れや貫入あり。 染付部はオリーブ灰色。内面底部 は蛇の目に釉をはいてある。	D-117
8	TO・O・F2	瀬戸 灰釉 盤	(28.8)	-	-	素地：淡黄色。堅緻。 褐色の粒が混入して いる					良	釉：灰釉。口縁の内外に釉がかかっ ており蓋の受部や、釉の下方に灰 オリーブ色のたまりができている が、それ以外は白く光沢のない状 態でカサカサしている。	D-114
9	TO・O・F2	砂目唐津 小皿	(13.2)	高台径 4.8	-	素地：にぶい橙と灰 白色で堅緻。					良	釉：灰釉・灰白～明オリーブ灰	D-116
10	TO・O・F1	磁器 灰釉鉢	18.6	9.0	8.4	素地：灰色がかって おり堅緻					良	釉：灰釉・浅黄	D-115
11	TO・O・G4	須佐 播鉢 (越前?)	-	12.2	(5.7)	素地：色調にぶい黄橙 0.5mm程の気泡並、1mm 以下の粗砂多く含む			おろし 目	回転クロ ケズリ	良	釉：色調暗赤褐、透明感なし、 削り出し高台	D-127
12	TO・O・G4	染付 碗	-	(5.1)	-	素地：白くて堅緻					良	釉：透明 (少し青味を帯びている) 染付の色は藍色。	D-120
13	TO・O・F1	染付 皿	(12.0)	6.6	-	素地：白くて堅緻					良	釉薬：透明。染付に藍色、赤、金、 ピンク?、黄?を使用。	D-121
14	TO・O・F2	染付 小皿	(9.0)	(4.5)	-	素地：白くて堅緻。 口縁の内面と中央部 に彫って紋様を施し てある					良	釉：透明。内面中央部の花卉周囲 に円形に藍色の染付。	D-118
15	TO・O・F2	染付 皿	-	(15.1)	-	素地：白くて堅緻					良	釉薬：透明。青味がかかっている。 染付は藍色。	D-122
16	D-1 黒色土	珠洲 甕	-	-	(10.0)		灰	灰	ロクロ ナデ	タタキ	良		D-124
17	TO・T・D1 黒色腐食土	須恵器 甕	-	-	-	1mm以下の細砂多く、 黒い粒もまた多い	灰白	灰白	ハケ	タタキ	良		D-38

石塔類

図版No	区名 遺構・層位	器種 部位	法量				石材	特記事項	実測No
			長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (kg)			
18		宝塔 (基壇)	1225	(262)	-	545	凝灰岩		特-11
19		宝塔 (相輪)	(175)	(161)	-	41	凝灰岩		特-26
20	T・A	宝塔 (相輪)	236	173	-	58	凝灰岩		特-23
21	T・A	宝塔 (宝珠～相輪)	(23.75)	(13.75)	-	4.15	凝灰岩		特-12
22	不明	五輪塔 (空風輪)	(33.7)	(20.8)	(20.7)	148	凝灰岩		特-18
23	T・B	五輪塔 (空風輪)	30.5	20.0	-	9.35	凝灰岩		特-20
24	不明	五輪塔 (空風輪)	(27.8)	(17.3)	(17.1)	7.05	凝灰岩		特-16
25	T・B	五輪塔 (空風輪)	(20.3)	14.6	-	3.55	凝灰岩		特-27
26	不明	五輪塔 (火輪)	(15.7)	28.1	-	15.15	凝灰岩		特-13
27	不明	五輪塔 (火輪)	17.8	27.1	-	11.65	凝灰岩		特-15
28	不明	五輪塔 (火輪)	(25.0)	36.5	-	12.9	凝灰岩		特-28
29	不明	五輪塔 (火輪)	(26.6)	(10.0)	(18.5)	12.2	凝灰岩		特-24
30	不明	五輪塔 (水輪) or 宝塔 (塔身)	21.3	27.7	-	16.2	凝灰岩		特-17
31	不明	五輪塔 (水輪) or 宝塔 (塔身)	15.9	14.1	-	9.1	凝灰岩		特-25
32	不明	五輪塔 (水輪) or 宝塔 (塔身)	16.25	22.3	-	7.15	凝灰岩		特-29
33	不明	五輪塔 (地輪) or 宝塔 (基礎)	(17.4)	(29.5)	-	10.85	凝灰岩	(黄色)	特-21
34	不明	五輪塔 (地輪) or 宝塔 (基礎)	19.4	25.9	-	20.15	凝灰岩		特-19
35	T・C	五輪塔 (地輪) or 宝塔 (基礎)	約136	15.4	-	4.25	凝灰岩		特-22
36	T・B	五輪塔 (地輪) or 宝塔 (基礎)	13.1	14.6	14.6	3.7	凝灰岩		特-14

第7表 高尾城跡出土遺物観察表



SI2001完掘状況①(南東から)



SI2001完掘状況②(南から)



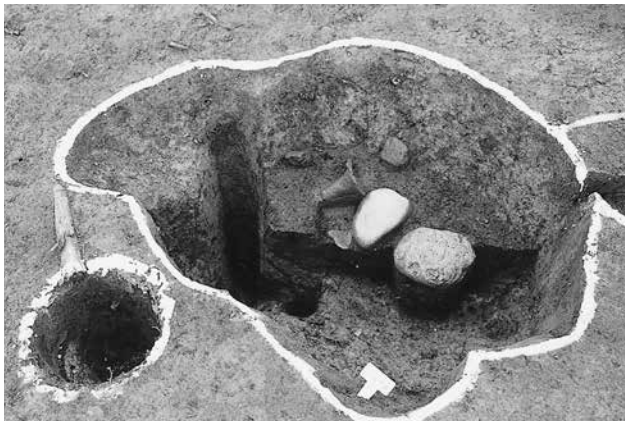
SI2001壁周構内完掘状況(東から)



SI2001-P1(柱穴)完掘状況(北東から)



SI2001-P2・P6・P7(柱穴)完掘状況(東から)



SI2001-P3 (炉?) 遺物出土状況(西から)



SI2001-D (外周溝) 土層断面①(東から)



SI2001-D (外周溝) 土層断面②(西から)



SI2001-D (外周溝) 土層断面③(南東から)



SI2002完掘状況(南西から)



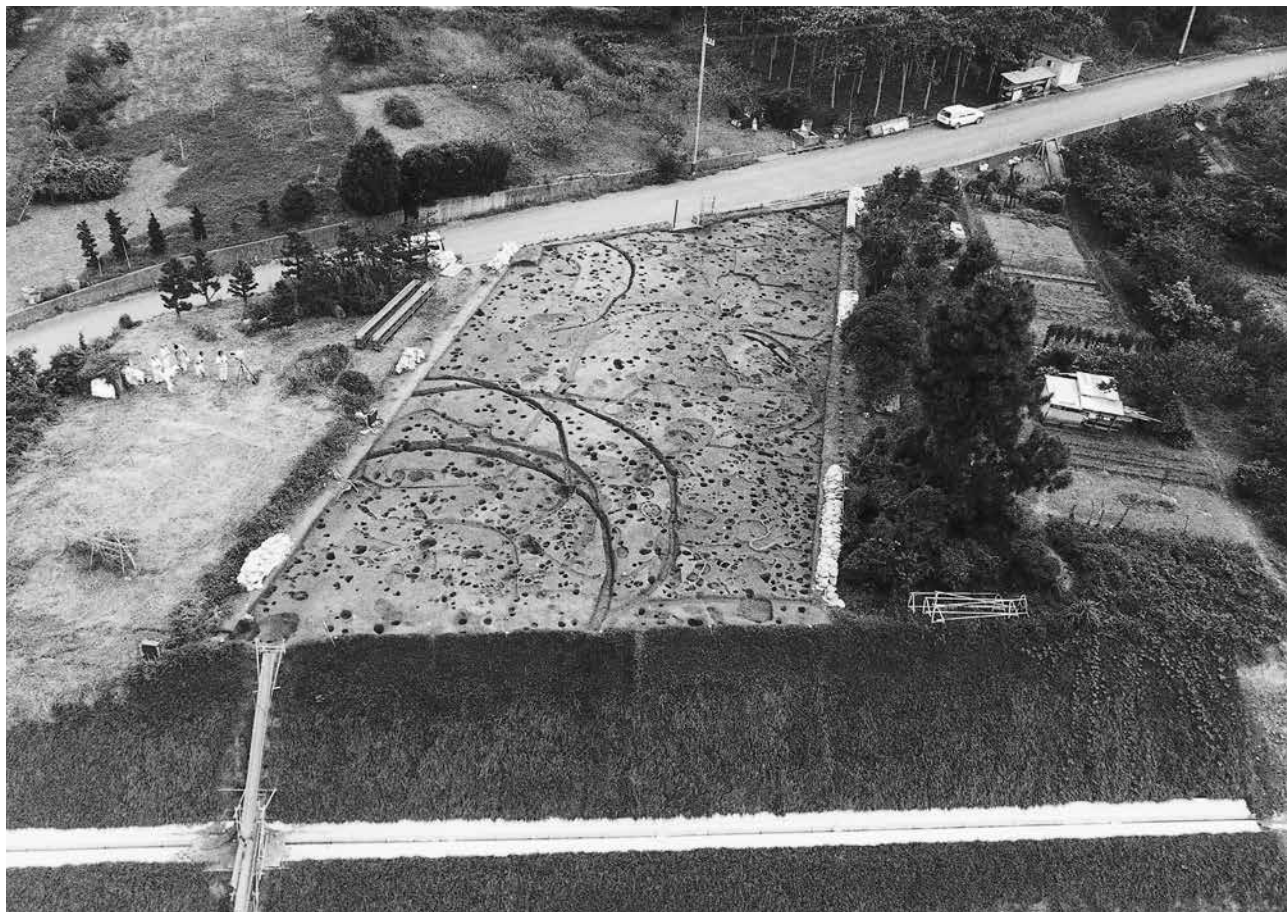
SI2002完掘状況(南から)



SI2002壁周構内完掘状況(南西から)



SI2002-SD2013 (外周溝) 土層断面(北から)



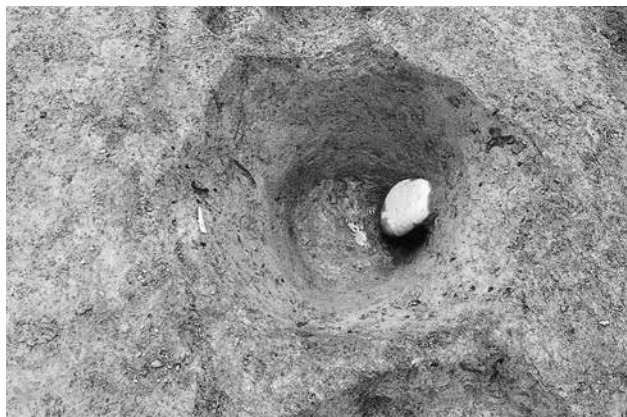
平成10年度(第2次)調査区全景(北西上から)



SI2003完掘状況(南西から)



SI2003-P2315(柱穴)完掘状況(北東から)



SI2003-P2329(柱穴)完掘状況(北東から)



SI2003-SK2006(柱穴)完掘状況(南から)



SI2003-SD2009 (2012) (外周溝) 遺物出土状況 (南東から)



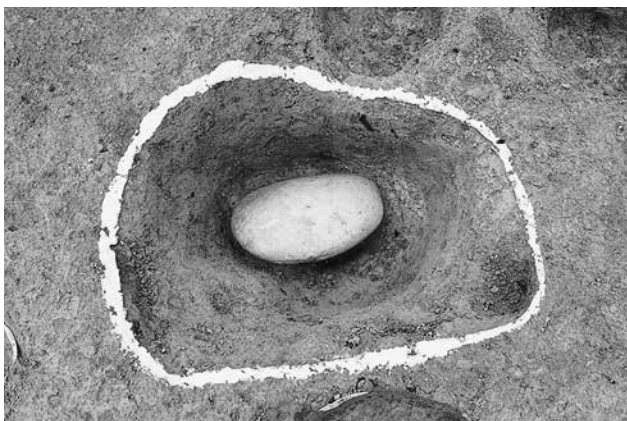
SI2003-SD2012,SI2004-SD2016切合い土層断面 (北東から)



SI2004完掘状況 (南西から)



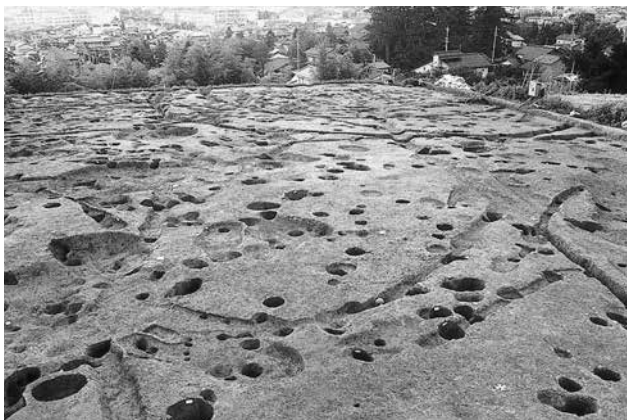
SI2004-P2335 (P2145) (柱穴) 遺物出土状況 (南西から)



SI2004-P2450 (柱穴) 完掘状況 (北東から)



SI2004-SD2016 (外周溝) 完掘状況 (東から)



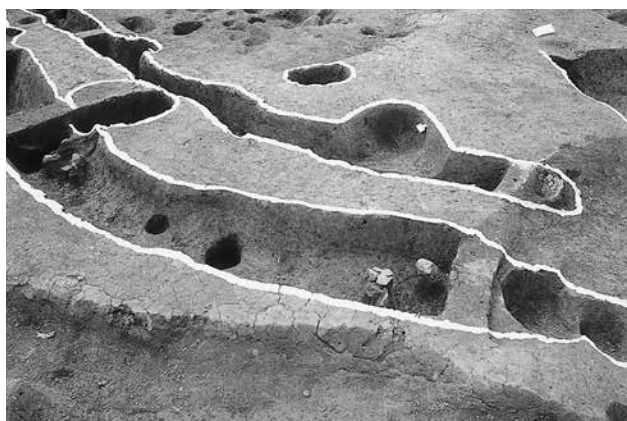
SI2005完掘状況 (南東から)



SI2005-SK2010 (周溝) 遺物出土状況 (東から)



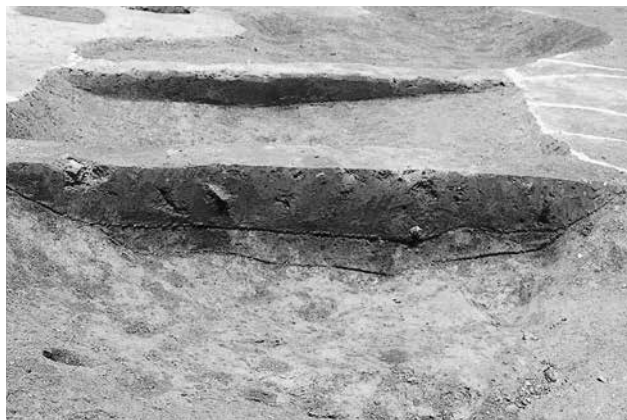
SI2005完掘状況(南東から)



SI2005—SD2003,SD2004(周溝)遺物出土状況(南東から)



SI2005—SD2001(周溝)遺物出土状況①(南東から)



SI2005—SD2001(周溝)土層断面(南東から)



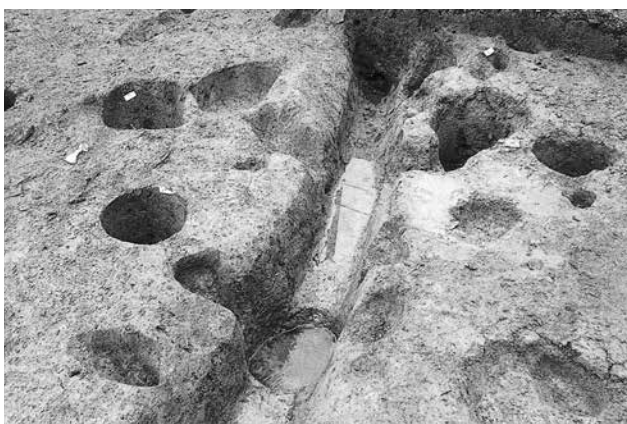
SI2005—SD2001(周溝)遺物出土状況②(西から)



SB2001 (布掘建物) 北側周辺完掘状況(南から)



SB2001 (布掘建物) 完掘状況(西から)



SB2001-D (SD) 完掘状況(西から)



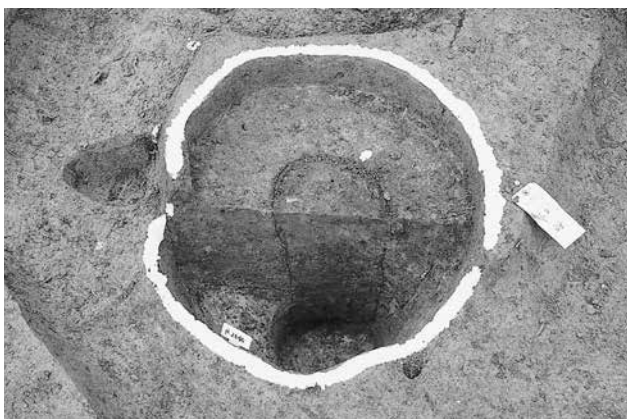
SB2001-D (SD) 土層断面(西から)



SB2001-SK2008 (柱穴) 土層断面・遺物出土状況(北西から)



P2002土層断面・遺物出土状況(北から)



SB2004-P2040 (柱穴) 土層断面(北から)



SB2004-P2147 (柱穴) 完掘状況(北西から)



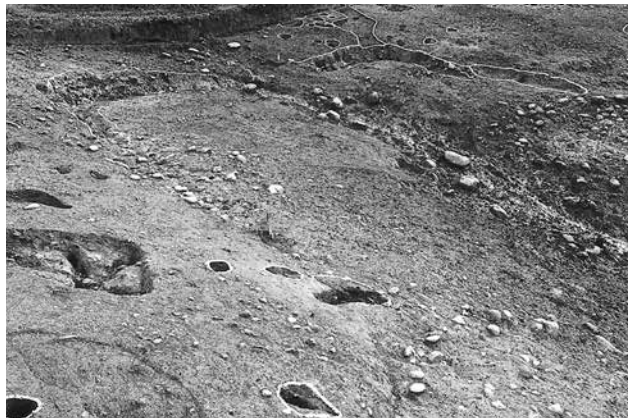
平成12年度(第3次)調査区全景①(東上から)



平成12年度(第3次)調査区全景②(北上から)



平成12年度(第3次)調査区全景③(北から)



谷部平坦面1完掘状況(北から)



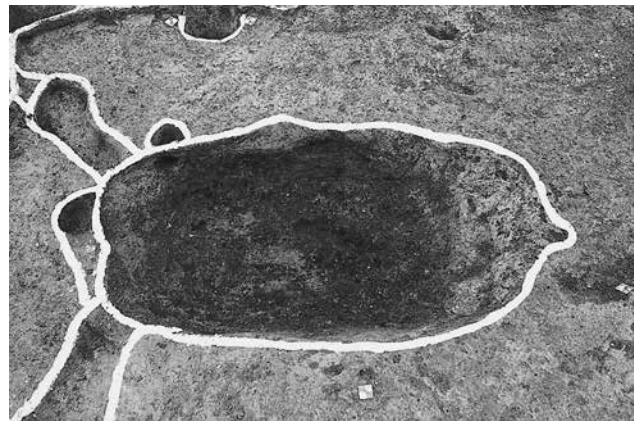
谷部中央完掘状況(北西から)



墓1 完掘状況(北西から)



墓1-SK3022土層断面・骨片出土状況(北東から)



墓1-SK3022炭検出状況(北西から)



墓1-SK3023土層断面(南西から)



墓1-SK3021土層断面(南西から)



墓1-SK3029遺物出土状況(北東から)



墓1-盛土除去後完掘状況①(南東から)



墓1-盛土除去後完掘状況②(北東から)



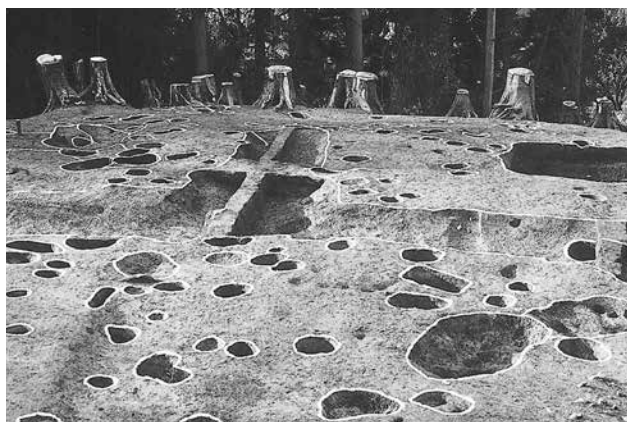
墓2完掘状況(南西から)



墓2-SK3002土層断面(北東から)



墓2-SK3002遺物出土状況(北東から)



墓2-SD3002土層断面(南東から)



墓3完掘状況(南東から)



墓3-SK3003土層断面(北東から)



墓3-SK3008土層断面(南から)



墓3-SK3009配石検出状況(北東から)



墓3-SK3007石検出状況(西から)



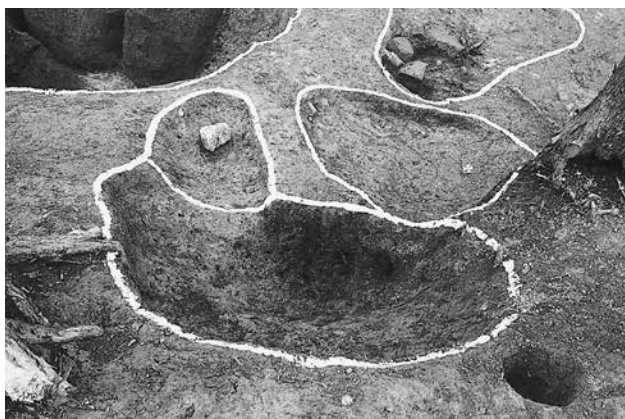
墓6-SK3030土層断面(西から)



墓6-SK3031土層断面(南西から)



墓6-SK3032土層断面(南西から)



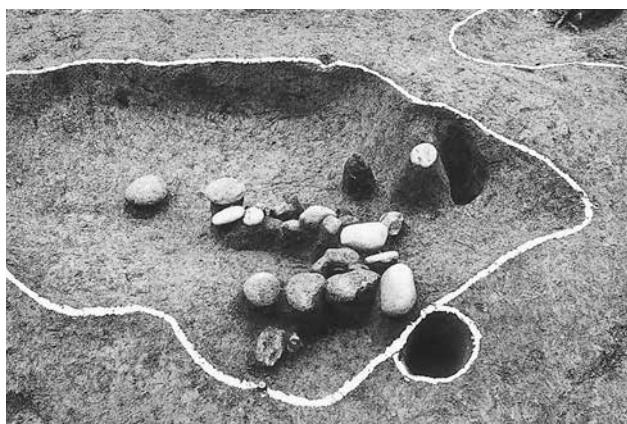
墓7-SK3014炭検出状況(東から)



墓7-SK3016石検出状況(北西から)



墓7-SK3017煉瓦検出状況(北西から)



墓8-SK3001石検出状況(北西から)



墓9周辺完掘状況(南東上から)



墓9-SX3003配石検出状況①(北西から)



墓9-SX3003配石検出状況②(北東から)



墓9-SX3003遺物出土状況(南から)



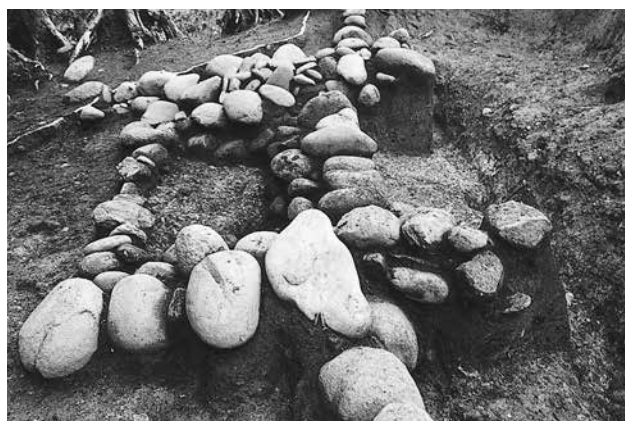
墓9-SX3003配石検出状況③(南東から)



墓9-SX3003石造物検出状況(北東から)



墓9-SX3003石造物・土師器皿出土状況(北西から)



墓9-SX3003配石検出状況④(南西から)



墓9-SX3003配石検出状況⑤(南東から)



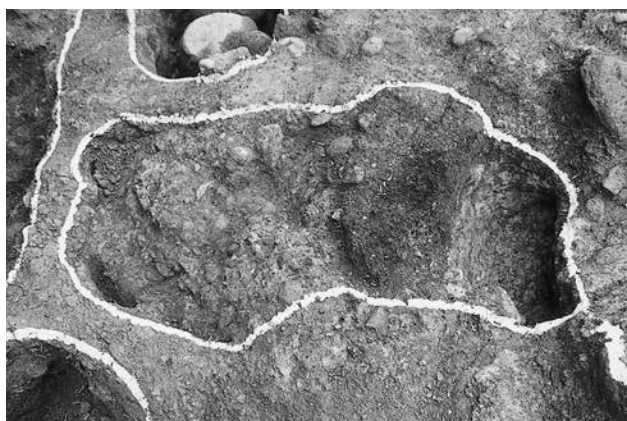
墓9-SX3003配石検出状況⑥(東から)



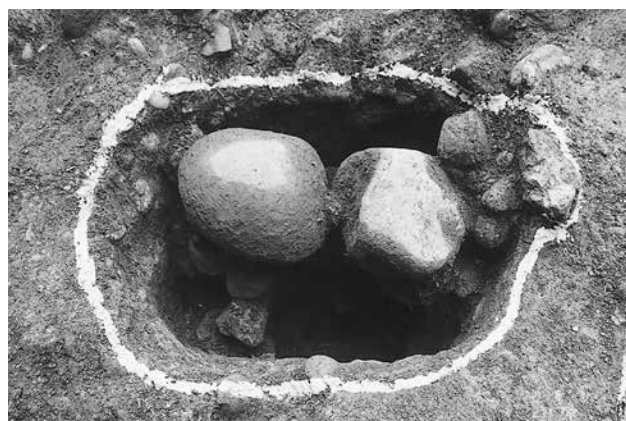
墓10-石区画1 検出状況(北西から)



墓11-SK3013土層断面(北から)



墓11-SK3019炭検出状況(南から)



墓11-SK3020石検出状況(西から)



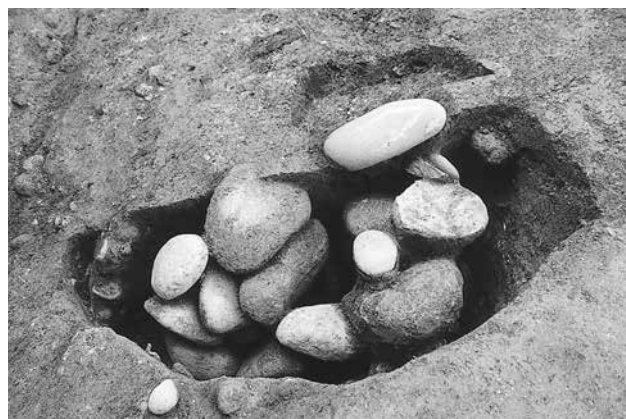
墓12-SX3001土層断面(北から)



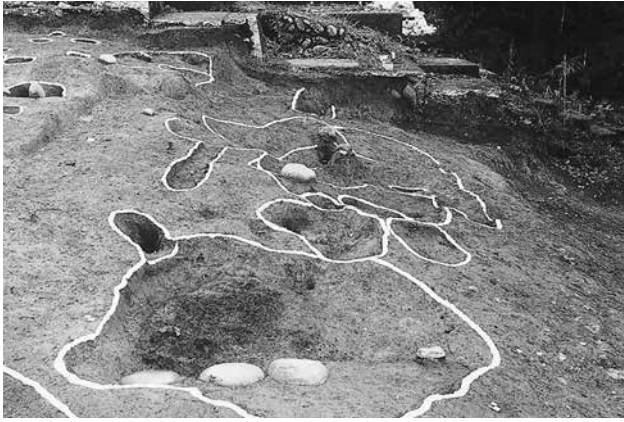
墓12-SK3004土層断面(南東から)



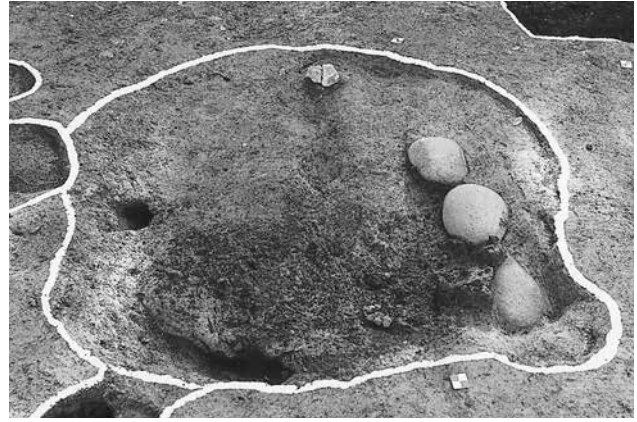
墓12-SK3011土層断面(南東から)



墓12-SK3012石検出状況(南東から)



墓13-SK3007・SK3024完掘状況(北東から)



墓13-SK3007炭検出状況(北西から)



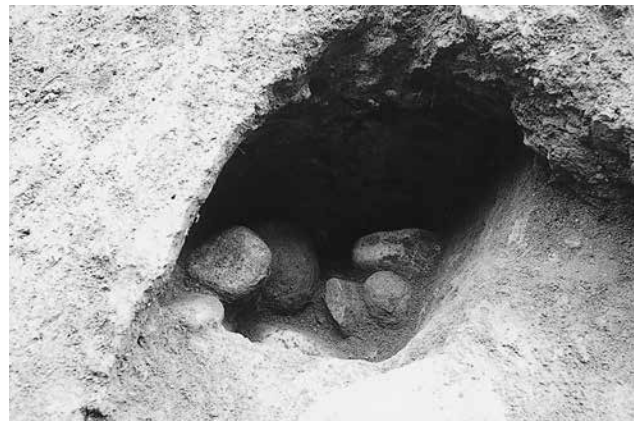
墓14-SK3005-a上部遺物出土状況(北東から)



墓14完掘状況(南東から)



墓14-SK3005-a炭検出状況(南西から)



墓14-SK3006石検出状況(南西から)



墓15-石区画2検出状況(北西から)

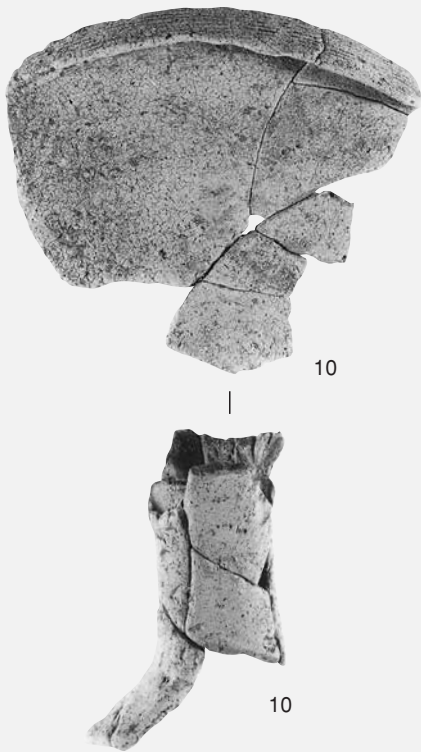
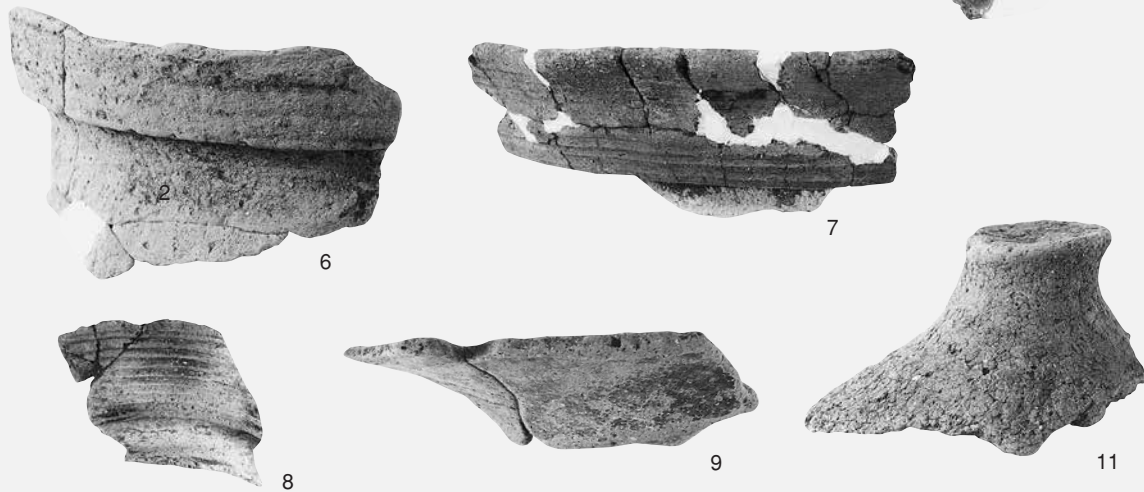


墓16完掘状況(南東から)

平成10年度（第2次）調査区 S12001



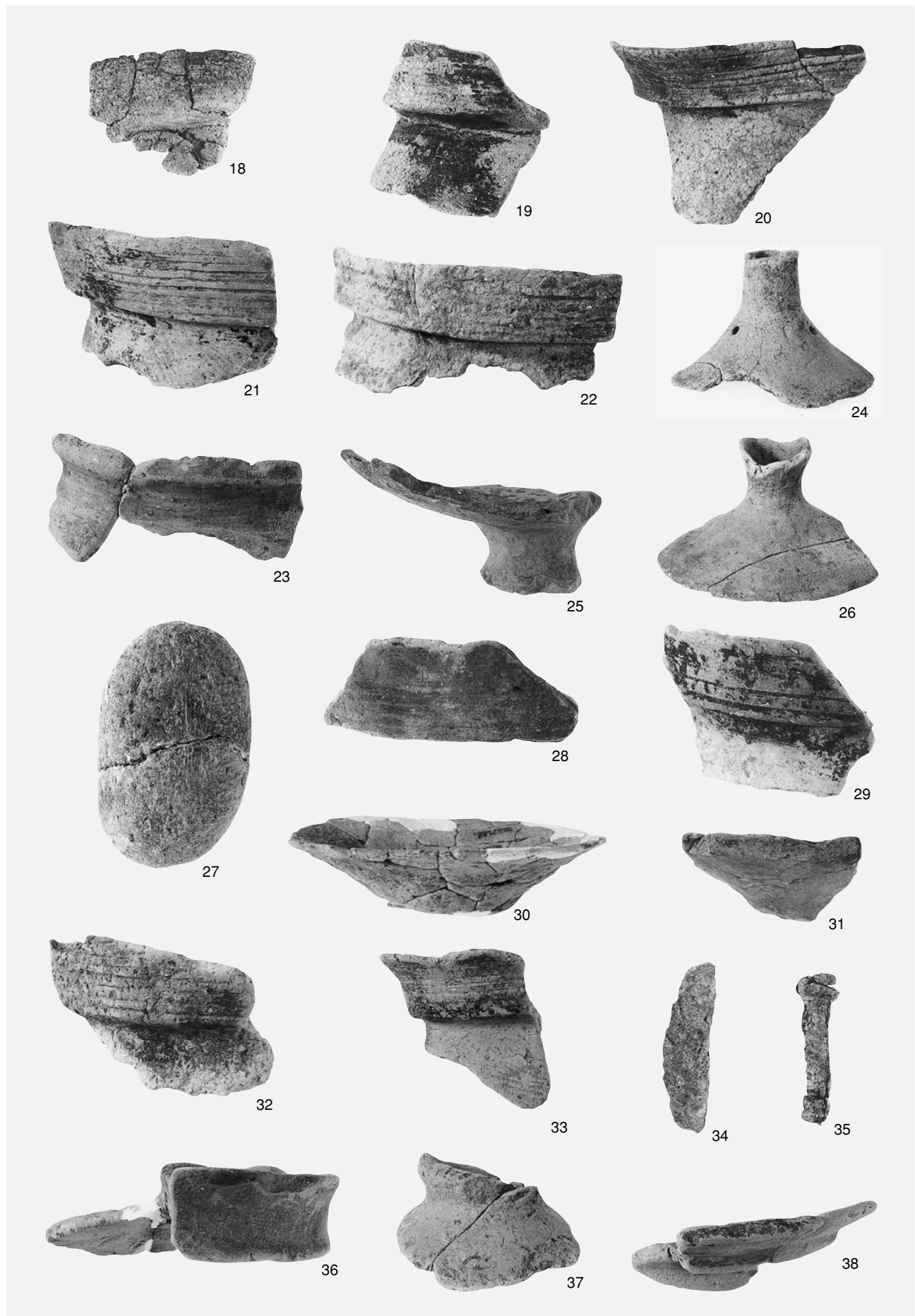
S12002



S12003



平成10年度（第2次）調査区出土遺物（1）



平成10年度(第2次)調査区出土遺物(2)

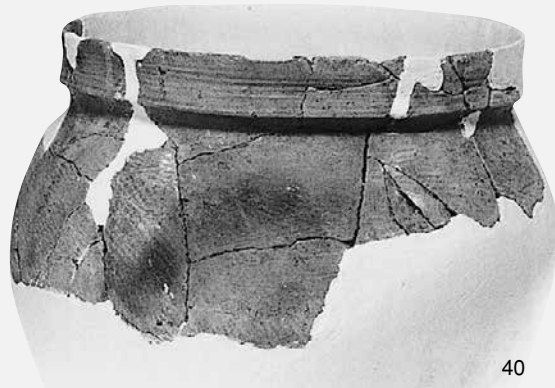
SI 2004



39



41



40



42



47



48

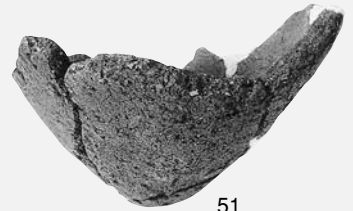
SI 2005



43



44



51



45



46



52



50



49



55



53



54



56

SB2001周辺



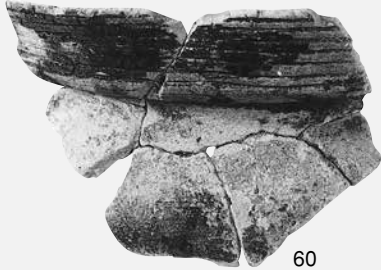
57



58



59



60



61



62



63



64



65

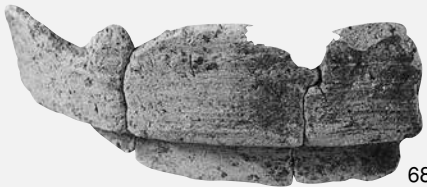


66



67

SB2002周辺



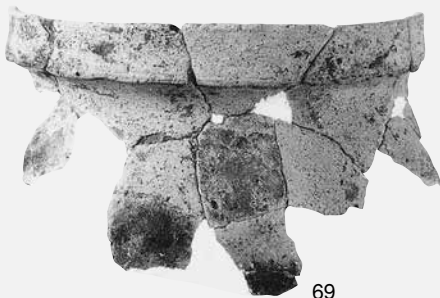
68



70



71



69

SB2003周辺



72



73



74



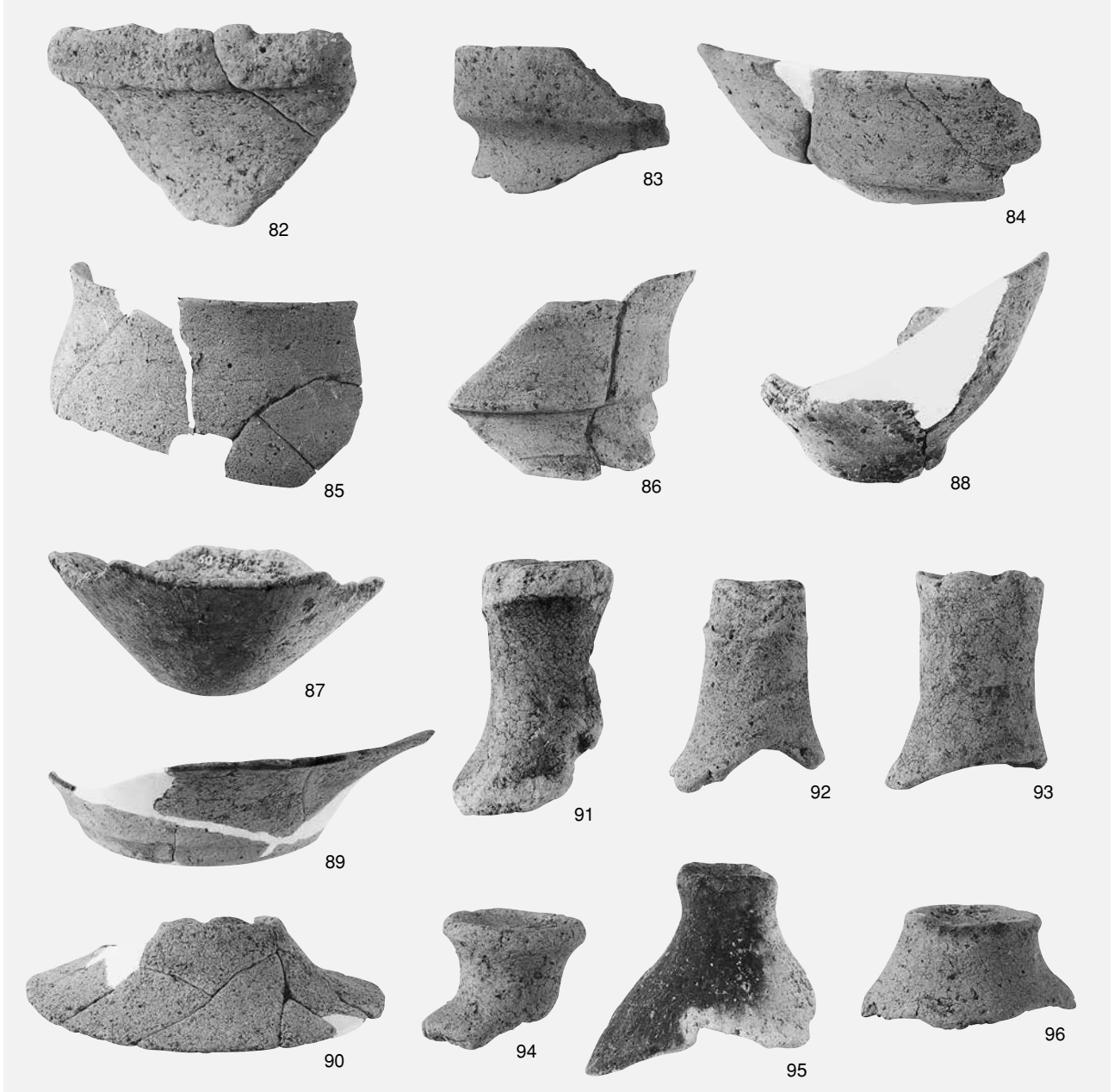
75



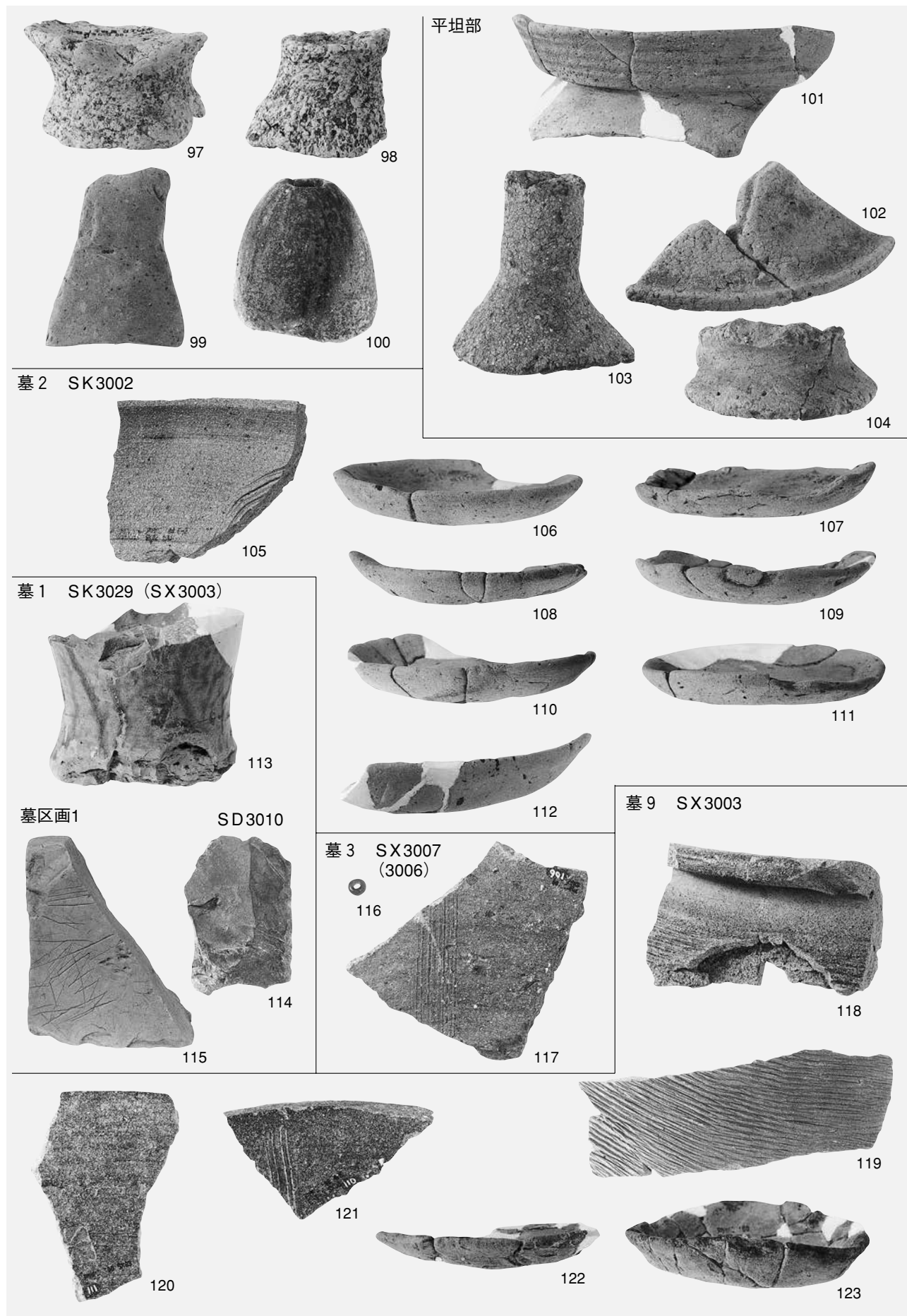
76



平成12年度（第3次）調査区 谷部



平成10年度（第2次）調査区出土遺物（5）・平成12年度（第3次）調査区出土遺物（1）





124



124



125



126



128



129

表土



127

SX3004



130



130

墓10 石列1



131

石区画1



132

表土



133

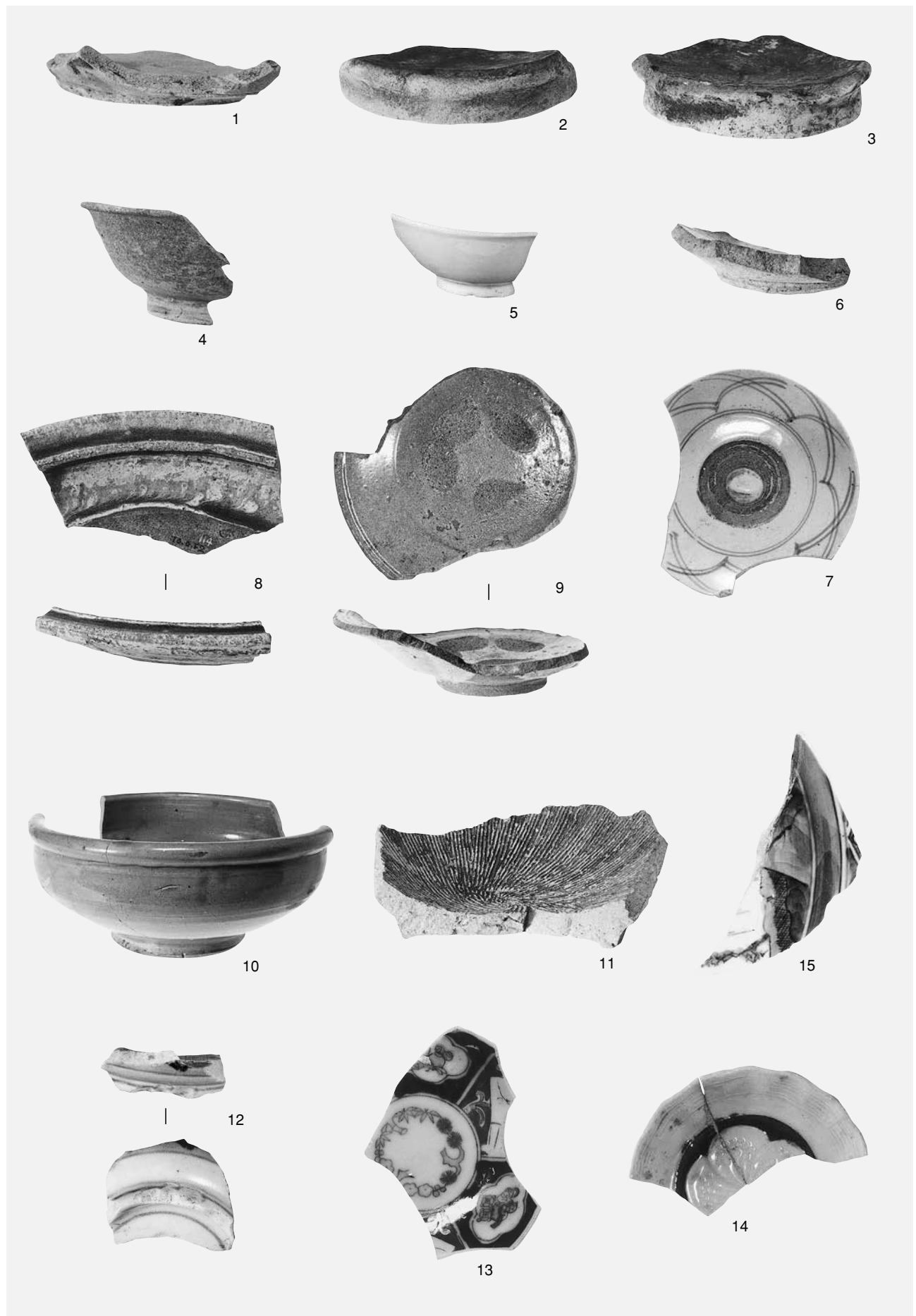
墓14 SK3005



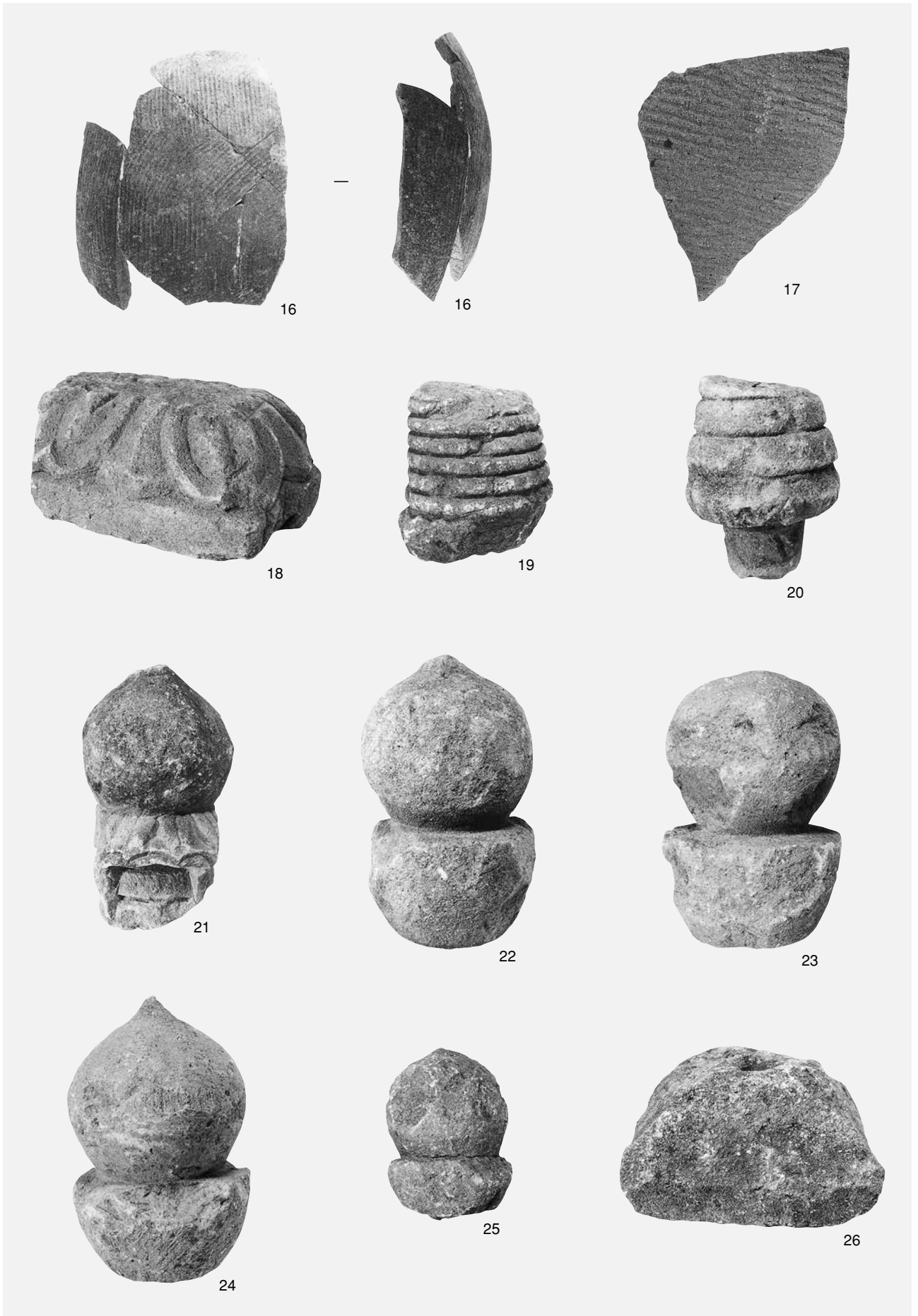
135



134



高尾城跡出土遺物(1)



高尾城跡出土遺物(2)



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36

報告書抄録

ふりがな	かなざわし ぬかだにいせき							
書名	金沢市 額谷遺跡							
副書名	道路改築（都）鈴見新庄線に係る埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	安中哲徳、横山 誠							
編集機関	財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 (TEL 076-229-4477)							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
ぬかだにいせき 額谷遺跡	いしかわけんかなざわ 石川県金沢 しぬかだにまち 市額谷町	17201	01104	36度 20分 26秒	136度 37分 38秒	19980430 ～ 19980831 20000817 ～ 20001222	850m ² 1,500m ²	道路改築（都） 鈴見新庄線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
額谷遺跡	集落	縄文	小穴		縄文土器、石器			
	集落	弥生～古墳	竪穴式建物、平地式建物、掘立柱建物、土坑、小穴、溝		弥生土器、土師器、鉄製品、石製品、ガラス小玉		弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての大型建物跡を持つ集落跡。	
	墓地	中世～近世	区画墓、土坑墓、配石墓、石組墓、石列、土坑、小穴、溝		土師器、珠洲焼、陶磁器、鉄製品、石製品、石塔類、骨片		中世～近世の墓地跡。溝・石で方形に区画された墓から石塔類を検出。焼土坑からは土師器皿が出土。	
要約	<p>遺跡は集落の背後に迫る富樫山地西北麓の先端部、標高59m～68m代を測る緩傾斜地に立地している。</p> <p>弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴系大型建物跡や布掘掘立柱建物跡等を持つ集落跡を確認し、弥生土器及び土師器などが出土した。</p> <p>また、中世～近世にかけての墓地跡を確認し、溝や石で方形に区画された区画墓や配石墓などを検出した。墓壙や墓の周辺からは石塔類や珠洲焼、陶磁器などが出土し、火葬が行われたと思われる焼土坑からは土師器皿がまとめて出土した。</p>							

引用・参考文献

本報告書を作成するにあたり以下の報告書・論文等を参考にした。(五十音順、敬称略)

- あ 石井 進ほか 1993 『中世社会と墳墓』 -考古学と中世史研究3- 名著出版
- か 納野義夫 1993 『石川県地質誌』 石川県・北陸地質研究所
金沢市史編纂委員会編 1999 『金沢市史』資料編19 考古 石川県金沢市
金沢市史編纂委員会編 2001 『金沢市史』資料編2 中世二 石川県金沢市
金沢市史編纂委員会編 1999 『金沢市史』通史編1 原始・古代・中世 石川県金沢市
木田清ほか 1997 『松任市宮永ほじ川遺跡』 石川県松任市教育委員会
木立雅朗ほか 1995 『扇が丘ハワイゴク遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- さ 澤田まさ子ほか 1998 『扇台遺跡・大額ギョウデン遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
珠洲市史編纂専門委員会 1976 『珠洲市史』第一巻、資料編、自然・考古・古代 石川県珠洲市役所
珠洲市史編纂専門委員会 1978 『珠洲市史』第二巻 資料編 中世・寺院・歴史考古 石川県珠洲市役所
珠洲市史編纂専門委員会 1980 『珠洲市史』第六巻 通史・個別研究 石川県珠洲市役所
- た 徳野裕子ほか 2001 『富樫館跡蝮土居地区 富樫館跡鬼ヶ窪地区』 石川県野々市町教育委員会
竹内理三 1981 『角川日本地名大辞典』(石川県) 角川書店
谷口宗治 1995 『額谷カネヤブ遺跡』 石川県金沢市教育委員会
田村昌宏 1992 『押野ウマワタリ遺跡』 石川県野々市町教育委員会
田村昌宏ほか 1996 『高橋セボネ遺跡』 石川県野々市町教育委員会
田村昌宏ほか 2002 『富樫館跡』『中世北陸の城館と寺院』 北陸中世考古学研究会
出越茂和ほか 1984 『額谷ドウシダ遺跡』 石川県金沢市教育委員会
- な 布尾和史ほか 2002 『金沢市藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ』 (財)石川県埋蔵文化財センター
- は 北陸中世土器研究会 1997 『中世北陸の寺院と墓地』 北陸中世土器研究会
北陸中世土器研究会 2000 『中世北陸の石塔・石仏』 北陸中世土器研究会
- ま 三浦純夫ほか 1986 『劔崎遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
三浦純夫 1990 「加賀鶴来における有紀年銘五輪塔とその周辺」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会
- や 安 英樹 1998 『額谷遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
山崎克巳ほか 1993 『一の谷中世墓群遺跡』本文編・図版編・観察表編・付図編・写真図版編 静岡県磐田市教育委員会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉田 淳ほか 1989 『押野タチナカ遺跡・押野大塚遺跡』 石川県野々市町教育委員会
- わ 若林善三郎ほか1991 『石川の地名』 平凡社

金沢市 額谷遺跡

発行日 平成18(2006)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 ハヤシ印刷紙工株式会社